

本覚遺跡の研究

— 関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について —





全ては、矢部素子さんが採集した6点の石棒から始まった。



本覚遺跡は、男体山地の山間にある。





発掘調査の期間は、2001年12月22日から翌年1月2日まで。



多量の遺物を記録して取り上げる。



発掘をする人。それを見守る人。



発掘を記録が追いかける。



土壌を水洗して細かな遺物を選別する。



3区の遺物出土状況。前方中央に軟質砂岩の砥石がかたまる。



9区の遺物出土状況。後方中央に砥石が見える。



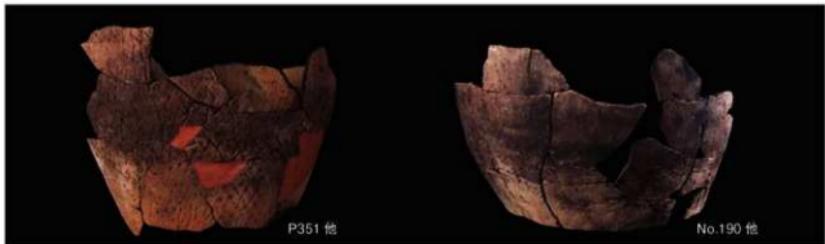
第1号土坑の調査。骨片はビニール袋に入れる。



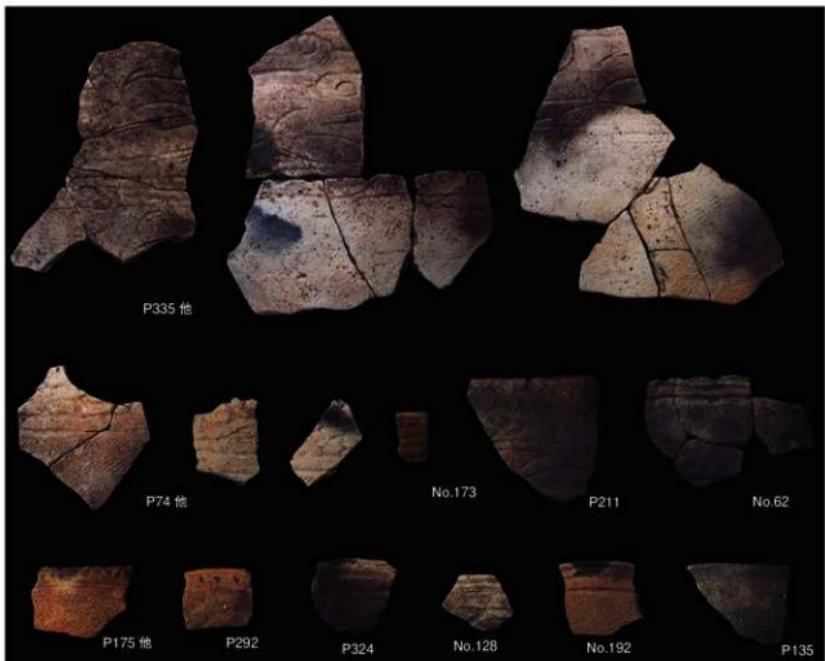
II - 24区の遺物。石棒、砥石、石鏃が並ぶ。



8区の遺物。台付鉢形土器の一部であろう。



II-19区から出土した縄文時代晩期の粗製土器。P 351他は埋設土器であったと推定される。



縄文時代晩期の土器の一部。石棒製作は、晩期中葉の大洞C 1式の時期と考える。



すりいし
磨石の一部。多孔質安山岩はほぼ全てが石器。

たれかきり
垂 膝 の未成品もある。

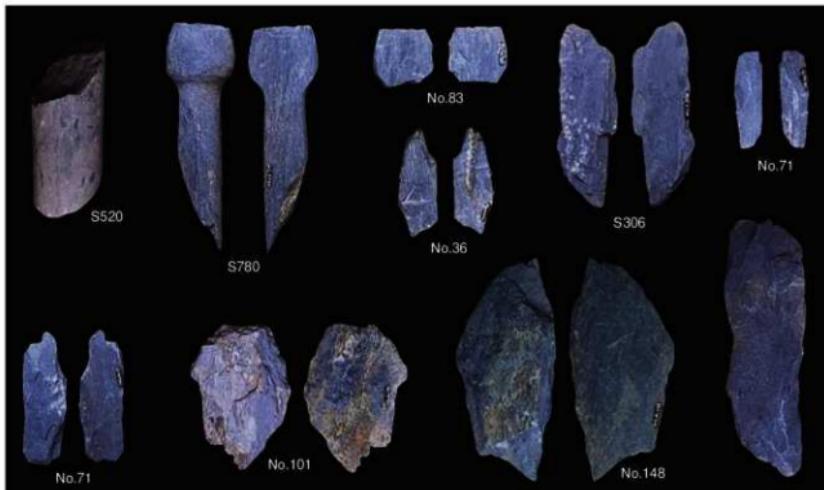
なぜかガラス玉が検出された。



第1号ピット上部からは石棒頭部が出土した。



第2号ピット中部からは砾石が出土した。



発掘調査で出土した石棒の破片の一部。石材は全て粘板岩であるが、S 520のみ色調等が異なる。



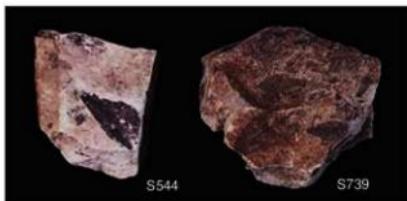
たたきいし
砾石の一部。打ち欠いて作られた右下3点を、石棒製作の敲打具と考える。



砾石の一部。浅川層の軟質砂岩の礫が利用されている。



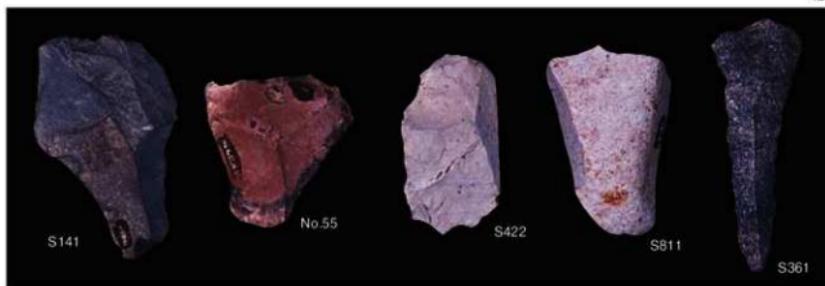
荒砥に相当する砾石の表面。大粒の砂粒の露出面が削られており、そこに擦痕も残る。



軟質砂岩に含まれる化石。



石錘の製作痕。溝の周囲に切り傷が残る。



削器の一部。鋭かった側縁が、丸みを帯びるほどに磨耗している。



S811 左側線



S141 右側線



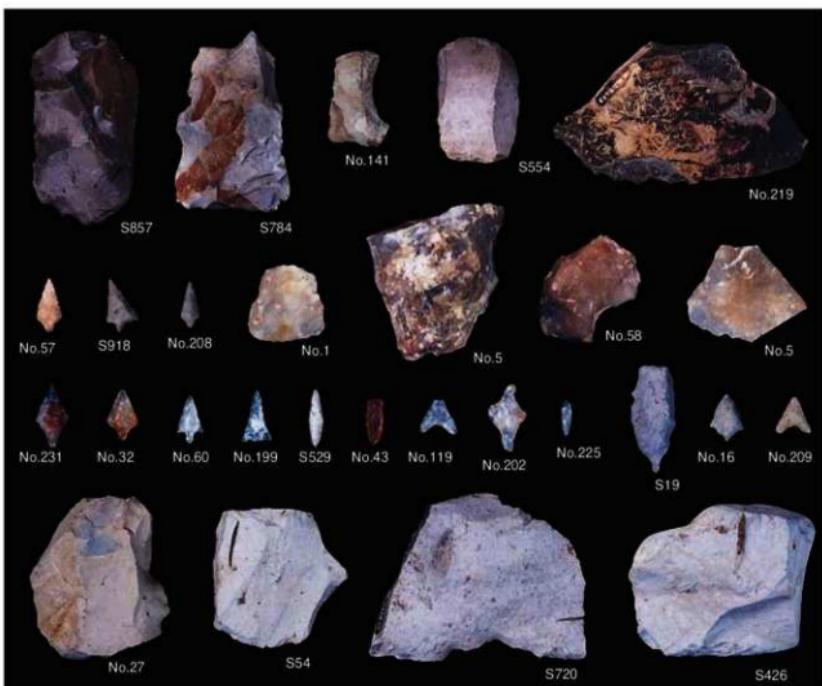
S361-右側線



No.55 左側線



鋸のような運動で付いた擦痕が残る。石錘の溝を切る加工工具としても使用されたが、同じ粘板岩を石材とする石棒製作の擦切具と考える。



礫の状態のまま使用された敲石が多量に出土しており、これらの石器製作に使用されたと考えられる。

本覚遺跡の研究

—関東地方東部における縄文時代晚期の石棒製作について—

序にかえて

2001年8月に父が他界し、そろそろ1箇月が経とうとする頃合に、矢部素子さんの訪問を受けた。金沙郷町にお住まいで、本覚遺跡の上にお宅があるという。周囲から採集した遺物を持参されていた。「金沙郷村史」が、私のところに辿り着く手掛かりであったらしい。1980年代の当時、父が金沙郷村役場に勤務していたこと也有って、村史編纂の手伝いをした。素子さんの早口の説明を聞きながら、遺物を見せていただく。実に多くの石器を採集されているのにも驚かされたが、なによりも作り掛けの石棒が目に留まる。6点があり、しかも狭い範囲から採取されたものだという。

後日、矢部さんのお宅を訪問して、現地を見せていただく。地表を入念に観察しても、石棒の石材である粘板岩の破片は少ない。しかし、畑には板状をした軟らかい砂岩が多量に積み上げられていて、そのほとんどが砾石のようだ。素子さんの義父にあたる矢部午壽さんにお会いする。話の中で、午壽さんが今年に奥様を亡くされたことを知る。まるで、天上の誰に操られているかのようにも感じられた。私にとっては、奇縁と表現させていただく他ない。帰りには、喪中の年末年始に発掘調査を実施するという計画を組み立て始めていた。



発掘調査には、多くの方々にご協力をいただいた。全員が揃って喪中のわけもなく、年末年始の忙中を割いての参加である。発掘調査の規模は予想を大きく上回り、整理報告の計画を考え直す必要に迫られた。幸いにも、大久保忠保考古学奨励金公募研究Bに採択していただき、本覚遺跡発掘調査報告書に相当する本書の刊行が実現した。多くの縁に支えられながら研究できたことが、有難く嬉しい。

2005年3月31日

鈴木 素行

例　　言

- 1 本書は、茨城県久慈郡金砂郷町（現在 常陸太田市）下宮河内 1,008 に所在する本覚遺跡について実施した発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、本覚遺跡における石棒製作の確認を目的とする。
- 3 発掘調査の企画にあたっては、川崎純徳氏にご指導をいただいた。
- 4 発掘調査の実施にあたって地権者の矢部午壽氏には、発掘調査をご快諾いただくとともに、ご家族の方々には全般にわたりご高配を賜った。
- 5 発掘調査の期間は、2001 年 12 月 22 日から 2002 年 1 月 2 日までである。
- 6 発掘調査の主体者及び担当者は、鈴木素行である。
- 7 発掘調査の参加者は、次のとおりである。

相田美樹男、秋山ゆかり、荒藤克一郎、飯島一生、飯島優香、石井聖子、伊藤千洋、稲田健一、稲田由加里、
稲田 均、色川順子、岩間 正、岩間敦子、植竹涼子、及川 広、大内辰雄、荻沼隆一、勝又五子、鶴志田祐一、
鶴志田義見、鶴志田弘子、鶴志田馨、鶴志田弥生、川口武彦、川島尚宗、木村孝市、工藤幸尚、窪田恵一、
斎藤由美子、佐川正孝、佐々木義則、佐々木博子、篠原とよ子、柴田 徹、鈴木素行、関口 満、長洲俊夫、
仲村浩一郎、中村哲也、中村紀大、長谷川聰、早川麗司、吹野富美夫、野内智一郎、矢部素子、和田清典、
和田喜昭
- 8 整理作業の協力者は、次のとおりである。

飯島一生、色川順子、片西登美江、篠原とよ子、早川麗司
- 9 発掘調査で検出された動物遺存体については、小宮 孟氏にご教示をいただいた。
- 10 発掘調査で検出された植物遺存体については、松谷暁子氏にご教示をいただいた。
- 11 本書は、2002 年度大久保忠和考古学奨励金公募研究 B の助成を得て刊行するものである。
- 12 本書は、鈴木素行が編集した。
- 13 本書は、鈴木素行と柴田 徹による共同研究の成果であり、VI を柴田 徹が執筆し、その他を鈴木素行が執筆した。
- 14 卷頭の遺物接写は、飯島一生氏の撮影によるものである。また、扉の写真は、横倉要次氏の提供によるものである。
- 15 発掘調査及び整理報告にあたり、次の方々及び機関にご援助を賜った。記して感謝申し上げる。(敬称略・50 音順)

会沢通男、青山俊明、环恵美子、池田晃一、井坂こずえ、磯野典子、江幡武雄、海老澤稔、大津郁子、尾島忠信、
櫻村宜行、片西登美江、神山陽子、鶴志田第二、川池光子、川又清明、瓦吹 堅、桑原さと子、後藤みち子、
小林三郎、小松崎恵子、酒井広子、白石真理、鈴鹿良一、鈴木裕芳、鈴木正明、蓼沼香未由、寺門千勝、中村信博、
中村紀男、生田日和利、西野陽子、西野 保、根本康裕、人見よね子、森鶴秀一、横山 仁
- 16 大宮町（現在 常陸大宮市）歴史民俗資料館、金砂郷町教育委員会、鎌ヶ谷市教育委員会、土浦市教育委員会、
日立市郷土博物館、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、福島県文化財センター白河館、藤岡町歴史民俗資料館、
松戸市立博物館、明治大学文学部考古学研究室

目 次

I 本覚遺跡の位置	1	4 石棒製作の工具.....	68
II 本覚遺跡の調査	4	5 おわりに.....	72
1 発掘調査の目的と方法	4		
2 発掘調査の進行	4		
3 遺物の出土状況	6		
4 検出された遺構	8		
III 本覚遺跡の土器	11		
1 早・前期の土器	11	1 はじめに.....	73
2 中期の土器	11	2 石棒の石材.....	73
3 後期の土器	13	3 石棒以外の出土石材の採取地について.....	75
4 晩期の土器	15	4 まとめ.....	75
5 後・晩期の粗製土器	26		
6 土製品	28		
IV 本覚遺跡の石器	32		
1 石 棒	32	V 茨城県北部における石棒製作について	79
2 磨製石斧	39	1 はじめに.....	79
3 石 鐵	39	2 純文時代晚期の遺跡群.....	79
4 石 錐	43	3 遺跡群の石棒.....	80
5 櫛 器	45	4 本覚遺跡の選地.....	82
6 楔形石器	45	5 関東地方東部における石棒製作.....	82
7 削 器	45		
8 打製石斧	49		
9 磨 器	49		
10 石 錘	50		
11 敲 石	50		
12 磨 石	55		
13 砥 石	55		
14 加工された軟質砂岩	63		
15 凹 石	63		
16 その他	64		
V 本覚遺跡における石棒製作について	65		
1 はじめに.....	65	第1図 茨城県北部における本覚遺跡の位置.....	1
2 石棒製作の時期.....	65	第2図 本覚遺跡付近の地形.....	1
3 石棒製作の痕跡.....	67	第3図 本覚遺跡採集の土器.....	2
		第4図 矢部素子氏による遺物の出土状況の記録.....	3
		第5図 調査区の区画と表記.....	4
		第6図 調査区の位置と地形.....	5
		第7図 基本層序.....	6
		第8図 遺物の出土状況と遺構の位置.....	7
		第9図 第1号土坑(SK 1)	9
		第10図 第1号ピット(Pit 1)	9
		第11図 第2号ピット(Pit 2)	9
		第12図 第1号遺構ピット(SX 1 P).....	10
		第13図 埋設土器.....	10
		第14図 土器実測図1	12
		第15図 土器実測図2	13
		第16図 土器実測図3	14
		第17図 土器実測図4	16
		第18図 土器実測図5	17
		第19図 土器実測図6	18
		第20図 土器実測図7	19
		第21図 土器実測図8	20
		第22図 土器実測図9	21
		第23図 土器実測図10	22
		第24図 土器実測図11	23
		第25図 土器実測図12	24
		第26図 土器実測図13	25

表 目 次

第27図 土器実測図14	26
第28図 土器実測図15	27
第29図 土製品実測図	28
第30図 石器実測図1 矢部素子氏採集石棒(1)	33
第31図 石器実測図2 矢部素子氏採集石棒(2)	34
第32図 石器実測図3 石棒(1)	35
第33図 石器実測図4 石棒(2)	36
第34図 石器実測図5 石棒(3)	37
第35図 石器実測図6 磨製石斧	39
第36図 石器実測図7 石鎚(1)	40
第37図 石器実測図8 石鎚(2)	41
第38図 石器実測図9 石鎚(3)	42
第39図 石器実測図10 石錐	43
第40図 石器実測図11 振器・楔形石器・削器(1)	44
第41図 石器実測図12 削器(2)	46
第42図 石器実測図13 削器(3)	47
第43図 石器実測図14 削器(4)	47
第44図 石器実測図15 削器(5)	48
第45図 石器実測図16 打製石斧・礫器	49
第46図 石器実測図17 石錐	50
第47図 敲石II類の使用痕位置の分類	51
第48図 石器実測図18 敲石・磨石(1)	52
第49図 石器実測図19 敲石・磨石(2)	53
第50図 石器実測図20 敲石・磨石(3)	54
第51図 石器実測図21 敲石・磨石(4)	55
第52図 石器実測図22 砥石(1)	56
第53図 軟質砂岩の分類	56
第54図 石器実測図23 砥石(2)	57
第55図 石器実測図24 砥石(3)	58
第56図 石器実測図25 砥石(4)	59
第57図 石器実測図26 砥石(5)	60
第58図 石器実測図27 砥石(6)	61
第59図 石器実測図28 加工された軟質砂岩(1)	62
第60図 石器実測図29 加工された軟質砂岩(2)	63
第61図 石器実測図30 その他の石器	64
第62図 後期後業の石棒	65
第63図 石棒の頭部形態	66
第64図 晩期中業の石棒	67
第65図 本覚遺跡における石棒製作の工程	68
第66図 本覚遺跡における石棒製作の工具	69
第67図 敲打段階に伴う敲打具の類例	69
第68図 遺物試料・産地試料の採取位置	74
第69図 茨城県北部における縄文時代晩期の遺跡分布	80
第70図 小野天神前遺跡・小田倉遺跡・金沢沢遺跡・上の代遺跡の石棒未成品	81
第71図 宮脇A遺跡の石棒未成品	82



I 本覚遺跡の位置

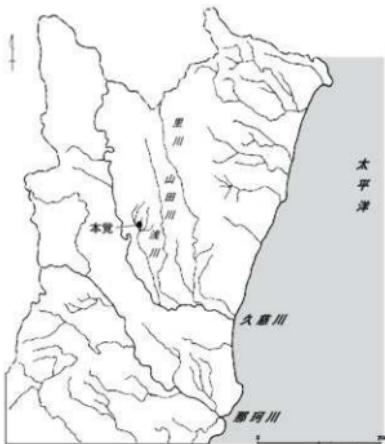
遺跡の所在 本覚遺跡は、2001年に発掘調査を実施した時点では茨城県の久慈郡金砂郷町下宮河内の表記を所在地としていた。2004年に金砂郷町は常陸太田市に併合され、現在では常陸太田市下宮河内の表記を所在地とする。

遺跡の立地 茨城県北部には、久慈川を境界として西側に八溝山地、東側に阿武隈山地と呼称される山地が展開する。阿武隈山地も、久慈川の支流を境界として細別されており、里川を境界として東側が多賀山地、西側が久慈山地。さらに久慈山地は、山田川を境界として東側が東金砂山地、西側が男体山地と呼称される。この男体山地の中を、これも久慈川の支流である浅川という小河川が流れている。浅川の上流が、赤土川、中沢川という支流を集める三叉の合流地点周辺が常陸太田市下宮河内に相当する(第1図)。

浅川と中沢川に挟まれた南向きの丘陵上の平坦部に、本覚遺跡は立地している。標高は83~87m。現況は、一部が宅地、大部分が畠地として利用されている(第2図)。

遺跡の周知 本覚遺跡が初めて記載されたのは、1964年に刊行された「茨城県遺跡地名表」[茨城県教育委員会1964]である。これに先立つ遺跡の分布調査が、全県下で実施されており、当時の常陸太田市及び久慈郡の地域は、関根忠邦氏を班長とする調査班が担当した。調査を記録した遺跡台帳を見ると、1962年12月22日に本覚遺跡を訪れている。「遺跡の概要」の項目には、「現在畠地になっている周囲より露って大きな礫が数多く掘り出され道路に敷かれた。現在も未だ幾分残っている様模であるが量は少ない。特に雨後の畠には石鎚及びその破片、土器片等が多く見られる」、「出土品」の項目には、「石器(分銅形石斧、定角式磨製石斧、四石、石錐一多、石鎚一多)土器(縄文、弥生)」と記述されている。これをもとに、「茨城県遺跡地名表」の「遺物」の項目に「石錐、石鎚、繩文式土器、弥生式土器」と記載され、その後に改訂された「茨城県遺跡地名表」[茨城県教育委員会1970・1975]にも引用され続けることになる。

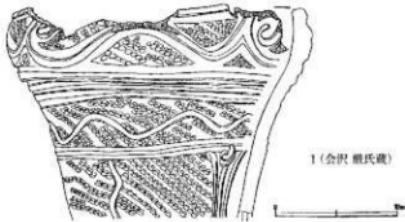
村史編纂の調査 「金砂郷村史」編纂のための原始・古代分野の調査は、1982年から開始された。これは、遺



第1図 茨城県北部における本覚遺跡の位置



第2図 本覚遺跡付近の地形(「030」が周知の埋蔵文化財包蔵地としての本覚遺跡の範囲 黒丸が発掘調査地点)



第3図 本覚遺跡採取の土器（中川1989）より引用）

跡の分布調査を基本とする。未知の遺跡を調査するとともに、周知の遺跡についても、遺物を採取することで、より詳細な内容を明らかにすることが必要であった。本覚遺跡へ何度も訪ね、その都度遺物を採取している。「金砂郷村史」には、小字名から「本学遺跡」と表記して、「分布状態は、縄文中期の土器、石器、石皿、凹石などが確認され、密に分布している。なお1点、縄文前期の土器がみられた」[中川1989]と記述された。遺物は、67点の土器、3点の石器の実測図が掲載されている。実測図の土器には、縄文時代前期前業の「花積下層式」が1点あり、他は全て中期中・後葉の土器群（第3図）で占められている。石器は3点とも石器であり、全て無茎錐に分類されるものであった。採取された遺物からは、関根忠邦氏が記載した「弥生」については確認できず、丘陵上の大部分に縄文時代中期の集落跡を推定した。

新たな知見 2001年9月5日、矢部素子氏が本覚遺跡から採取した資料を持参して、訪ねて来る。その資料には、縄文時代晚期の土器とともに、有茎錐が多量にあり、石棒の未完成品が含まれていたのである。示された見取り図（第4図）を見ながら説明をうけた。石棒の未完成品は、花壇を作るために掘った2m四方ほどの範囲からまとまって検出されたという。この地点は、「金砂郷村史」の分布調査の当時、葡萄畑が網で囲まれていて、立ち入りのできない部分であった。本覚遺跡に、縄文時代晚期の遺跡が複合するのはほとんど確実となり、石棒が製作された遺跡であることも推定されたのである。

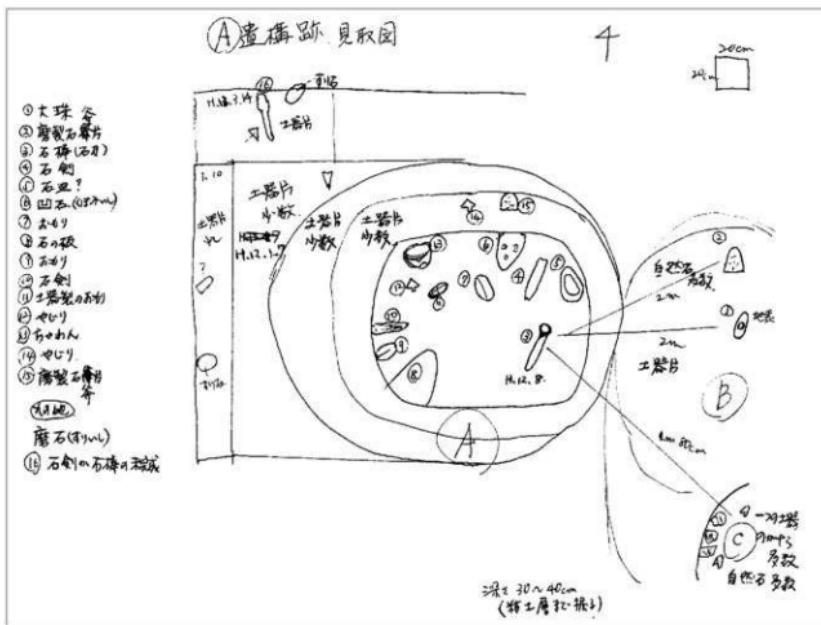
実は後日に、遺跡台帳の「出土品」の「所蔵・保管場所」の項目には、「矢部金之介」と記載されていたことに気付く。果たして尋ねてみると、「矢部金之介」とは、矢部素子氏の義祖父に相当する方であった。

保管されていた他の資料も見せていただいたが、関根

氏が「弥生」と記載した土器を特定することはできない。ただ、関根氏が執筆した「水府村史」[関根・野上1971]に、「薄手で縄目の文様はみられず五条ほどの櫛目と波状の櫛目文様からなっている」という解説とともに「弥生式後期土器 水府村天下野堀之内出土」として写真が掲載された土器は、不鮮明ながら弥生時代後期の土器ではないと判断できる。おそらくは櫛歯状工具により条線文が施された縄文時代晚期の粗製土器を誤認したものであり、本覚遺跡についても同じく誤認であったことを考えるのである。

調査に至る経緯 9月17日午前、矢部素子氏を訪ね、石棒の未完成品が検出されたという地点を観察する。見取り図に記入されていた「石の板」は想定のとおり砥石であり、周囲からは軟質砂岩を石材とする砥石が多量に出土している。石棒の石材である粘板岩は、小破片が僅かに採集されたにすぎない。地権者である矢部午壽氏にご挨拶し、年末年始の発掘調査の実施について内諾をいただく。午後、茨城県教育文化課を訪ね、学術調査の手続きについて教えを受ける。

以下には、日付を追いながら調査の手続き等の準備を記録しておく。10月15日、金砂郷村教育委員会に発掘届けを提出する。11月17日、金砂郷教育委員会より、10月24日付けで茨城県教育委員会の発掘許可があったとの通知が届く。11月10日、「本覚遺跡発掘調査の手引き－一 石棒製作址の確認調査－」を発行し、発掘調査への参加者を募る。11月12日、金砂郷教育委員会を訪ね、調査地点へ標高を移動するための原点探しを依頼する。11月26日、金砂郷教育委員会を訪ね、原点の位置と標高について教えを受けるとともに、遺跡付近の地図をいただく。12月2日、原点から調査地点まで標高を移動する。12月8日、「本覚遺跡発掘調査の手引き・Ⅱ 一石棒製作址の確認調査－」を発行し、発掘調査参加者に事前説明会を実施する。12月19日、発掘器材を搬入する。グリッドを設定し、調査区を地図に落とし込むための基準杭を測量する。12月22日から発掘調査を開始した。



第4図 矢部素子氏による遺物の出土状況の記録

参考文献

- 茨城県教育委員会 1964 「茨城県遺跡地名表」 茨城県教育委員会
 茨城県教育委員会 1970 「茨城県遺跡地名表」 茨城県教育委員会
 茨城県教育委員会 1975 「茨城県遺跡地名表」 茨城県教育委員会
 茨城県教育委員会 2001 「茨城県遺跡図録」 茨城県教育委員会
 榊山良久・海野悟 1989 「地形と地質」「金沙郷村史」 金沙郷村
 鈴木基行 2002 「本覚遺跡－一発掘調査までの日々－」「第24回研究発表会資料」 茨城県考古学協会
 関根忠邦・野上平 1971 「繩文・弥生時代」「水府村史」
 水府村役場
 中川深 1989 「繩文時代の金沙町」「金沙郷村史」 金沙郷村



発掘前の本覚遺跡（白い棒が立つ地点から石棒の未成品が出土した。頭上には葡萄栽培に利用された針金が格子状に組まれていて、広範囲を俯瞰する写真的撮影はできない。2001年9月17日撮影）

II 本覚遺跡の調査

1 発掘調査の目的と方法

調査の目的 本覚遺跡から採集された石棒は、全て未完成と捉えられるものである。これらが、包含されていた遺跡の実態を調査し、時間的な位置付けを明らかにするとともに、本覚遺跡における石棒製作の有無を確認することを第1の目的として、発掘調査を企画した。採集された石棒には、敲打段階と研磨段階の欠損品と推定されるものがある。まずは発掘調査により、これらの工程段階の作業痕跡を検出することが、採集された資料の評価を確固としたものにする。

調査の方法 一般的な発掘調査の方法に加えて、一部に水洗選別法を採用した。敲打段階の作業痕跡としては、剥離された微細な碎片が想定されることから、これを検出するためには、最低でも5mm方眼の篩を使用した土壤の水洗選別が必要となる。

調査区の設定 矢部素子氏が資料を採集した範囲を「矢部既掘坑」と呼び、石棒がまとまって見つかった部分を中心に調査区を設定する。「矢部既掘坑」は、埋め戻されてはいてもまだ窪んでおり、その範囲を地表面から捉えることができた。土層堆積を観察するためのベルトの交点が「矢部既掘坑」の中心部にくること、葡萄栽培のために設置されたポールを避けることを条件としながら、10m四方の大グリッドを1つ設定する。グリッド軸の方位は任意。これを2m四方の小グリッドに分割した。小グリッド番号は、北西隅が「1区」、対角に位置する南東隅が「25区」という表記になるように割り振ることにした(第5・6図)。

調査は、当初に設定した大グリッド内で終始すると想定していたが、予想を上回る参加者の協力が得られたこともあり、遺物の分布状況を考慮しながら、調査区を拡大した。小グリッド2区画分が北側に突出することになったので、これらが所属する大グリッドを「II」と表記することにした。つまり、表記は省略してあっても、当初に設定した大グリッドは「I」に相当することになる。

小グリッドの土層堆積は、北壁と西壁で観察する。そのため、小グリッドの南側と東側に幅20cmのベルトを設定して掘り進めることにした。



第5図 調査区の区画と表記

水洗選別の試料 掘り上げた全ての土壤を対象とした水洗選別はできないことから、発掘調査による遺構及び遺物の検出状況を勘案しながら、水洗選別の試料を選定する。遺物包含層については、3区南側、4区南側、7区東側及び南側、8区東側及び南側のベルト部分の第Ⅲ層土壤を、遺構については、第1号土坑、第1号ピット覆土を水洗選別の試料とし、5mm方眼の篩上の残留物を検討の対象とした。

2 発掘調査の進行

発掘調査は、2001年12月22日から開始し、12月31日まで継続、2002年1月1日を休んで1月2日に終了した。調査の期間は、実質11日間である。

12月22日 晴。テントと炊事場を設営。4・7・8・9・12・13・14・19区について調査を開始する。各区とも第Ⅰ層を掘り上げる。「矢部既掘坑」の搅乱部分を取り除き、基本土層を確認する。第Ⅲ層の黒褐色土層が包含層の中心と想定される。

12月23日 晴。4・7・8・9・12・13・14・19区は第Ⅱ層を掘り進む。剥片類が多量に含まれている。第Ⅱ層には搅乱層の可能性があり、全ての出土位置を記録していると、第Ⅲ層が調査できなくなることから、剥片類については一括で取り上げることにする。比較的大きな礫類



第6図 調査区の位置と地形

については、配石造構の可能性を考慮して残すことにしてしめた。7・8・9区より北側に包含層の中心が想定されたことから、5・II-24区について調査を開始する。また、19区の南側に造構のような落ち込みが見られたので、隣接する23区について調査を開始する。

12月24日 晴。4・7・8・9・12・13・14・19区は第Ⅲ層を掘り進み、遺物出土状況の写真と図面の記録を開始する。8区には、焼けた骨の細片が集中して検出されたことから、他の区画の調査者にも注意を促す。23区は第Ⅰ層以下にも深く搅乱が及ぶことから、調査を中止する。

10区について調査を開始する。

12月25日 晴。II-19区について調査を開始する。この時点で、最終的に調査区の範囲となる全てに手が着いた。23区については埋め戻した。他の区画については、第Ⅲ層を掘り進めながら、遺物出土状況を写真と図面に記録する。砥石あるいは、その素材と考えられる軟質砂岩が多量に検出される一方で、石棒製作に伴う粘板岩の破片は散見される程度に過ぎない。

12月26日 晴。5・8・9区は出土状況の図面が完了した遺物を取り上げる。3・7・II-24区は遺物出土状況の

写真を撮影する。II-19区はまだ第I層を掘り進む段階である。

12月27日 晴。19区の土層断面の観察により、第II層は搅乱層であることが明確になる。3・7区は出土状況の図面が完了した遺物を取り上げる。II-24区は遺物出土状況を図面に記録する。5・9区では、第III層下に遺構が検出される。

12月28日 晴。茨城放送が取材、金砂郷町教育長が視察に訪れる。各区について遺物出土状況の図面と写真の記録を継続するとともに、調査区の土層堆積断面図の作成を開始した。19区の遺構内ピットを調査する。

12月29日 晴のち曇。各区について遺物出土状況の図面と写真の記録を継続する。3区で検出された土坑を半蔵して掘り進めめる。調査区の土層観察のために残してあつたベルトを掘りながら第III層の土壤を採取し、土壤の水洗を開始する。午後3時頃、8区において石棒の頭部が出土した。

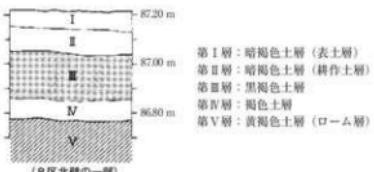
12月30日 晴のち曇一時雨。各区について遺物出土状況の図面と写真の記録、3区で検出された土坑の調査を継続する。12・13・14・19区の調査が完了し、埋め戻す。3区の土坑覆土を採取し、土壤を水洗の対象に加える。

12月31日 晴。3・4・II-24区の土坑、8区のピットを調査して記録する。8区のピットI覆土を採取し、土壤を水洗の対象に加える。それでも余力があったのでII-19区の第II層を掘り進めると、遺物が多量に出土し始めた。第III層上部の遺物については、北東隅で検出された土器のみを記録し得た。第III層の全てを調査することはできず、露出した遺物のみを一括取り上げることにした。5・8・9・10区を埋め戻す。テントを撤去した。

1月2日 晴のち曇のち雪。3・4・II-24区の土坑、II-19区の土器の記録を完了する。土壤の水洗も完了した。調査区の全てを埋め戻し、発掘器材を水洗する。出土遺物と器材の撤収は後日として、降り出した雪の中、本覚遺跡を後にした。

3 遺物の出土状況

基本土層 調査区における土層堆積は、大きく5つ分層された(第7図)。第I層は表土層であり、10cmほどの厚さで堆積する。第II層は耕作土層であり、10~20cmの厚さで堆積する。ともに搅乱された土層である。暗



第7図 基本層序

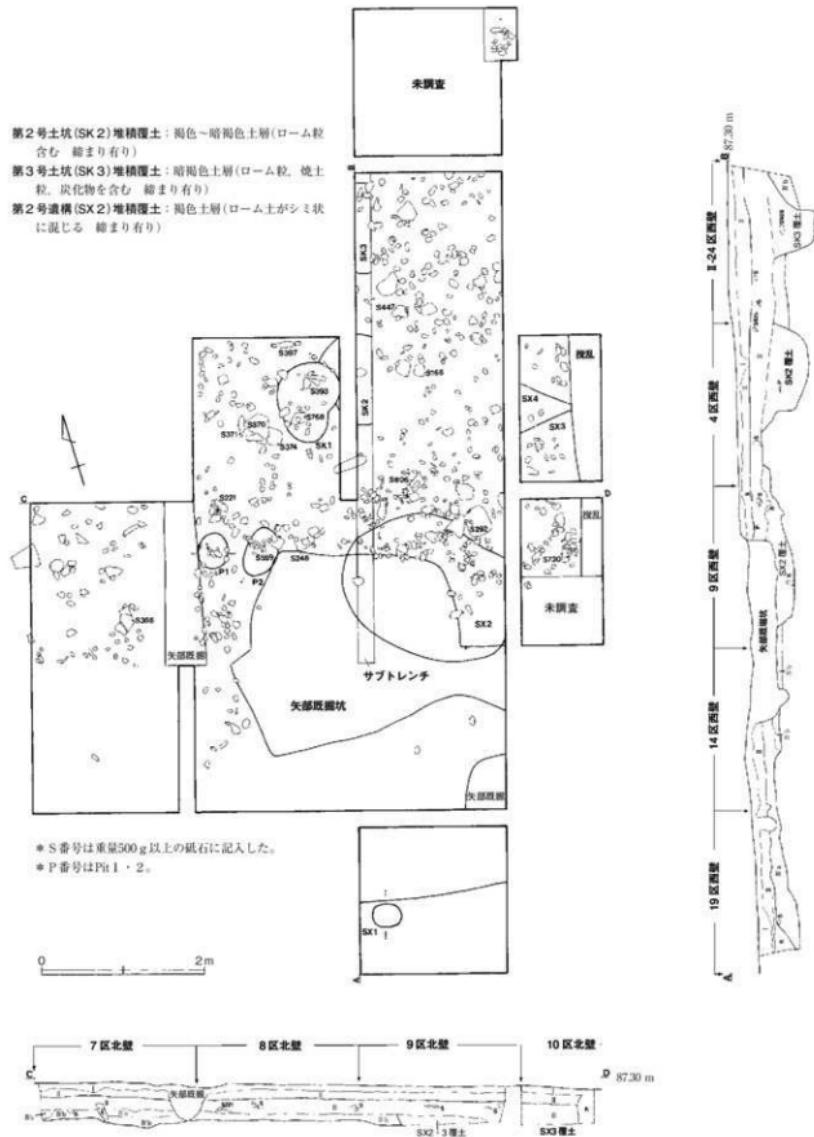
褐色の色調を呈し、第I層には締まりが無く、第II層には締まりが有る。第III層は、縄文時代晩期を中心とする遺物の包含層であり、最も厚い部分で30cmほどに堆積する。黒褐色の色調を呈し、締まりが有る。第IV層にも、少量ではあるが、縄文時代晩期の遺物が含まれている。褐色の色調を呈し、締まりが有る。ロームブロックを含まない部分を第IV a層、ロームブロックを多量に含む部分を第IV b層として細分した。第V層はローム層である。

遺物の分布 発掘調査を実施した面積は、45m²である。調査区内から出土した比較的大きな土器破片、石器及び礫については、平面形状を写し取るように記録した結果、遺物の分布は、7・8・9・10区の並びから北側に集中すること瞭然となった(第8図)。これは、第III層の堆積範囲とほぼ一致する。II-19区にも多量の遺物が含まれられていることを確認しており、第III層は、さらに北側へと広がりを見せている。「矢部既掘坑」は、第III層の南側末端付近に位置していることが明らかとなった。

比較的大きな石器及び礫に、これらを集める、並べるといった行為の痕跡は特に認められなかった。密集したような出土状況ではあるが、現在のところ、全体あるいは一部についても配石構造とは捉えていない。

土器についても、細別時期ごとに分布の偏在を指摘するに至らず。石器についても、各器種は、全体的な遺物の疎密に合致した分布を示している。

骨片の分布 調査区内からは、焼けて白色あるいは灰色を呈した骨片が検出されている(第1表)。位置を記録して取り上げたのは64点であり、そのうちの41点が8区の第III層中から検出されたものである。地区と層位で一括して取り上げた3点、土壤の水洗選別で検出された56点も加えると、8区の第III層中の骨片は100点を数える。8区に位置する第1・2号ピットの覆土中にも骨片が含まれていた。この周囲の3・4・7区の第III層からも比較的多くの骨片が検出されている。3区に位置する第



第8図 遺物の出土状況と遺構の位置

第1表 骨片一覧表

地 区	層 位	点 数	重 量	水洗点数	水洗重量
II-19	I-II	1	0.1		
	III	19	2.1	11	0.5
	IV	1	0.7		
II-24	III	9	4.7		
	SK.3	5	0.6		
	IV	3	0.9		
3	III	23	7.5	11	2.6
	SK.1	57	16.1	45	5.9
	IV	17	5.6	15	3.0
4	SK.2	1	1.6		
	III	2	0.4		
	IV	1	0.3		
7	III	19	2.8	18	2.2
	IV	6	2.4		
	V	100	32.4	56	4.9
8	III	1	0.1		
	IV	2	0.2		
	V	1	0.5		
9	III	1	0.3		
	IV	3	0.4		
	V	1	0.5		
10	I-II	1	0.1		
	III	3	0.4		
	IV	1	0.5		
13	III	1	0.5		
	IV	1	0.8		
	V	1	0.8		
合 計		284	46.8	163	15.4

*「重量」の単位は「g」である。

*「4~9区部裏側」として取り上げた1点0.4gは9区第Ⅲ層に含まれた。

1号土坑の覆土中には、水洗選別による45点を加えて、57点の骨片が含まれていた。

骨片は、大きいものでも長さ20mmほど、ほとんどが5mmほどの微細な破片である。骨片の全てを、小宮益氏に観察していただいたが、種類の同定には至らなかった。

炭化物の検出 第Ⅲ層を中心として、堅果果実の果皮の炭化物が検出されている。発掘調査で検出された比較的大きなものもあるが、ほとんどは、水洗選別により検出された微細な破片である。第Ⅲ層の土壤については、水洗選別を実施すれば、必ず検出されるような密度で包含されている。第1号土坑、第1号ピットの覆土中からも、水洗選別により検出されている。

炭化物のなかには、クルミ、ドングリの果皮のようにも見えるものが含まれている。これらを、松谷曉子氏に観察していただいたが、種類の同定には至らなかった。

ガラス玉の検出 II-24区の第Ⅲ層中、大きな搅乱と接触しない部分から、ガラス製の小玉が検出された(巻頭図版IV)。計測値は、直径4mm、厚さ2mm、孔径1.5mm、重量0.1g未満である。色調は青色を呈する。調査区内から、弥生時代以降の遺物は出土していない。

4 検出された遺構

調査区内に確認した遺構は9基である。遺構の3基は、長軸1m前後の土坑であり、第1・2・3号土坑(SK.1・2・3)という名称を付した。第1号土坑は全体を、第2・3号土坑については一部を調査している。遺構の2基は、長軸50cm前後のピットであり、第1・2号ピット(Pit.1・2)という名称を付した。これらはともに、全体を調

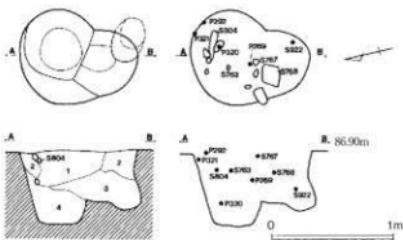
査した。残りの4基については、規模あるいは性格を明らかにできず、第1・2・3・4号遺構(SX.1・2・3・4)の名称とした。第1・2号遺構については、一部を調査している。また、II-19区北東隅から検出された土器は、埋設状態にあったと推定されるものである。

第1号土坑(SK.1) 第1号土坑(第9図)は3区東側に検出された。第2号土坑(SK.2)と一部が重複しており、平面的な覆土の観察からは第1号土坑の方が新しいと捉えた。確認面における規模は、長軸97cm・短軸75cm、深さ59cmである。平面形状及び断面形状からは、2基の土坑の複合と推定される。北側に位置する第4層堆積部分が古い土坑、南方向に掘り込まれた第1~3層堆積部分が新しい土坑に相当するものとなる。新しい土坑には、東壁を抉るような掘り込みがあり。覆土は、ローラムブロックを含む特徴から、埋め戻されたものと推定される。出土した遺物のほとんどは、第1~3層中であり、新しい土坑と推定した掘り込みの傾斜に合致するような状況が窺える。

石器には、S763・767-768の砥石(第17表)、S804の凹石(第19表)、石錐4点(第36図9・12・31)、石錐1点(第39図5)、石錐1点(第46図2)がある。第Ⅲ層として取り上げたS393(第55図1)の砥石も覆土のものかもしれない。S922(第34図5)は、石棒製作に伴う粘板岩の剥片であり、覆土の水洗選別で検出されたものを含めて、32点の剥片・碎片(第33図12 第7表)が検出された。他にメノウ15点、珪質頁岩7点、トロトロ石4点、頁岩1点、碧玉1点の剥片が含まれていた。

土器は全て小破片である。古い土坑と推定した掘り込みに堆積する第4層からも、網目状撲糸文の施された土器が出土している。P292(第24図6)は、大洞C1式の浅鉢形土器であり、新しい土坑と推定した掘り込み及び覆土の堆積について、その時期を決定する資料と捉えておきたい。他には、14点の土器の拓影図を掲載している(第17図19-45・47、第19図25、第21図10-23・24、第22図26-37・43-55、第24図6、第27図3、第28図3)。

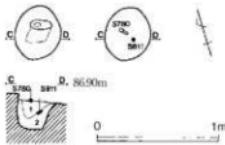
第2号土坑(SK.2) 第2号土坑は3・4・II-24区にまたがって検出された。4区西壁際のサブトレーン部分のみ底面まで掘り込んで調査を実施した。第1号土坑(SK.1)と一部が重複しており、平面的な観察からは第2号土坑の方が古ないと捉えられた。横断面(第8図)から



第1号土坑(SK 1)堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(第留層の黒褐色土をシミ状に含む ローム粒含む ロームブロック(長軸3~5cm)を少量含む 骨片を含む 繋まり有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量含む ロームブロック(長軸1~3cm)を少量含む 繋まり有り)
- 第3層：褐色土層(第1層をシミ状に含む ローム粒を多量含む 繋まり有り)
- 第4層：褐色~暗褐色土層(ローム粒を極量含む ロームブロックを多量含む 繁まり有り)

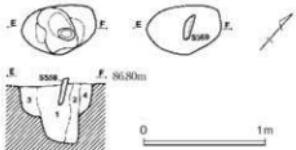
第9図 第1号土坑(SK 1)



第1号ピット(Pit 1)堆積覆土

- 第1層：褐色土層(炭化物を多量含む 繋まり弱い 粘性有り)
- 第2層：明褐色土層(ローム粒を極量含む 炭化物を少量含む 繋まり弱い 粘性有り)

第10図 第1号ピット(Pit 1)



第2号ピット(Pit 2)堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(炭化物、骨片を多量含む 烧土粒、ローム粒を少量含む 繋まりやや強い 粘性有り)
- 第2層：褐色土層(骨片を多量含む 塵泥質石ブロックを多量含む 炭化物を少量含む 繋まりやや強い 粘性弱い)
- 第3層：褐色土層(色調が第2層よりも明るい 炭化物、骨片を少量含む 繋まり弱い 粘性強い)
- 第4層：明褐色土層(色調が第3層よりも明るい 骨片を少量含む ローム粒を多量含む 繋まり弱い 粘性強い)

第11図 第2号ピット(Pit 2)

推定される規模は、平面形状を円形とすれば直径134cmほど、深さ59cmほどである。

出土した遺物のうち石器には、敲石1点(第49図14)、加工された軟質砂岩1点(第59図2)がある。他にメノウ4点、トロトロ石1点、チャート1点、砂岩1点の剥片、メノウ1点の石核が含まれていた。土器は全て小破片である。燃糸文の施された土器(第21図29)が出土しており、第2号土坑は、晩期に形成された遺構及び覆土堆積と推定される。他には、4点の土器の拓影図を掲載している(第19図26、第22図17~61、第28図14)。

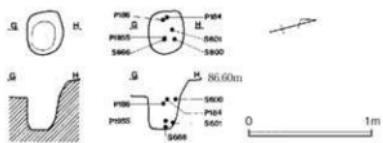
第3号土坑(SK 3) 第3号土坑はII-24区西側に検出された。西壁際のサブレンチ部分のみ底面まで掘り込んで調査を実施した。横断面(第8図)から推定される規模は、平面形状を円形とすれば直径108cmほど、深さ56cmほどである。

出土した遺物のうち石器には、S928(第45図6)の鏃器、削器1点(第41図1)、打製石斧1点(第45図1)がある。他にメノウ5点、トロトロ石2点、砂岩1点の剥片、メノウ1点、珪質頁岩1点の石核が含まれていた。土器は全て小破片である。大洞B式の土器(第17図36)が出土しており、第3号土坑は、晩期に形成された遺構及び覆土堆積と推定される。他には、3点の土器の拓影図を掲載している(第16図15、第18図7~39)。なお、第2・3号土坑の覆土を一括して取り上げた、4点の土器の拓影図も掲載してある(第14図1~17、第18図55、第20図16)。

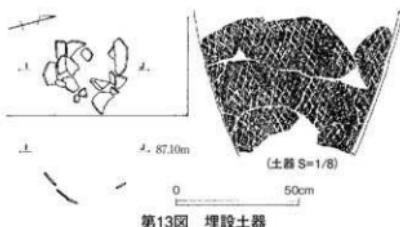
第1号ピット(Pit 1) 第1号ピット(第10図)は、8区西側に検出された。確認面における規模は、長軸45cm・短軸38cm、深さ34cmである。

出土した遺物のうち石器には、S780(第32図2)の石棒、S811(第44図4)の削器がある。また、水洗選別により、石棒製作の碎片が1点検出されている。他にメノウ2点、珪質頁岩1点、トロトロ石1点の剥片が含まれていた。土器は全て小破片である。網目状燃糸文、燃糸文の施された土器(第21図25~38)が出土しており、第1号ピットは、晩期に形成された遺構及び覆土堆積と推定される。

第2号ピット(Pit 2) 第2号ピット(第11図)は、8区西側に検出された。第1号ピットとの距離は20cmほどである。確認面における規模は、長軸60cm・短軸40cm、深さ58cmである。平面及び断面の形状、覆土の第1・2



第12図 第1号遺構ピット(SX1P)



第13図 埋設土器

層が第3・4層とほぼ垂直に区分されることから、2基のピットの重複、もしくは1基のピットであっても掘り方と柱痕に相当することが考えられる。

出土した遺物のうち石器には、S559(第57図3)の砥石、敲石1点(第49図3)がある。他にメノウ6点、珪質頁岩1点、頁岩1点の剥片が含まれていた。土器は全て小破片である。網目状撚糸文、撚糸文の施された土器(第21図26・27・39)が出土しており、第2号ピットのうち、少なくとも新しいピットは、晩期に形成された遺構及び覆土堆積と推定される。他には、3点の土器の拓影図を掲載している(第18図41、第19図27、第22図21)。

第1号遺構(SX1) 第1号遺構は19区南側に検出された。10cm前後の段差を有する堅穴状の窪みと、その壁際に位置するピットを調査した。但し、第IVa層と堅穴状の窪みの覆土を区別することはできず、窪みの傾斜も緩やかな部分があり、底面にも硬化が認められないことから、住居跡と考えるには至らなかった。19区西壁の土層断面図(第8図)に記録したように、第1号遺構の上部は搅乱されているが、この搅乱により造成された窪みでないことも確定である。ローム層が傾斜する自然地形の可能性もあり、確実に遺構と捉えられるのは、ピット部分(SX1P)のみということになるかもしれない。ピット以外の第1号遺構範囲内から出土した遺物には、石棒製作に伴う粘板岩の碎片1点(第7表)、石礫1点(第36図26)があり、粘板岩の碎片は、搅乱部分を含めて取り上げられた遺物に含まれていた。

ピット(第12図)の規模は、長軸35cm・短軸27cm。深さは、堅穴状の窪みの底面から27cmである。

出土した遺物のうち石器には、S601(第49図17)の敲石、P195(第17表)の砥石がある。S600とS666は、硬質頁岩の剥片である。土器は全て小破片。大洞B式の土器(第17図27)が出土しており、第1号遺構のピットは、晩期に形成された遺構及び覆土堆積と推定される。他には、2点の土器の拓影図を掲載している(第16図35、第20図6)。なお、堅穴状の窪みの部分から出土した土器の拓影図も掲載してある(第14図3)。

第2号遺構(SX2) 第2号遺構は9区を中心検出された。長軸2.2m・短軸1.7mほどの楕円形の平面形状が推定される。9区西壁際のサブトレニチ部分のみ底面まで掘り込んで調査を実施した。深さは20cmほどである。出土した遺物は土器のみで、全て細片である。大洞C1式もしくはC2式の浅鉢形土器(第18図26)、網目状撚糸文の施された土器(第21図28)も出土しているが、第Ⅲ層との接触部分の可能性もあり、時期を決定しかねる。他には、6点の土器の拓影図を掲載している(第14図9、第15図7、第19図28・29、第20図18、第22図62)。

第3号遺構(SX3) 第3号遺構は5区で検出され、一部が9・10区にも及ぶ。第2・4号遺構と重複しており、平面的な覆土の観察からは、これら2基よりも新しいと捉えた。未調査であり、規模及び時期は明らかにし得なかった。なお、第2・3号遺構の覆土上部を一括して取り上げた、2点の土器の拓影図を掲載してある(第14図19、第22図23)。

第4号遺構(SX4) 第4号遺構は5区で検出され、一部が4区に及ぶと推定される。第3号遺構と重複しており、平面的な覆土の観察からは、第3号遺構よりも古いと捉えた。未調査であり、規模及び時期は明らかにし得なかった。なお、第3・4号遺構の覆土上部を一括して取り上げた、2点の土器の拓影図を掲載してある(第15図1、第28図6)。

埋設土器 II-19区北西隅の第Ⅲ層上部から、深鉢形土器の胴下半部が正位の状態で検出された(第13図)。胴部の破片は、接合して全周するが、底部を欠く。網目状撚糸文が施された、晩期の粗製土器である(第26図1)。土器内の土壌を水洗選別したところ、黒曜石の剥片1点、焼けた骨片、炭化物が検出された。

III 本覚遺跡の土器

本覚遺跡の発掘調査においては、個々に出土位置を記録して取り上げた土器がある。これらの遺物番号には「P」を付しておらず、「P368」までを記録した。その他に、グリッドによる地区と層位で分別して、一括で取り上げた土器がある。これらの遺物番号には「No」を付しており、「No234」までを記録した。調査で検出された土器の破片の総点数は11,111点である。ちなみに、総重量は59,398.6 gであった。

以下には、本覚遺跡から出土した土器について報告する。縄文時代早・前期の土器は、検出された全ての破片を掲載してある。中期の土器は、比較的多量の破片が検出されており、細別型式の同定に有効なものから選択して、一部を掲載した。後・晩期の土器は、全てを掲載しているわけではないが、その量的な比率を反映したものにはなっている。時期ごと、型式ごとの破片の数量は算出していない。細片がほとんどで、無文の破片も多いことから、型式の同定が困難なものが大分を占め、無理に数値を提示しても、その信頼性が保証できることによる。

掲載した土器の出土位置、胎土(特に金雲母の含有)、施文原体、赤彩、炭化物の付着等については観察表(第3表)を、法量を復元した土器の部位直径と残存率については計測表(第4表)を参照されたい。

1 早・前期の土器

早期後葉 第14図1～3は、深鉢形土器の胴部。器内外面に条痕文が施されており、胎土には纖維を含有する。これらは、早期後葉の条痕文系土器群である。

前期前葉 第14図4は、深鉢形土器の口縁部。口唇部直下に綾状の短沈線文が施されている。縄文は、異節縄文か。破断面に補修孔の一部が残る。胎土には纖維を含有する。第14図5は、深鉢形土器の胴部。羽状縄文が施されており、胎土には纖維を含有する。これらは、前期前葉の土器群であり、第14図4は、「森東式」[鈴木(志)1996・1998]に相当するものである。

2 中期の土器

中期前葉 第14図6は、深鉢形土器の口縁部。縦長の突起が貼付され、單列の角押文が施されている。阿玉台Ib式である。第14図11は、深鉢形土器の口縁部。波頂部には刻みが施されている。口縁部には棹状の隆帯文と沈線文の一部が残る。阿玉台Ib式に伴うものか。

第14図7は、深鉢形土器の口縁部。齒数3本の櫛歯状工具による押し引き文が施されている。第14図8は、深鉢形土器の頸～胴部。半截竹管状工具による平行沈線で波状文が施され、胴部には隆帯が貼付されている。これらは、阿玉台II式である。第14図12～15は、縄文上有節沈線が施された深鉢形土器。これらは、諏訪遺跡[鈴木(船)1980]、諏訪台遺跡[井上他1991]に類例があり、阿玉台II式に伴う。第14図16は、深鉢形土器の胴部。縄文上有沈線で波状文が施されている。これも、阿玉台II式に伴うものであろう。

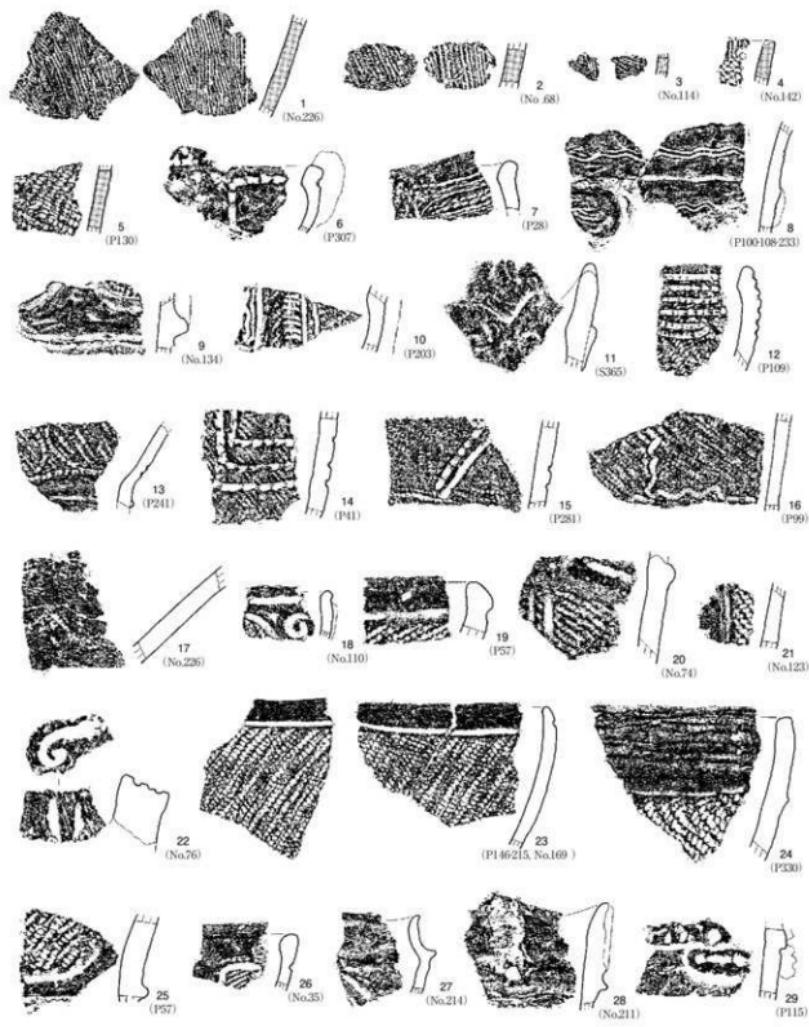
中期中葉 第14図9は、深鉢形土器の口縁部。隆帯に沿って、半截竹管状工具を押し引いた爪形文が施されている。第14図10は、深鉢形土器の胴部。隆帯に沿って、半截竹管状工具による爪形文が施されている。隆帯上にも縄文がある。これらは、阿玉台III式である。

第14図17は、浅鉢形土器の胴部。器外面に赤彩の痕跡が残る。中期中葉の阿玉台式に伴うものである。

第14図18は、小型の深鉢形土器の口縁部。隆帯の貼付により溝文と区画文が構成されている。第14図20は、深鉢形土器。胴部に施文された縦位の沈線の間隔は狭く、沈線間は磨消されない。これらは、加曾利E1式の新しい段階のものである。第14図22は、深鉢形土器の口縁部突起。頂部には太い沈線による溝文が施されている。第14図25は深鉢形土器の口縁部。隆帯の貼付による区画文の一部が残る。これらは、加曾利E1式の新しい段階から加曾利E2式までに相当する。

第28図1・2は、中期前・中葉の深鉢形土器の底部に相当する。

中期後葉 第14図19は、大型の深鉢形土器の口縁部。区画文の一部が残る。第14図21は、深鉢形土器の胴部。沈線間が磨消されている。これらは、加曾利E2式から加曾利E3式までに相当する。第14図23は、深鉢形



第14図 土器実測図1

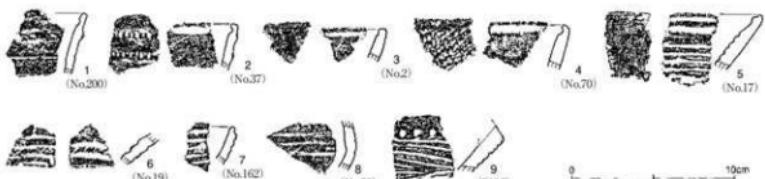
0 10cm

あるいは鉢形土器。口縁部は沈線で区画された無文帯。胴部には縦文が施されている。加曾利E 3式である。

第14図24は、大型の深鉢形土器。口縁部は微隆起線で区画された無文帯。胴部には縦文が施されている。加曾

利E 4式である。

第28図3は、中期後葉の深鉢形土器の底部に相当する。



第15図 土器実測図2

3 後期の土器

後期前葉 第14図26は、深鉢形土器の口縁部。沈線で区画された縄文帯による文様の一部が残る。第14図27は、深鉢形あるいは鉢形土器。口縁部が屈曲して内湾する。胴部との区画は隆帶。焼成が不良で器表面が荒れています。これより明瞭ではないが、胴部には縄文と沈線文が施されている。これらは、称名寺式である。第14図28・29は、口縁部が幅広い無文帯。隆帶で胴部と区画された深鉢形土器であろう。称名寺式に伴う粗製土器である。

後期中葉 第15図1は、深鉢形土器。口縁部には1条の隆帶が貼付されて、隆帶上には刻みが施されている。胴部には、沈線で区画された縄文帯による文様の一部が残る。器内面の口唇部直下に1条の沈線文がある。第15図2は、口縁部の隆帶が2条のもの。第15図3は口唇部付近の破片である。これらは、堀之内2式から加曾利B1式に相当する。第15図4は、深鉢形土器。粗い縄文が施されている。堀之内2式から加曾利B1式に伴う粗製土器である。第15図5は、口縁が大きく聞く浅鉢形土器。器外表面は無文。器内面に沈線文が施されている。第15図6も、同じく浅鉢形土器。器内外面の沈線間には、刻みが施されている。これらは、堀之内2式から加曾利B1式に伴う。第15図7は、小脣の浅鉢形土器。沈線間は、最上段が刻み、以下が縄文である。第15図8も、同じく浅鉢形土器。沈線間は縄文である。これらは、加曾利B1式である。第15図9は、胴部が屈曲する鉢形土器。屈曲部には刻みが施され、以下には右下がり、左下がりの沈線が羽状を構成する。加曾利B2式である。

第28図4・5は、後期中葉の深鉢形土器の底部に相当する。

後期後葉 第16図1は、波状口縁の深鉢形土器。口縁波底部の破片であり、綫長の瘤が貼付られている。瘤には施文がない。第16図2は平縁、あるいは第16図3・

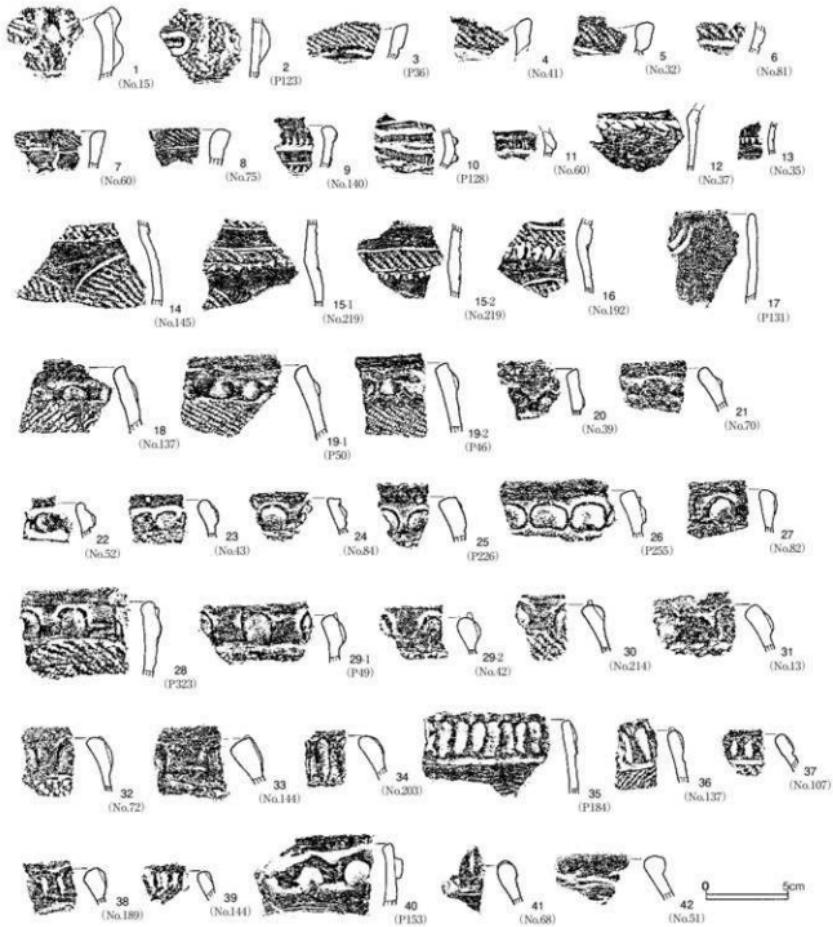
4のような弧状に口縁が突出する緩波状口縁が推定される深鉢形土器。綫長の瘤上には縄文が施されている。これらは、安行1式である。小場遺跡[沼田1986]の第25号住居跡にも、緩波状口縁と瘤上施文の類例があり、茨城県北部から福島県南部の地域的な属性と捉えられる。第16図3～6も、安行1式の深鉢形土器であろう。第16図12・13は、深鉢形土器の頸～胴部。屈曲部には沈線文と刺突文が施されている。曾谷式から安行1式に相当する。第16図14～16も深鉢形土器の頸～胴部であり、屈曲部には隆起帶縄文と刺突文が施されている。胴部には、沈線で区画された縄文帯による文様の一部が残る。これらは、安行1式である。第16図7は、鉢形土器の口縁部。綫長の瘤が剥落した痕跡が見られる。第16図8も、鉢形土器の口縁部。第16図9も、鉢形土器の口縁部であり、隆起帶には刻みが施されている。これらは、安行1式である。安行1式の縄文は、ほとんどが単節R L。

第16図10は、小型の「異形台付土器」。隆起帶には刻みが施されている。小場遺跡、三反田観塚貝塚[藤本1977]に類例があり、三反田観塚貝塚では藤本弥城氏により安行2式に位置付けられている。山内清男氏は、このような土器を「台付の奇形土器」として、「恐らく安行2式（場合によっては安行3a式）」と記述している[山内(清)1967]。第16図11も、同じく「異形台付土器」の破片。

第25図1は、平縁の深鉢形土器。左下がりの条線文が施されている。第25図2は、同じく胴部。左上がりの条線文が施されている。これらは、中田新田遺跡[鈴木(志)1986]の第2号遺構における出土層位から、安行1式もしくは安行2式に伴う粗製土器と考える。

第28図6・7は、後期後葉安行式の深鉢形土器の底部に相当する。ともに底面には網代痕が残されている。

第16図17は、口縁がやや内湾する深鉢形土器。2条の沈線による弧状の文様の一部が残る。器外表面は平滑に調



第16図 土器実測図3

整されている。高井東遺跡[吉川他1974]の第13号住居址から出土した土器に類似を認めるならば、安行1~3a式のいずれかに伴うと考えられる。

第16図18~39は、口縁が内溝する深鉢形土器。口縁部には押圧文もしくは刺突文、胴部には繩文が施されている。これらは、大きく3つに分類できる。

A類 口縁部に貼付された隆带上に、指頭による押圧文が施されたもの。(第16図18~23)

B類 肥厚した口縁部に、指頭による押圧文が施されたもの。(第16図24~34)

C類 肥厚した口縁部に、棒状もしくは箒状工具による刺突文が施されたもの。刺突文部分が沈線で帯状に区画されたものもある。(第16図35~39)

安行1式を主体とする小場遺跡第25号住居跡にはA・B類があり、安行2式以降の柳沢太田房貝塚[藤本1977]の第Ⅱ地点にはB・C類がある。A類が安行1式に伴う

こと、これらがA・B・C類の順序で変遷したことが考えられる。関東地方南部の安行式に伴うものとは異なり、茨城県北部から福島県南部の地域に特徴的な粗製土器である。C類とした第16図38は、口唇部の断面形状及び範状工具による施文が、関東地方南部の安行2~3a式に伴う粗製土器に近似しており、C類には、晚期に位置付けられるものが含まれていることも考えられる。A・B類の縄文はほとんどが単節RL、C類の縄文は単節LRの方が多い。

第16図40は、口縁部に押圧文、胴部に櫛歯状工具による条線文が施されている。押圧文は、口縁部に貼付された隆帶上に施文されており、縄文のA類に相当する。つまり、安行1式に伴う粗製土器と考える。第16図41の口唇部には、頂部に刺みのある突起が貼付されている。胴部に施文された複数条の細かな沈線は、櫛歯状工具による条線文であろう。寺脇貝塚[馬目他1966]に類例があり、後期後葉から晩期前葉に位置付けられる粗製土器である。第41図42の胴部に施文された複数条の細かな沈線も、櫛歯状工具による条線文であろう。口唇部の断面形状は、縄文のC類の一部に相当する。つまり、これも後期後葉から晩期前葉に位置付けられる粗製土器である。

4 晩期の土器

大洞B式・安行3a式期 第17図1は、深鉢形土器の口縁部。口唇部には突起が貼付されており、突起頂部の器内面側に刺みが施されている。口縁部には、範状工具による刺突文の施された刻目帯が3段以上で構成される。第17図2も、深鉢形土器の口縁部。縦長の小さな瘤が2個一对で貼付されている。口縁部の刻目帯は2段。頭部には、縄文帯による入組文が構成されるものであろう。第17図3には、口縁部の刻目帯と頭部の縄文帯の一部が残る。これらは、口縁部文様の特徴から「瘤付土器」あるいは「新地式」と呼ばれる後期後葉の土器群であり、我孫子昭二氏による「第IV段階」[我孫子1981・1989]に相当する。但し、中妻貝塚[鈴木(加)1981]に見るように、このような口縁部文様を構成しながら、頭部の入組文に三叉文の施された土器があり、鈴木加津子氏により、大洞B1式の可能性が指摘されている。第17図4は、鉢形土器の口縁部。2段の縄文帯の上に、縦長でやや大きめの瘤が2個一对で貼付されている。後期後葉の項目で扱

った第16図41・42についても、「瘤付土器」に伴うものと考えられる。

第17図6は、波状口縁の深鉢形土器。口縁底部には縦長の瘤、その下位には横長の瘤が貼付されている。縦長の瘤には横位の刺み、横長の瘤には縦位の刺み。頭部文様は、隆起帯を形成せず、沈線区画内に縄文が施されている。安行3a式である。第17図7は、鉢形あるいは台付鉢形土器。口縁部に縦長の瘤が貼付され、瘤には横位の刺みが施されている。外塙遺跡[鈴木(加)他1985]には、口縁部文様の入組文に三叉文が施された土器があり、鈴木加津子氏により安行3a式と捉えられている。第17図5・8~12・15も、安行2式もしくは安行3a式に伴う。なお、第16図10の「異形台付土器」についての、山内清男氏による「場合によっては安行3a式」という記述も気になるところである。

第17図13・14は、平縁の深鉢形土器の口縁部。口縁部は複数段の縄文帯である。第17図18~21・23は、同じく頭~胴部。縄文帯による入組文の一部が残る。頭部の括れ部に、扁平環状が連続する隆帶文を貼付したものもある。これらは、鈴木加津子氏により大洞B1式古段階に位置付けられた「山辺沢式」に相当する。第17図16は、緩波状口縁の鉢形あるいは深鉢形土器。口縁部は2段の縄文帯である。第17図17には、縄文帯の一部と2個一对の刺突文が残る。第17図24は、壺形土器の胴部であろうか。扁平環状が連続する隆帶文の上には、縄文が施されている。第17図25は、壺形あるいは鉢形土器の頭部。扁平環状が連続する隆帶文が貼付されている。第17図39は壺形土器の胴部。環状の貼付文の外縁に沿う沈線文から三叉文が施されている。第17図40は小型の壺形土器の胴部。環状の貼付文のみが施されている。これらは「山辺沢式」に伴うものであろう。

第17図26は、波状口縁の深鉢形土器。波頂部の突起は二股に分かれ、それぞれの器外面に浅い窪みを有する。波頂部の下位に、三叉文の一部が残る。大洞B1式である。第17図27も、波状口縁の深鉢形土器。波頂部には、3条の刺みが施されている。波頂部の下位に、抱き合う三叉文の一部が残る。大洞B1式である。第17図28も、波状口縁の深鉢形土器。波頂部には円盤状の突起が貼付されており、円盤の中央が窪む。柳沢太田房貝塚[藤本1977]に類例があり、波頂部の下位には三叉文が施さ



第17図 土器実測図4

れていますと推定される。大洞B I式である。第17図29は、深鉢形土器の頭部か。縄文帯、盲孔と沈線文の一部からは、縄文帯の入組文の結合部に三叉文の施された構成が推定される。大洞B I式である。第17図30・31は、綾波状口縁の深鉢形土器。盲孔を中心には三叉文が抱き合う。

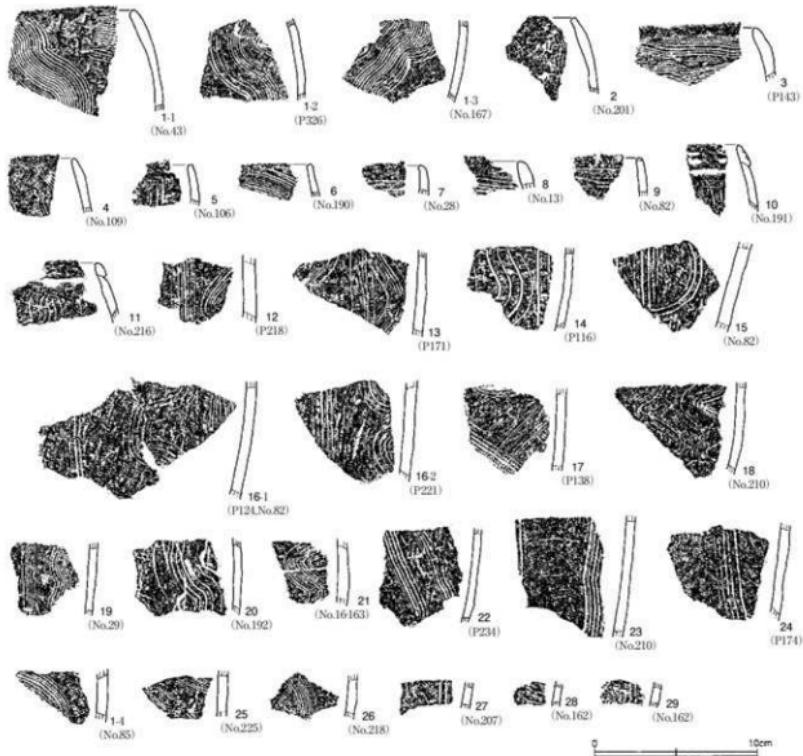
所謂「玉抱き三叉文」が構成されている。柳沢太田房貝塚〔藤本1977〕に類例があり、鈴木加津子氏により大洞B I式の新段階に位置付けられたものに相当する。第28図1は、綾波状口縁の深鉢形土器である。焼成及び色調的印象は、粗製土器に近い。口縁部は無文。頭部と胴部に縄



第18図 土器実測図5

文帯の入組文が構成されている。胴部は縄文。入組文及び「玉抱き三文」の形象に変容が見られる。大洞B1式、柳沢太田房貝塚[藤本1977]の段階であろうか。第22図1・2は、このような土器の口縁部に相当するものであろう。第17図33は、小型の深鉢形土器。波状口縁は、三文の

中间位置の突出部が沈線で区画されている。三文の下位は縄文帯。これも、柳沢太田房貝塚[藤本1977]に類例がある。第17図34は、壺形土器。頸部には横位の縄文帯、胴部には三文と弧状の縄文帯の一部が残る。薄磧貝塚[大竹1988]に類例がある。大洞B1式であろう。第17



第19図 土器実測図6

図35は、大型の土器の破片であるが、器種及び部位を明らかにできない。壺形土器の胴部であろうか。三叉文が施されている。第18図8は、口縁が大きく開く浅鉢形土器。口唇部から器内面に貼付文が施されている。口縁部は繩文帯。沈線で区画された繩文帯による弧状の文様の一部が残る。大洞B1式であろうか。

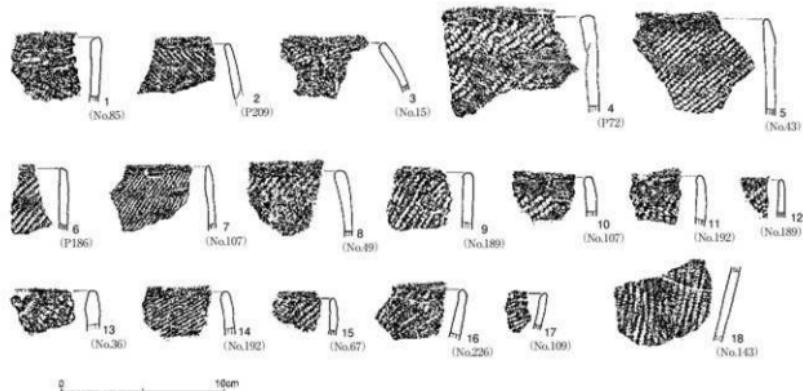
第17図36は、小型の壺形土器。口唇部には刻みが施されている。口縁部は繩文帯。胴部には、入組三叉文の一部が残る。大洞B2式である。第17図41・42は、このような壺形土器の口縁部に相当するものであろうか。

第17図32は、鉢形あるいは深鉢形土器。口縁部に横位の繩文帯があり、三叉文と斜位の沈線文の一部が残る。斜位の沈線間に繩文が施されている。第17図37は、波状口縁の浅鉢形土器。口縁部に横位の繩文帯があり、三

叉文の一部が残る。第17図38は、平縁の浅鉢形土器。口縁部に横位の繩文帯があり、入組三叉文の一部が残る。これらは、安行3a式である。大洞B2式に伴う段階のものであろうか。

第28図9・10など上げ底の底部は、当該期のものであろう。

大洞BC式・安行3b式期 第23図2は、平縁の深鉢形土器。頭部が屈曲する。口縁部の文様は、所謂「羊齒状文」。第23図3は、深鉢形あるいは鉢形土器。口唇部には突起が貼付されている。口縁部の文様は「羊齒状文」。第18図1～4は、鉢形あるいは浅鉢形土器の口縁部。いずれにも、「羊齒状文」の一部が残る。これらは、大洞BC2式である。第18図5・6は、口縁部の突起。第18図7も、口縁部の突起。浅鉢形土器であろうか。器内面



第20図 土器実測図7

に縦文が施されており、中央には焼成前のような穿孔がある。これらは、大洞BC式のものであろう。第18図9は、脣部の屈曲する角度から、注口土器と推定される。沈線による渦状の文様の一部が残る。文様の形象が大きく変容しているが、大洞BC式であろうか。

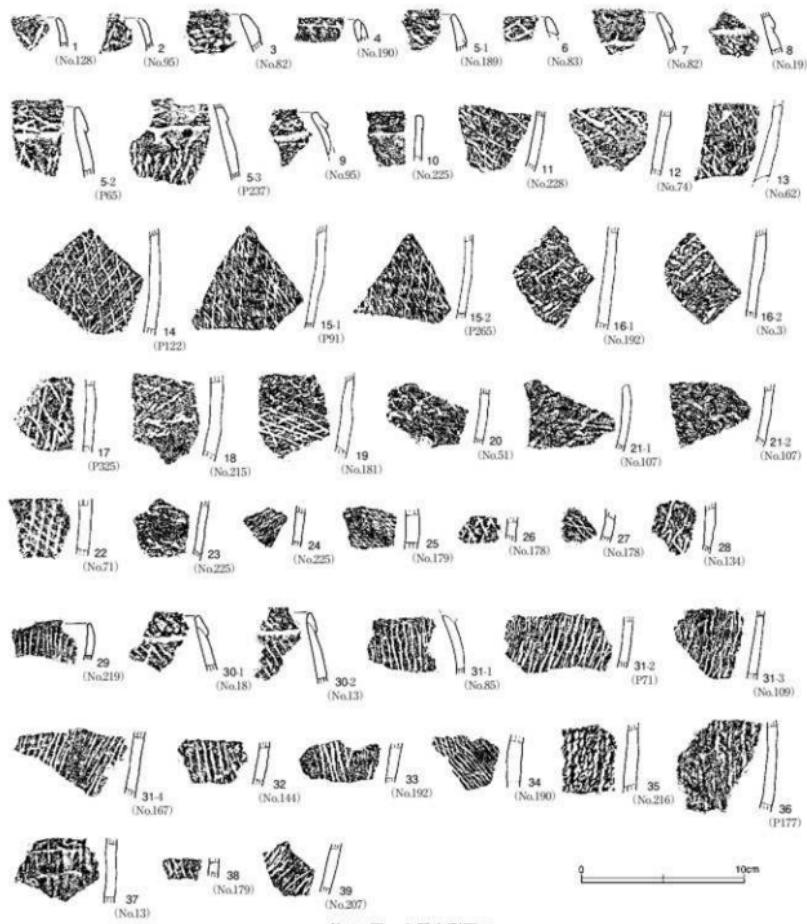
第25図3は、口縁が肥厚して内湾する深鉢形土器。口縁部には横右下がりの条線文が施されている。「姥山Ⅱ式」に伴う粗製土器であり、大洞BC式・安行3b式期から大洞C1式・安行3c式期の一部に並行する[鈴木(加) 1982・1983]。

大洞C1式・安行3c式期 第23図3は、鉢形土器。口唇部には刻みが施されている。口縁部の文様は、交互2段に施された「二溝間の裁痕」。脣部には、無筋Lとともに結節文が施されている。寺脇貝塚[馬目田1966]に類例があり、「O群土器」に分類されている。大洞C1式である。第24図1は、鉢形土器。口唇部には刻みが施されている。口縁部の文様は、右下がりに施された太い沈線文。脣部には、単筋L Rが施されている。「斜行直線化」した「羊齒状文」[鈴木(加) 1993]からの変遷を想定し、大洞C1式に位置付けておきたい。第24図2は、鉢形あるいは深鉢形土器。第24図2-1・2を同一個体と捉えたが、それぞれの破片から推定復元される直径が脣部でうまく合致しないことから、よく似た別個体かもしれない。第24図2-1の口縁部は無文。脣部に、やや粗雑な太めの沈線で文様が構成されている。第24図5は、頸部が屈曲する鉢形あるいは深鉢形土器。口唇部には刻みが

施されている。口縁部は無文。脣部に施された横位の沈線の一部が残る。これもやや粗雑な太めの沈線である。小野天神前遺跡[斎藤他1979]にも、同じような沈線で文様を構成した鉢形土器が見られる。

第24図6は、浅鉢形土器。口縁部には「二溝間の裁痕」があり、体部には浮き彫り状に文様が構成されている。柳沢太田房貝塚[藤本1977]に類例がある。第18図11も、「二溝間の裁痕」が施された浅鉢形土器である。口唇部の断面形状は異なる。第24図7も、浅鉢形土器。口縁部には太い沈線が2条あり、体部には浮き彫り状に文様が構成されている。これらは、大洞C1式である。第18図12~33も、浅鉢形土器。第18図12~19は、口唇部の断面形状が第24図7とほぼ同じもの。第18図17~19の口唇部には刻みが施されている。第18図20~24は、口唇部に沈線が施されたもの。第18図25~33は、口唇部の外側に刻みが施されたもの。そのうち第18図27~33の口唇部には、沈線が施されている。これらは、大洞C1式もしくは大洞C2式である。第18図34は、鉢形あるいは浅鉢形土器。口縁部には左下がり斜位の沈線文が施されている。大洞C1式であろうか。第18図35~41、第24図8は、浅鉢形あるいは鉢形土器の脣部。入組文の一部が残る。第18図35~36は、大洞C1式である。第24図10~11は、浅鉢形土器の底部。第24図11には、2条の沈線による円文が施されている。

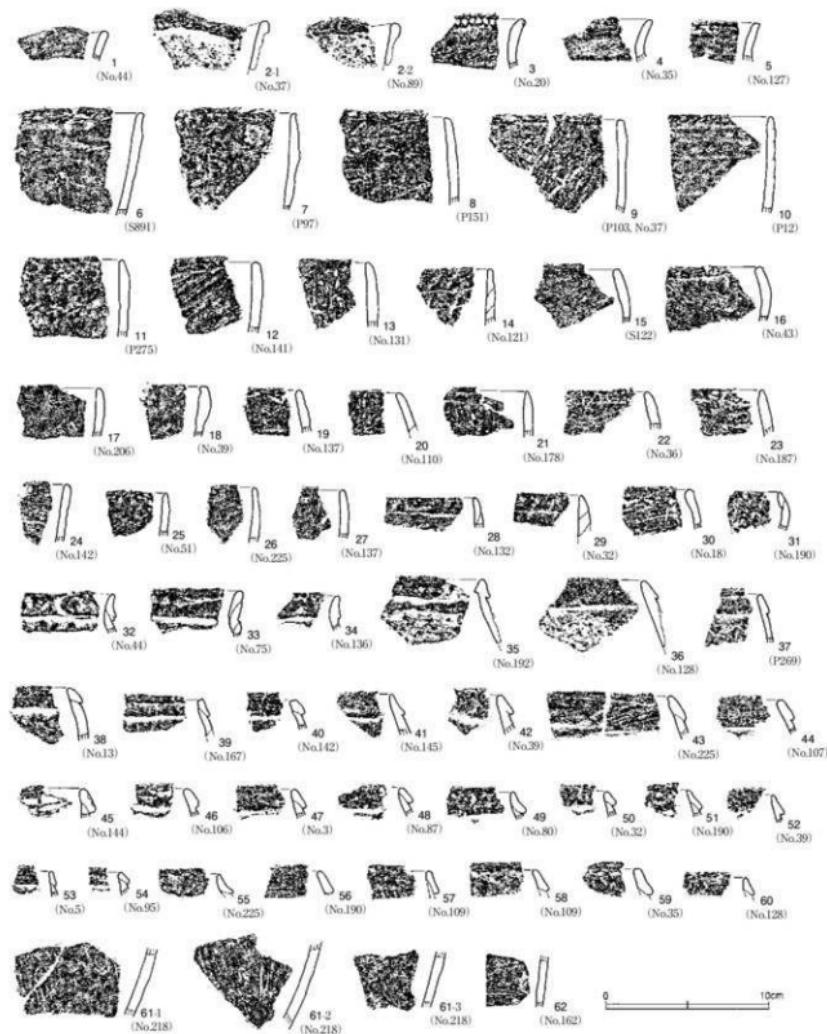
第20図9は、浅鉢形土器。口縁部に3条の太い沈線文が施されている。脣部は縦文。大洞BC式もしくは大洞



第21図 土器実測図8

C 1式である。第24図13は、浅鉢形土器。口縁部に1条の太い沈線文が施されている。他は無文。広畑貝塚〔藤本1988〕には沈線文が2条の浅鉢形土器があり、鈴木加津子氏により大洞C 1式に位置付けられている〔鈴木(加)1993〕。第18図43は、鉢形土器か。繩文が横位に施されれた部分が窪む。第18図44は、鉢形土器の底部付近。繩文が沈線と段差で区画される。これらは、道平遺跡〔馬目也1984〕に類例があり、大洞C 1式に位置付けられている。第28図8は、このような鉢形土器の底部であろう。

第20図45は、浅鉢形土器。口縁部に「二溝間の截痕」、胴部が無文の構成を推定する。器外面に赤彩のような痕跡を認める。道平遺跡〔馬目也1984〕に類例があり、大洞C 1式である。第20図46は、壺形土器。胴上端部には「二溝間の截痕」、胴部には繩文が施されている。第20図47も、壺形土器。頭部は無文。胴上端部には「二溝間の截痕」が施されている。第20図48も、壺形土器。胴上端部には2条の降帯文がある。広畑貝塚〔藤本1988〕に類例があり、鈴木加津子氏により大洞C 1式に位置付けられて

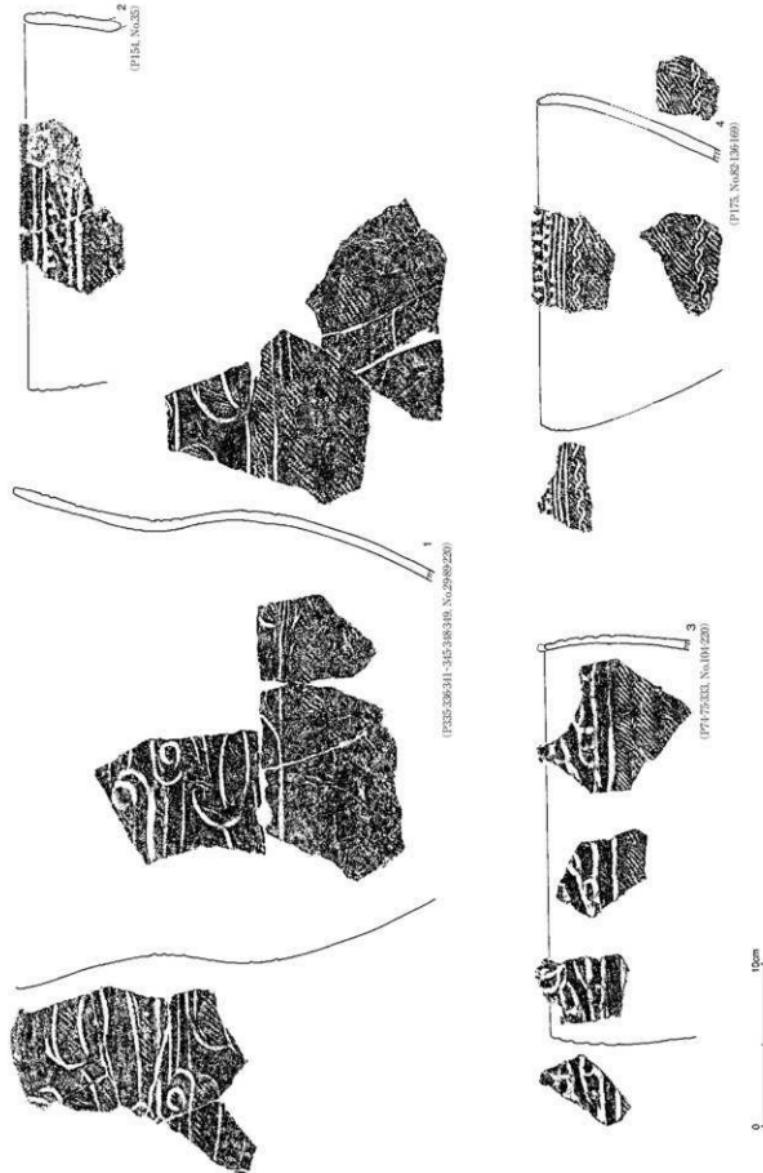


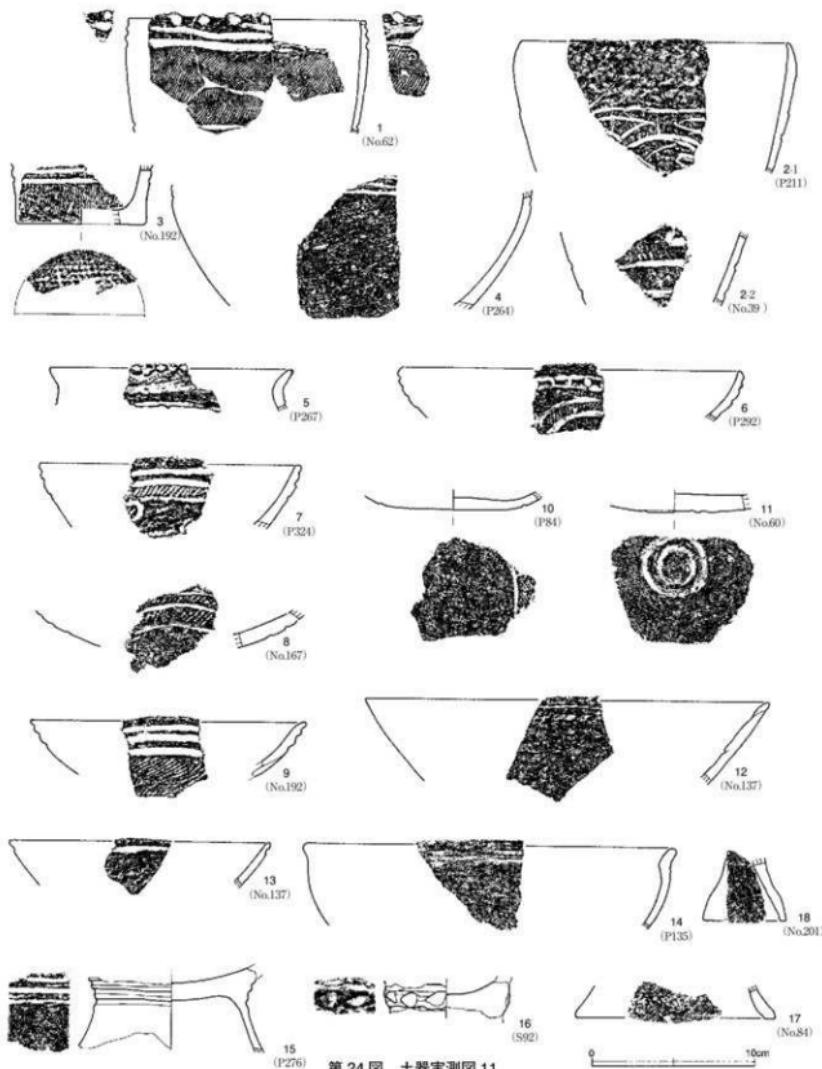
第22図 土器実測図9

いる〔鈴木(加)1993〕。第18図42は、反り気味に内傾する破片であり、注口土器の胴上部かもしれない。大洞C I式であろうか。第18図52・53は、亜形土器あるいは注口土器の口縁部。口唇部には沈線文が施されている。頸部は無文。小場遺跡〔沼田1986〕には、このような口縁部の

注口土器がある。大洞C I式であろう。第18図49は、鉢形土器。大洞C I式もしくは大洞C 2式である。第18図50も、鉢形土器。口唇部に沈線文と刻みが施されている。頸部は上位から、2条の太い沈線文、1列の刺突文、2条の沈線文。羽白C遺跡〔山内(幹)他1988〕に類例があり、

第23図 土器実測図10





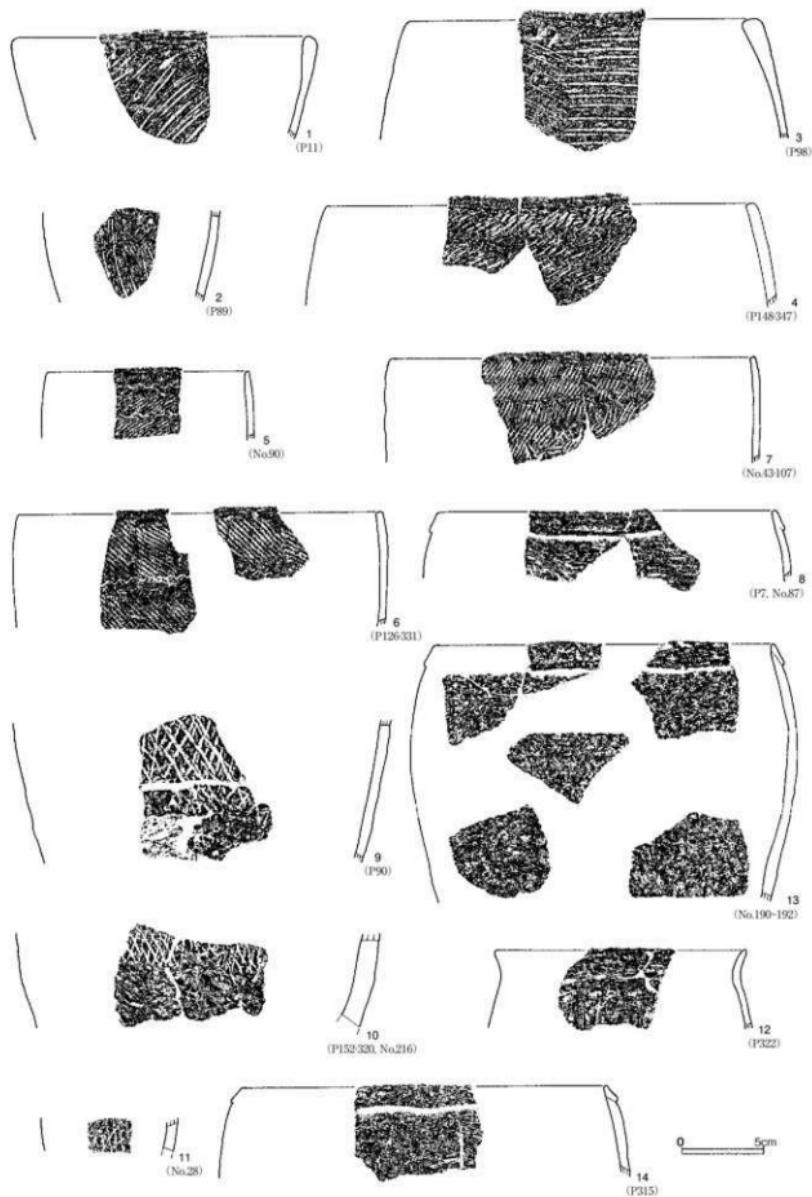
第24図 土器実測図 11

山内幹夫氏により大洞C 1式に位置付けられている。第27図4は、極小型の壺形土器。肩上端部には「二溝間の截痕」、胴部には繩文が施されている。大洞C 1式である。

第24図16は、台付鉢形土器。鉢部と台部の接合部に隆帯が貼付され、隆帯上に押圧文が施されている。安行

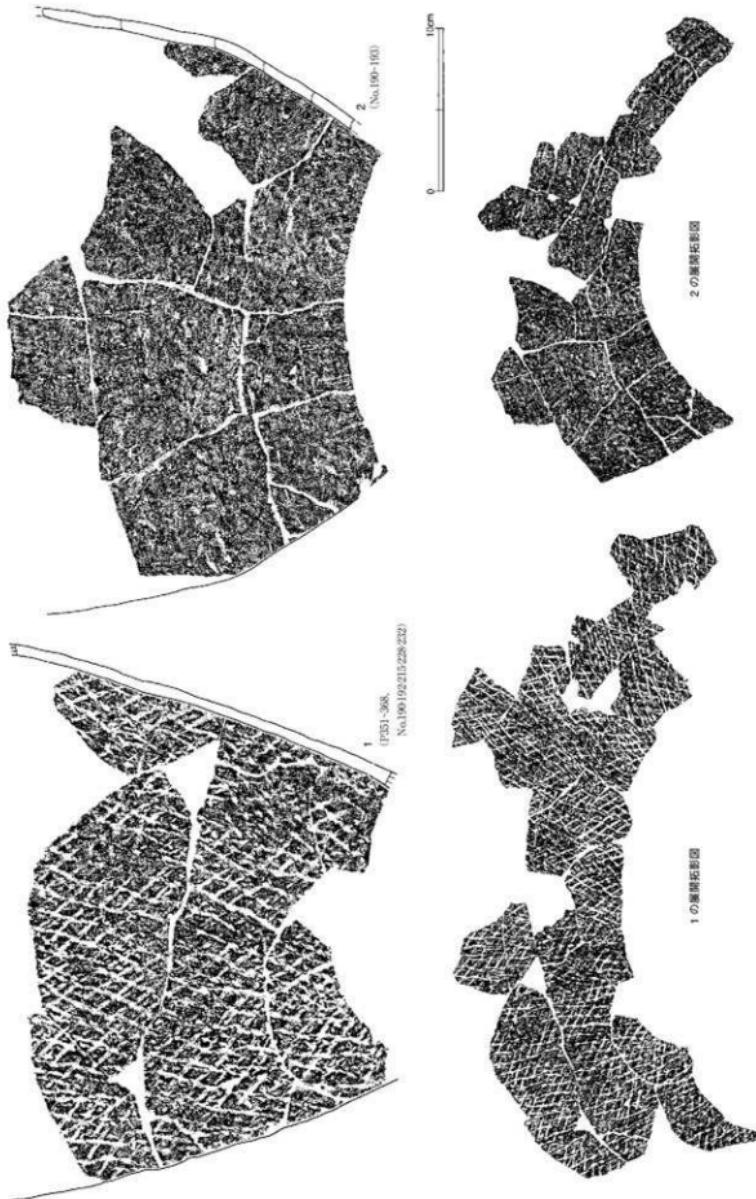
3c式であろうか。第18図10、第21図17は、同じく台脚の裾部。第18図10には、沈線文の一部が残る。

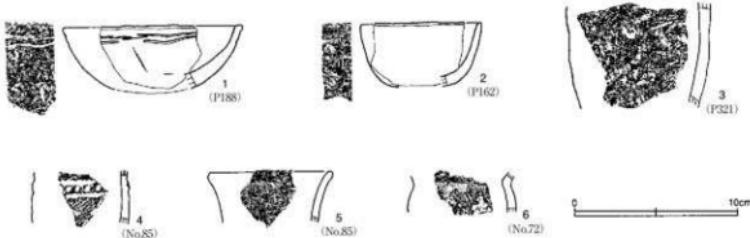
浅鉢形及び鉢形土器には、残存する部分に限定される観察から、大洞C 2式までの幅を有するものがある。また、以下の土器も、大洞C 2式に作うことと考えられる



第25図 土器実測図 12

第26図 土器実測図 13





第27図 土器実測図14

ものである。第24図14は、浅鉢形土器。口縁がやや屈曲して外反する。無文。寺脇貝塚[馬日他1966]に近似例があり、大洞C 2式に位置付けられている。第24図15は、台付鉢形土器。鉢部と台部の接合部に3条の沈線文が施されている。寺脇貝塚[馬日他1966]には、接合部に沈線文の施された台付鉢形土器があり、大洞C 2式に位置付けられている。第24図4、第18図55は鉢形土器の胴部。横位の沈線文の一部のみが残る。寺脇貝塚[馬日他1966]等において、大洞C 2式に位置付けられた鉢形土器の部分とも考えられる。第24図3、第18図54は、単軸絡条体第1類による撚糸文と沈線文が施された土器。このような撚糸文が大洞C 1式に出現しているのかは明らかでない。大洞C 2式であろうか。しかしながら、検出された土器群には、大洞C 2式に同定される表徴が確認できていない。

第18図56は繩文が施された浅鉢形土器。第24図12、第18図57～60は無文の浅鉢形土器。第24図18、第27図1～3・5・6の極小型の土器についても、土器型式による所属時期を推定することは難しい。

5 後・晩期の粗製土器

条線文土器 条線文が施された土器(第19図1～29)はほぼ全て、口縁が内済する。口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、単純口縁が多い。複合口縁は2点のみ。その1点には、半截竹管状工具で引搔くような横位の短沈線文が施されている。もう1点は無文である。これらは、複合口縁部の直下から、縦位の波状文が施されるように見える。単純口縁の口縁部には、横位の直状文が施されるもの(第19図3・7～9)、口縁部から斜位の波状文が施されるもの(第19図1・6)、縦位の波状文

が施されるもの(第19図2)、縦位の直状文が施されるもの(第19図5)がある。胴部には、縦位の波状文と直状文が交互に施されるもの(第19図12～16・19・27)、縦位の波状文が並列で施されるもの(第19図18・20)、縦位の直状文が並列で施されるもの(第19図22・23)がある。胴部に横位の直状文のみが施されたものは見られない。施文具の櫛齒状工具には、歯数4本から19本までがある。第28図19・23には、条線文の一部のように見える痕跡が残り、条線文土器の底部かもしれない。

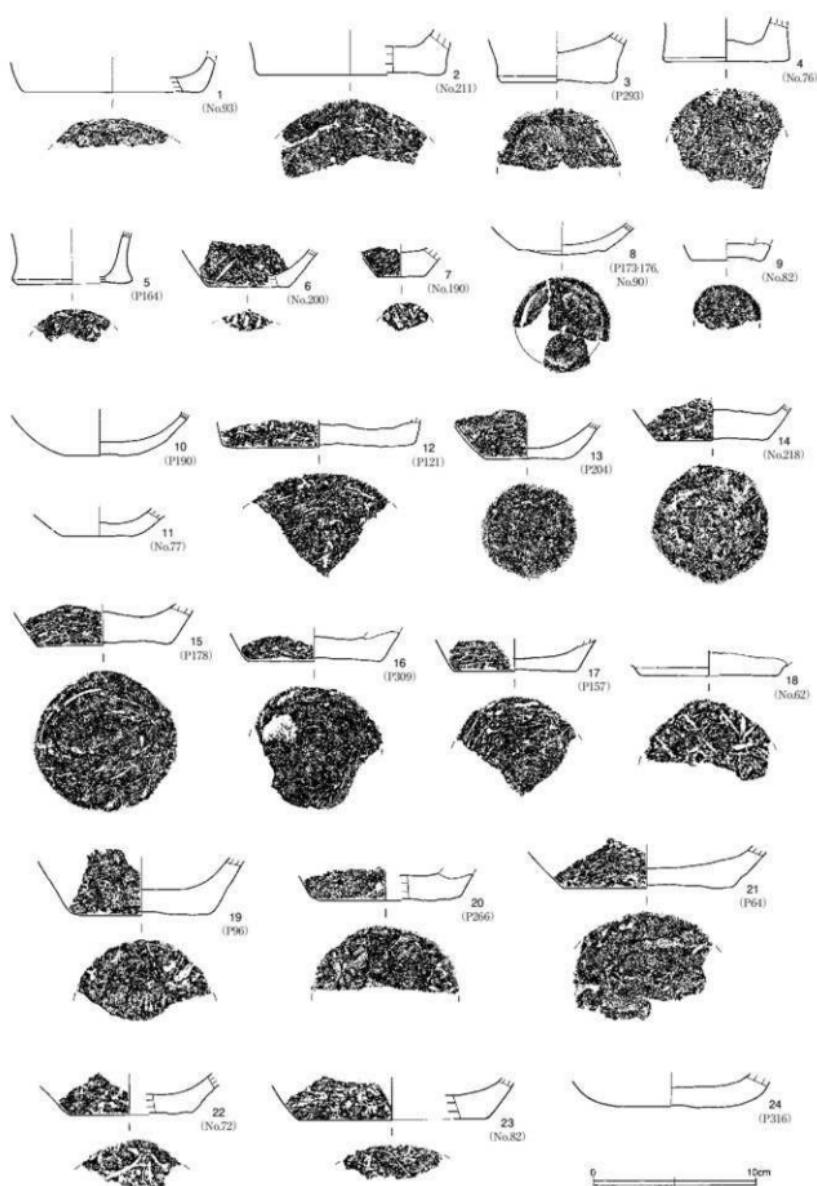
後期後葉の条線文土器は、寺脇貝塚[馬日他1966]及び小場遺跡[沼田1986]の資料から、単純口縁と考えられる。特に、小場遺跡遺跡の第25号住居跡では、口縁部に横位の直状文が施されるものが、安行1式に伴う。一方、御靈前遺跡[後藤2001]のSI-01では、単純口縁で縦位の波状文と直状文が交互に施されるものが、大洞B C式に伴う。このような文様構成、複合口縁の条線文土器については、晩期に位置付けられるものであろう。

繩文土器 繩文が施された土器(第25図4～7、第20図1～18)も、口縁が内済するものがほとんどである。口縁が直立するか、やや外反するものは少ない。全てが単純口縁。繩文原体には、単節R L・L R、直前段反撓L L、無節Lがある。第28図12は、繩文土器の底部かもしれない。

第25図5・6には、結節文が施されており、これらは、大洞B C式もしくは大洞C 1式に伴うものであろう。

撚糸文土器 撥糸文には、単軸絡条体第5類A種の網目状撚糸文と、単軸絡条体第1類の撚糸文があり、網目状撚糸文の方が多い。

単軸絡条体第5類A種の網目状撚糸文が施された土器(第25図8～10、第21図1～28)は全て、口縁が内済する。



第28図 土器実測図 15

口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、複合口縁が多い。複合口縁には、無文のもの(第25図8、第21図7・8・10)と、網目状撚糸文が施されたもの(第21図5・6・9)とがある。第28図21の底部付近には、網目状撚糸文の一部が残る。第28図22も、網目状撚糸文の底部かもしれない。

単軸絡条体第1類の撚糸文が施された土器(第21図29~39)も全て、口縁が内湾する。口縁部には、複合口縁と単純口縁とがあり、複合口縁には撚糸文が施されている。

これらは全て晩期に位置付けられる。御靈前遺跡[後藤2001]のSI-01では、単軸絡条体第5類A種の網目状撚糸文の土器が、大洞BC2式に伴う。これには、単純口縁と複合口縁とがある。さらに、単軸絡条体第1類の撚糸文が施された土器も出土しているが、小破片のため大洞BC2式に伴うものか確実ではない。大洞BC1式が撚糸文土器の出現期であるらしく、大洞C1式以降の晩期中葉に盛行する。

無文土器 無文の土器(第25図12~14、第22図3~31・37・38)には、頸部で屈曲して口縁が外反するもの、口縁が直立するか、やや外反するもの、口縁が内湾するものがある。口縁部には、複合口縁と単純口縁とがあり、単純口縁が多い。器外面に形成の積上痕を残すものもある。第26図2の最上部の破断面には、摩滅が認められることから、ここを擬口縁として再利用されたことが考えられる。器外面は、縱方向に撚て調整されており、角度を変えて立ち上がる部分には指圧痕が残る。また、下部には、部分的に成形の積上痕が残されている。

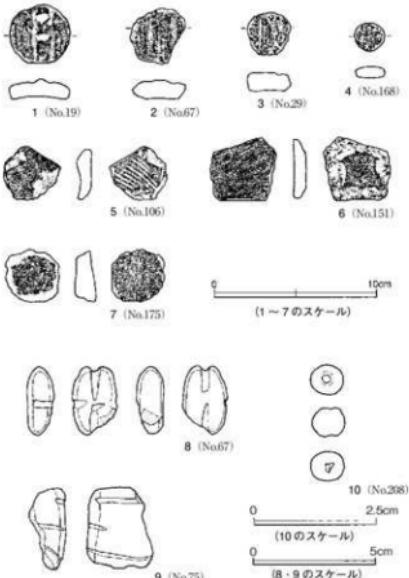
第22図32~36・39~60は、複合口縁であり、条線文土器、撚糸文土器、無文土器の破片が含まれていると考えなければならない。

第28図11~24は、ほとんどが粗製土器の底部である。施文の一部が残るものは僅かであった。底部付近には、削りのような調整により横位の擦痕が見られる。

6 土製品

第29図1~4は、中期の土器破片を素材とした土製円盤である。正円形に近い平面形状であり、3点には周囲の断面に摩滅が認められる。

第16図1、第29図5~7は、後期後葉の土器破片を素



第29図 土製品実測図

第2表 土製品一覧表

番号	番号	地区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第16號	1 (No.015)	12	I	44	40	17	20.7	
第29號	1 (No.019)	11~19	III	36	36	11	14.1	無面摩滅
2	(No.067)	12	I~III	34	34	11	11.5	周辺一部摩滅
3	(No.075)	12	I~III	27	26	12	10.5	
4	(No.168)	I~III	I~III	18	17	7	2.5	無面摩滅
5	(No.106)	II~III	III	35	22	9	8.9	
6	No.151	7	III	41	39	8	14.2	
7	No.175	7	III	32	32	13	14.6	
8	No.067	12	I~III	28	19	11	5.0	
9	No.075	8	III	34	27	15	9.2	
10	No.208	3	III	7	6	5	0.2	水洗 黒色

*「長さ」「幅」「厚さ」の単位は「mm」、「重量」の単位は「g」である。

材として、周縁が敲打による剥離で調整されている。かつて「周辺敲打調整土器片」[鈴木(著)1986]と仮称したことがある。

第29図8は、土製品として焼成された土錐である。長軸に切目が施されている。短軸にも一部に切目のような沈線が見られる。なお、土器片錐は検出されていない。

第29図9は、土偶脚部の破片と考えられる。3条の沈線文が施されている。

第29図10は、土製の小玉である。水洗選別により検出された。孔の直径は長軸2mmほどである。

参考文献

- 我孫子昭二 1981 「瘤付土器(新地式)」『縄文文化の研究』4 雄山閣出版株式会社
- 我孫子昭二 1989 「瘤付土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 井上義安他 1991 「諏訪台遺跡」 諏訪台道路発掘調査会
- 大竹憲治他 1988 「薄磯貝塚 一縄文時代晚期貝塚の調査―いわき市埋蔵文化財調査報告第19号」 いわき市教育委員会
- 後藤信祐 2001 「御臺前遺跡II 主要地方道宇都宮・笠間線 改正工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」 榎木町埋蔵文化財調査報告第248集 榎木町教育委員会他
- 斎藤忠重 1979 「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」 茨城県
- 鈴木加津子 1981 「中妻貝塚出土の安行式土器について」『取手と先史文化』下巻 取手市教育委員会
- 鈴木加津子 1981 「茨城県取手市上高井神明貝塚に於ける縄紋式後晚期の土器に就いて」『利根川』1 利根川同人
- 鈴木加津子 1981 「取手市上高井神明貝塚の安行3a式土器」『利根川』2 利根川同人
- 鈴木加津子 1983 「外塚遺跡」下館市教育委員会
- 鈴木加津子 1987 「安行3a式形成過程の一考察」『埼玉の考古学』 株式会社新人物往来社
- 鈴木加津子 1988 「千葉県園生貝塚の晩期安行式土器」『利根川』9 利根川同人
- 鈴木加津子 1992 「南関東」『第5回縄文セミナー 縄文晚期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 鈴木加津子 1993 「真福寺小考 一安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推敲」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 鈴木加津子 1994 「山辺式」の埋甕・素描」『利根川』15 利根川同人
- 鈴木裕芳 1980 「諏訪遺跡発掘調査報告書」 日立市教育委員会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行3b式研究の序 一山内清男博士の学説から鈴木公穂氏の新説を批判する一」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1983 「安行式遺跡解題(1) 一埼玉県岩槻市裏恩寺遺跡の分析一」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会
- 鈴木素行 1986 「中田新田遺跡」「古河市史 資料 原始・古代編」 古河市
- 鈴木素行 1996 「関山式土器の「仲」 一関東地方東部における黒浜期の土器編年を考える・まえにー」『茨城県考古学協会誌』第8号 茨城県考古学協会
- 鈴木素行 1998 「泉原貝塚における土器群の編年と系統 一土器に関する問題・Ⅱー」『泉原貝塚発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第45集 日立市教育委員会
- 沼田文夫 1986 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 9 小場遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第35集 財團法人茨城県教育財団
- 藤本弥城 1977 「那珂川下流の石器時代研究」I
- 藤本弥城 1980 「那珂川下流の石器時代研究」II
- 藤本弥城 1988 「茨城県広畠貝塚出土の晩期縄文土器」『考古学雑誌』第73巻第4号 日本考古学会
- 馬目順一他 1966 「寺臨貝塚」 豊城市教育委員会
- 馬目順一他 1984 「大熊町史」第2巻 大熊町
- 山内清男 1967 「日本先史土器図譜」 先史考古学会
- 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」 先史考古学会
- 山内幹夫他 1988 「真野ダム開削遺跡発掘調査報告X II 羽白C遺跡(第1次)」福島県文化財調査報告書第194集 福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター
- 山内幹夫 1992 「福島県内における縄文時代晚期前半の様相 一大判B～C1式期の土器を中心としてー」『第5回縄文セミナー 縄文晚期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 吉川国男他 1974 「高井東遺跡調査報告書」埼玉県遺跡調査会 報告第25集 埼玉県遺跡調査会

第3表 土器出土位置・観察表

種	因	番	号	地	区	層	位	觀	察
第 14 因		No.226	B-24	SK 2 - 3	前礪				
		No.068	12	Ⅲ	前礪				
		No.114	19	SX 1	前礪				
		No.142	10	Ⅲ	後金, 銅頭, 銅				
		No.150	9	Ⅲ	前金, 銅, 銅LR, RL				
		No.028	II-24	前金					
		No.029	7	Ⅲ	前金				
		No.100	9	II, III	前金				
		No.134	9	SX 2	前金				
	P	P.203	4	Ⅲ	前金, 銅RL				
	S	S.365	3	Ⅲ	銅RL				
	F	F.109	9	Ⅲ	銅RL				
	I	I.241	10	Ⅲ	前金, 銅RL				
	P	P.041	12	Ⅲ	前金, 銅LR				
	I	I.281	10	Ⅲ	銅RL				
	P	P.099	9	Ⅲ	銅RL				
	I	I.226	B-24	SK 2 - 3	銅				
	S	S.110	2	Ⅲ	銅				
	N	N.074	9	SX 2 - 3	銅				
	P	P.074	5	Ⅲ	銅				
	I	I.123	II-19	II - I	銅LR				
	S	S.076	19	複雜					
	P	P.146	3	Ⅲ	銅LR				
	F	F.330	4	Ⅲ	銅RL				
	P	P.057	4	Ⅲ	銅RL				
	N	N.035	7	Ⅲ	銅				
	P	P.214	3	Ⅲ	銅LR?				
	S	S.211	4	Ⅲ	銅RL				
	P	P.115	9	Ⅲ	銅RL				
第 15 因		No.200	5	SX 1 - 4	銅LR				
		No.157	1	Ⅲ	銅				
		No.072	19	Ⅲ	銅				
		No.070	23	I	銅				
		No.017	7	Ⅲ	銅				
		No.019	14	I	銅				
		No.162	9	SX 2	銅LR				
		No.030	12	Ⅲ	銅LR				
	P	P.112	9	Ⅲ	銅				
第 16 因		No.015	12	Ⅲ	銅LR, 四線調査 前金, 銅RL				
	P	P.123	5	Ⅲ	前金, 銅RL				
	P	P.036	9	Ⅲ	銅RL				
	N	N.052	25	Ⅲ	前金, 銅LR				
	N	N.081	19	Ⅲ	銅RL				
	N	N.060	5	Ⅲ	銅RL				
	S	S.075	8	Ⅲ	銅RL				
	N	N.140	8	Ⅲ	銅				
	P	P.128	7	Ⅲ	前金				
	N	N.060	5	Ⅲ	銅				
	D	D.037	9	II - III	前金				
	N	N.035	7	Ⅲ	前金				
	N	N.145	7	複雜	銅RL				
	M	M.219	B-24	SX 3	銅RL				
	M	M.192	B-19	Ⅲ	銅RL				
	P	P.131	B-19	Ⅲ	前金				
	S	S.127	3	Ⅲ	銅LR				
	P	P.066	13	Ⅲ	銅LR				
	P	P.059	8	Ⅲ	前金, 銅RL				
	P	P.070	23	I	銅				
	N	N.052	14	I	前金				
	N	N.043	9	I	銅				
	N	N.084	3	Ⅲ	前金, 銅RL				
	P	P.226	9	Ⅲ	銅RL				
	P	P.255	7	Ⅲ	銅RL				
	P	P.082	11	Ⅲ	前金, 銅RL?				
	P	P.323	3	Ⅲ	前金, 銅RL				
	P	P.060	9.13	複雜, II	前金, 銅RL				
	N	N.214	13	Ⅲ	前金, 銅RL				
	N	N.071	13	Ⅲ	前金, 銅RL				
	N	N.072	B-24	Ⅲ	前金, 銅RL				
	N	N.144	4	Ⅲ	前金, 銅RL?				
	N	N.203	4	Ⅲ	前金				
	P	P.184	19	SX 1P	前金, 銅LR				
	N	N.137	3	Ⅲ	前金, 銅RL				
	N	N.107	4	Ⅲ	前金, 銅RL				
	N	N.189	10	Ⅲ	前金, 銅				
	N	N.114	4	Ⅲ	銅LR				
	P	P.153	3	Ⅲ	前金, 銅?				
	N	N.068	12	Ⅲ	銅?				
	D	D.065	13	Ⅲ	銅?				
第 17 因		No.233	2	Ⅲ	銅				
	P	P.133	7	Ⅲ	銅LR				
	P	P.134	7	Ⅲ	前金, 銅LR				
	N	N.141	10	I	前金, 銅LR				
	P	P.107	9	Ⅲ	銅LR				
	S	S.102	9	Ⅲ	前金				
	S	S.096	3	Ⅲ	銅				
	N	N.121	9	Ⅲ	前金, 銅RL				
	P	P.310	B-24	Ⅲ	銅LR				
	N	N.190	B-19	Ⅲ	前金, 銅RL				
	N	N.106	3	Ⅲ	銅RL				
第 18 因		No.144	4	Ⅲ	銅				
	N	N.067	B-19	Ⅲ	銅RL				
	N	N.025	4	Ⅲ	銅LR				
	N	N.125	7	Ⅲ	銅LR				
	N	N.074	10	I	銅				
	N	N.225	3	SK 1	銅LR?				
	N	N.141	10	I	銅				
	N	N.225	3	SK 1	銅金銅LR				
	N	N.005	9	I	銅				
	N	N.169	B-24	Ⅲ	銅				
第 19 因		No.173	7	Ⅲ	銅				
	N	N.071	B-24	Ⅲ	銅				
	N	N.060	5	Ⅲ	銅				
	N	N.167	B-19	Ⅲ	銅				
	N	N.181	8	Ⅲ	N.a				
	N	N.071	B-24	SK 3	銅LR				
	N	N.137	3	II - I	銅LR?				
	N	N.062	9	SK 2	銅				
	N	N.045	7	Ⅲ	銅				
	N	N.143	3	Ⅲ	銅				
	N	N.071	B-24	SK 3	銅LR				
	N	N.069	4	II - I	銅LR?				
	N	N.067	12	I - II	銅LR?				
	N	N.065	14	Ⅲ	銅LR				
	N	N.170	8	Ⅲ	銅				
	N	N.152	7	II - II	銅				
	N	N.181	8	III - N.a	銅				
	N	N.062	9	SK 2	銅				
	N	N.042	9	Ⅲ	銅				
	N	N.065	3	Ⅲ	銅				
	N	N.083	3	Ⅲ	銅				
	N	N.037	3	Ⅲ	銅				
	N	N.061	19	II - I	銅				
	N	N.082	8,124	II - III	銅				
	N	N.052	14	Ⅲ	銅				
	N	N.190B	B-19	Ⅲ	銅RL				
	N	N.027	8	Ⅲ	銅RL				
	N	N.082	8	Ⅲ	銅RL				
	N	N.163	13	I	銅RL				
	N	N.219	B-24	SK 3	銅LR				
	N	N.072	8	Ⅲ	銅RL				
	N	N.060	3	Ⅲ	銅				
	N	N.035	7	Ⅲ	銅金銅RL				
	N	N.119	B-24	SK 1	銅				
	P	P.006	7	Ⅲ	銅外?				
	N	N.036	12	Ⅲ	銅				
	N	N.082	9	Ⅲ	銅				
	N	N.071	B-24	SK 2	銅				
	N	N.060	3	Ⅲ	銅				
	N	N.027	8	Ⅲ	銅				
	N	N.181	B - N.a	SK 1	銅				
	N	N.051	14	Ⅲ	銅金銅LR				
	N	N.107	4	Ⅲ	銅?				
	N	N.071	B-24	II - II	銅?				
	N	N.225	3	SK 1	銅金銅LR				
	N	N.225	3	SK 1	銅				
	N	N.179	8	Pat1	銅?				
	N	N.178	8	Pat2	銅?				
	N	N.178	8	Pat2	銅?				
	N	N.134	3	SK 2	銅?				
	N	N.219	B-24	SK 2	銅?				
	N	N.133	13	I	銅?				
	P	P.071	B-24	II - II	銅				
	N	N.144	4	Ⅲ	銅				
	N	N.192	B-19	Ⅲ	銅				
	N	N.190	B-19	Ⅲ	銅				
	N	N.216	16	I	銅L				
	P	P.177	B-24	II - II	銅L				
	N	N.013	13	I	銅				
	N	N.179	8	Pat1	銅				
	N	N.097	8	Pat2	銅				

(第3表のつづき)

博 図	部 号	名 称	地 区	層 位	範 域
第22図	1	Ne044	13	II	
	2	Ne037他	9	II・III	鉛金
	3	Ne020	13	漫乱	
	4	Ne055	7	II	
	5	Ne127	5	II	
	6	S051	4	II	
	7	P097	8	II	
	8	P151	3	II	
	9	P103他	9	II・III	
	10	P012	7	II	
	11	P275	8	II	
	12	Ne141	10	I	鉛金
	13	Ne131	19	II	
	14	Ne121	9	II	外因
	15	S143	9	II	
	16	Ne043	9	II	鉛金
	17	Ne206	II-24	SK2	鉛金
	18	Ne039	9	II	
	19	Ne137	3	II	
	20	Ne110	3	II	
	21	Ne178	8	Fe2	外因
	22	Ne036	12	II	
	23	Ne187	II-24	SN2-3	
	24	Ne142	10	II	
	25	Ne051	14	II	鉛金・内因
	26	Ne225	3	SK1	内因
	27	Ne137	3	II	
	28	Ne132	2	B	
	29	Ne032	14	II	
	30	Ne018	8	II	
	31	Ne190	19	II	
	32	Ne044	13	II	
	33	Ne075	8	II	
	34	Ne136	II-24	II	鉛金
	35	Ne092	II-19	II	
	36	Ne128	10	I-II	鉛金
	37	P269	3	SK1	
	38	Ne032	13	II	
	39	Ne167	II-19	II	
	40	Ne142	10	II	
	41	Ne145	7	I	鉛金
	42	Ne039	8	II	
	43	Ne225	3	SK1	
	44	Ne107	4	II	
第22図					
第23図					
第24図					
第25図					
第26図					
第27図					
第28図					
第29図					
第30図					
第31図					
第32図					
第33図					
第34図					
第35図					
第36図					
第37図					
第38図					
第39図					
第40図					
第41図					
第42図					
第43図					
第44図					
第45図					
第46図					
第47図					
第48図					
第49図					
第50図					
第51図					
第52図					
第53図					
第54図					
第55図					
第56図					
第57図					
第58図					
第59図					
第60図					
第61図					
第62図					
第63図					
第64図					
第65図					
第66図					
第67図					
第68図					
第69図					
第70図					
第71図					
第72図					
第73図					
第74図					
第75図					
第76図					
第77図					
第78図					
第79図					
第80図					
第81図					
第82図					
第83図					
第84図					
第85図					
第86図					
第87図					
第88図					
第89図					
第90図					
第91図					
第92図					
第93図					
第94図					
第95図					
第96図					
第97図					
第98図					
第99図					
第100図					
第101図					
第102図					
第103図					
第104図					
第105図					
第106図					
第107図					
第108図					
第109図					
第110図					
第111図					
第112図					
第113図					
第114図					
第115図					
第116図					
第117図					
第118図					
第119図					
第120図					
第121図					
第122図					
第123図					
第124図					
第125図					
第126図					
第127図					
第128図					
第129図					
第130図					
第131図					
第132図					
第133図					
第134図					
第135図					
第136図					
第137図					
第138図					
第139図					
第140図					
第141図					
第142図					
第143図					
第144図					
第145図					
第146図					
第147図					
第148図					
第149図					
第150図					
第151図					
第152図					
第153図					
第154図					
第155図					
第156図					
第157図					
第158図					
第159図					
第160図					
第161図					
第162図					
第163図					
第164図					
第165図					
第166図					
第167図					
第168図					
第169図					
第170図					
第171図					
第172図					
第173図					
第174図					
第175図					
第176図					
第177図					
第178図					
第179図					

IV 本覚遺跡の石器

本覚遺跡の発掘調査においては、個々に出土位置を記録して取り上げた石器及び礫がある。これらの遺物番号には「S」を付しており、「S928」までを記録した。その他に、グリッドによる地区と層位で分別して、一括で取り上げた石器及び礫がある。これらの遺物番号には「No.」を付しており、「No.234」までを記録した。

石器は、現地で器種を判別できたものもあったが、特に礫を素材とする石器については、水洗後に礫との判別を検討する必要があるため、ほぼ全てを遺物として取り上げることにした。その結果、総数量15,722点、総重量287,273.9 g の石器と礫が検討の対象となった。

水洗後の整理においては、まず、明瞭な加工痕あるいは使用痕が観察されたもの全てを石器として抽出した。石器の数量は537点、重量は74,307.0 g である。次に、剥片石器の製作に伴う剥片と石核、鍛核石器の製作に伴う剥片についても、微細なものまで全て抽出した。剥片類の数量は4,653点、重量は34,504.4 g である。石器であつたとしても使用痕が明瞭でないもの、使用の痕跡が残らない部分の破片を含みはするが、これらの作業の後に残されたものを礫として一括した。礫の数量は10,532点、重量は165,452.2 g である。礫については、数量が膨大であることから、残存する大きさのうち長軸が50mm以下のものを全ての分析の対象から除外した。長軸が51mm以上の礫の数量は647点、重量は111,737.1 g である。

以下には、本覚遺跡から出土した石器について報告する。抽出された石器の器種と、点数及び重量は、一覧表(第5表)の通りである。また、個々の石器の石材、計測値、観察の所見については、器種ごとにまとめながら一覧表として掲載した。

1 石 棒

矢部素子氏採集石棒 発掘調査以前に、矢部素子氏により採集されていた石棒は、6点である(第30・31図、第6表)。

第30図1は、単頭の石刀である。胸部の平面形状は、内反りに湾曲する。表面とも基部付近に比較的大きな剥離痕が残る。これは、剥離内にも研磨が及ぶことから、

第5表 発掘調査で出土した石器と礫

	点 数	重 量	複合点数	複合重量	水洗点数	水洗重量
石棒	1	49.9	0	0	0	0
石棒未成品	166	325.5	0	0	69	85
磨製石斧	4	66.8	0	0	0	0
石鎌	85	108.2	0	0	8	31
石鎌未成品	34	20.0	0	0	0	0
石刀	6	20.0	0	0	0	0
石斧	6	41.2	0	0	0	0
地形石器	3	62.5	0	0	0	0
削器	38	165.2	0	0	0	0
打制石斧	2	33.0	0	0	0	0
礫	4	2,406.4	0	0	0	0
石斧	10	340.7	0	0	0	0
石棒未成品	1	38.2	0	0	0	0
鐵石	33	6,925.1	剪石 5	1,984.3	0	0
鐵石	17	6,414.0	鐵石 1	37.1	0	0
鐵石	71	41,612.5	鐵石 1	31,109.8	0	0
加工軟砂岩	34	1,645.8	円石 1	93.2	0	0
圓石	17	25,538.7	圓石 1	31,109.8	0	0
その他	3	29.1	加工 1	93.2	0	0
剥片類	4,653	34,504.4	0	0	—	—
礫	51 mm以下	50 mm以上	50 mm以上	50 mm以上	0	0
礫	647	111,737.1	0	0	0	0
合計	15,722	287,273.9				

重量の単位は「g」である。
■複合点数と複合重量とは、転用等により同一の石器に複数の記録を認めた場合、それそれぞれの点数と重量を加算していることを意味する。

■石棒未成品のうち、個々の重量は0.1g未満のものは重量の合計に含めていない。

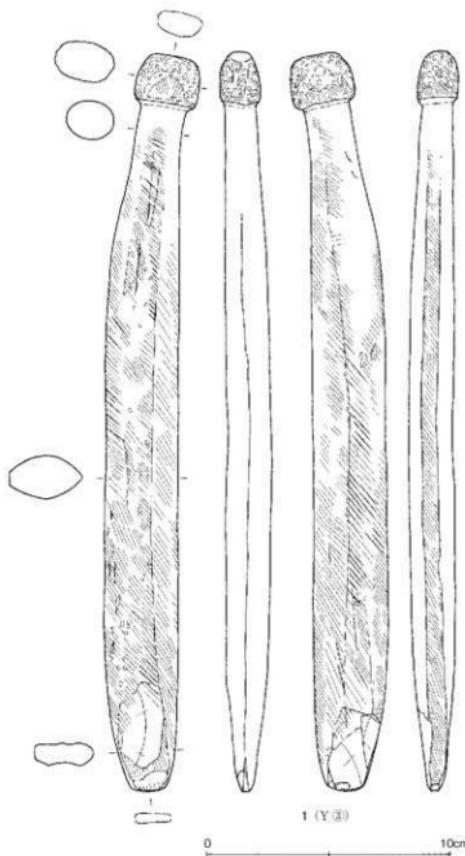
■加工軟砂岩は、加工前の軟砂岩であり、これは剥片類の点数と重量には、水洗選別で検出されたものは含まれない。

製作に伴うものと考えられる。胸部の他の大部分は、研磨が進行しており、剥離及び敲打の痕跡は僅かである。胸部には研磨に伴う擦痕が明瞭に残されている。研磨方向は、長軸に対して右下がりの斜位を示す。頭部は、部分的に研磨されてはいるものの、ほとんどが敲打により整形されたままの状態である。成品に近い状態ではあるが、研磨段階の未成品と考えられる。

第31図2は、石剣の胸部である。全体的に研磨されているが、裏面の中央付近には、剥離と敲打の痕跡が多く残されている。研磨に伴う擦痕は明瞭である。研磨方向は、長軸に対して横位を示すものがほとんどであるが、基部付近では、長軸に対して縱位、右下がりの斜位にも施されている。研磨段階の途中で欠損した未成品と考えられる。

第31図3は、石剣の頭～胸部である。頭部には、節理面が残されている。これは、素材の礫表面であり、最大厚が頭部に設定されたことによるのであろう。頭部には、端部の除去を目的としたような剥離の痕跡が見られる。頭部の表面は、剥離の痕跡をほとんど残さないほどに敲打が進行している。頭部が節理面で剥がれており、敲打段階の途中で欠損した未成品と考えられる。

第31図4は、石剣と推定される頭部である。頭部の表



第30図 石器実測図1 矢部素子氏採集石棒(1)

面には、剥離と敲打の痕跡が残されており、剥離痕が未調整の部分も多い。胴部が節理面で割れており、敲打段階の途中で欠損した未成品と考えられる。

第31図5は、胴部の破片である。胴部の表面には、剥離と敲打の痕跡が残されている。敲打段階の途中で欠損した未成品と考えられる。

第31図6は、石剣の胴～基部である。ほとんどが剥離面の状態であり、敲打は、剥離面の境界の棱を潰すように施されている。敲打段階の初期に欠損した未成品と考えられる。

これらは、6点とも未成品と考えられるものである。



第6表 矢部素子氏採集石棒一覧表

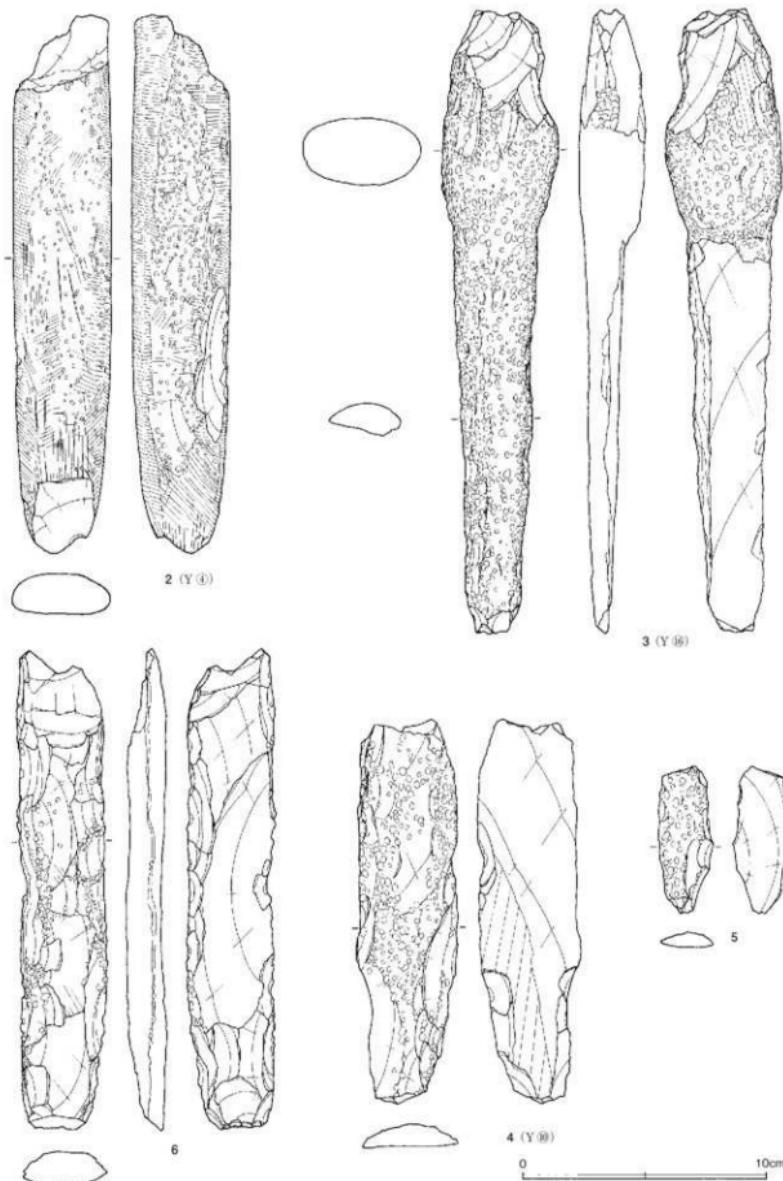
標号	位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作段階
第30B1	第3-4回3	粘板岩	30	30	18	280.0	研磨・敲打
第31B2	第3-4回4	粘板岩	220	40	17	239.5	研磨
3	第3-4回6	粘板岩	255	48	27	279.3	敲打
4	第3-4回8	粘板岩	157	41	9	103.3	敲打
5	—	粘板岩	60	23	6	90	敲打
6	—	粘板岩	196	35	16	159.0	研・敲

*「長さ」「幅」「厚さ」の単位は「mm」、「重量」の単位は「g」である。

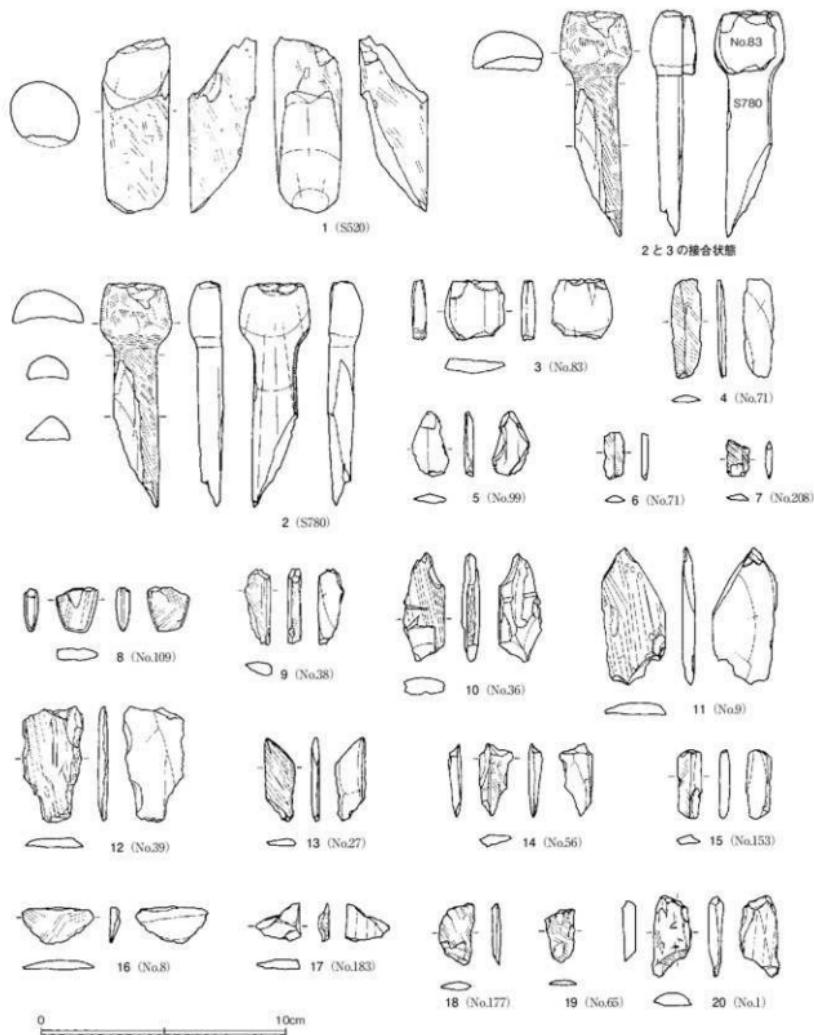
発掘調査においても、石棒の製作に関わる未成品の破片及び剥片が多数出土した。

数 量 石棒及び石棒未成品は、微細な破片を含めて167点が検出された(第32～34図、第7表)。そのうち69点は、水洗選別によるものである。微細な破片が多く、総重量は375 g余にすぎない。これは、完形の石刀(第30図1)と比較すると、1個体分はあっても2個体分には足りない重量である。

石 材 石材は全て粘板岩である。本覚遺跡においては、粘板岩で製作された石器は他に石錐のみであった。製作に剥離、敲打、研磨といういづれかの工程を有する



第31図 石器実測図2 矢部素子氏採集石棒(2)



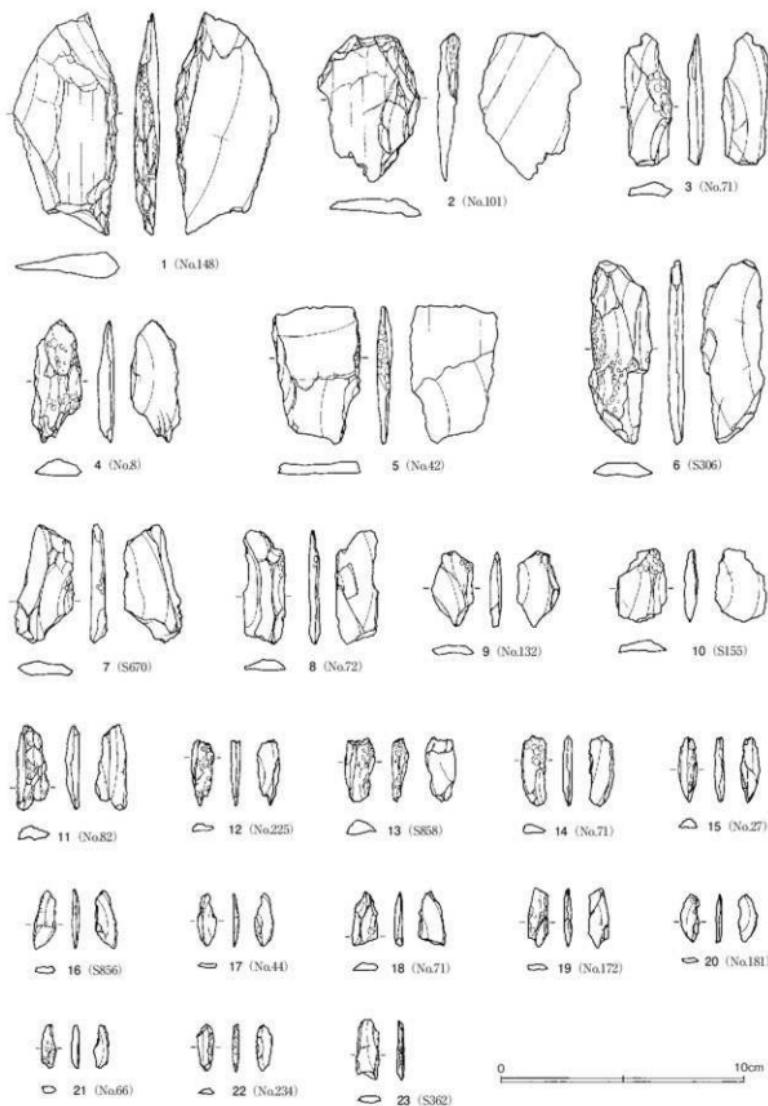
第32図 石器実測図3 石棒(1) (研磨段階)

打製石器及び磨製石器は認められない。したがって、微細な剥片・碎片についても、石棒製作に関わるものと捉えることになる。

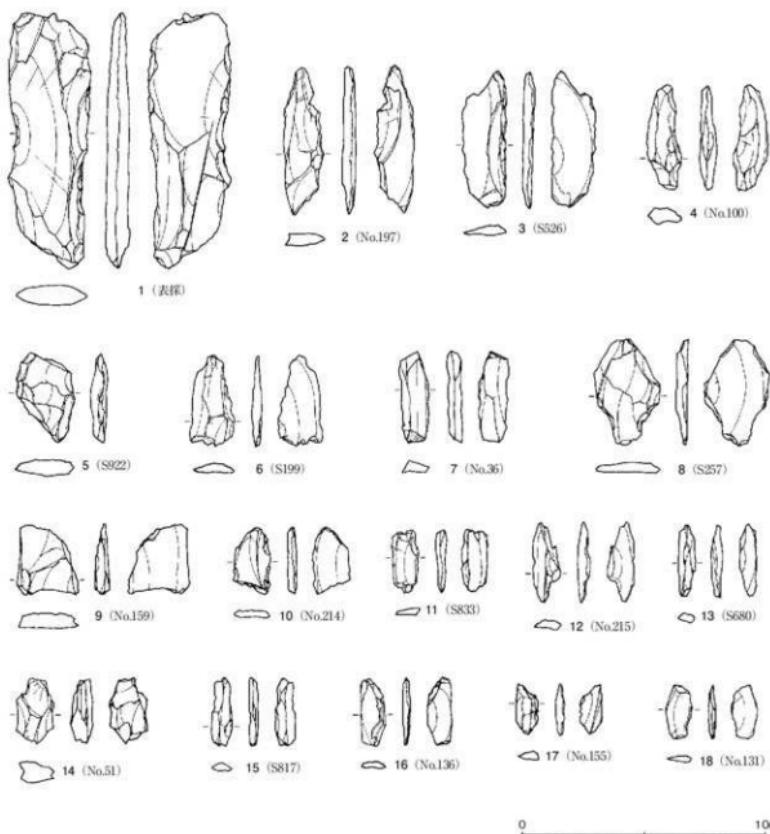
石棒・石劍・石刀の分類 広義の石棒は、胴部の断面形状を指標として、石棒、石劍、石刀の3つに分類さ

れている。

断面形状が円形あるいは稍円形を呈する狭義の石棒は、1点(第32図1)のみ破片が検出された。これは全体が研磨されており、その研磨に伴う擦痕も浅く僅かに観察されるにすぎない。成品と捉えられるものであり、欠



第33図 石器実測図4 石棒(2) (敲打段階)



第34図 石器実測図5 石棒(3) (剥離段階)

損は使用に伴うものとも考えられる。本覚遺跡からは、脇部の断面形状を円形あるいは楕円形に整形するような確実な未成品は検出されておらず、石材は、粘板岩であっても、これのみが色調等の特徴を異にする。

断面形状が菱形を呈する石剣の破片は、研磨段階の4点(第32図4~7)、剥離段階の1点(第34図1)がある。研磨段階の破片には、剣の箱に相当する稜部分が残されている。

断面形状が楔形を呈する石刀の破片は、研磨段階の3点(第32図8~10)がある。これらの破片には、刀の峰に相当する側面の平坦部が残されている。

他の破片については、石剣あるいは石刀いずれかの未

成品の破片、製作に伴う剥片・碎片と推定される。

製作の痕跡 石剣あるいは石刀の製作に関わる破片は166点が検出された。これらは、表面に残された製作の痕跡から大きく3つの製作段階に分類できる。

研磨段階—研磨痕があるもの

敲打段階—研磨痕がなく、敲打痕があるもの

剥離段階—研磨痕、敲打痕がなく、剥離痕があるもの

研磨段階の破片は20点であり、19点(第32図2~20)を掲載している。表面に敲打痕あるいは剥離痕を残すもの(第32図11・12・14・19)もあるが、研磨が進行し平滑な状態のものが多い。研磨に伴う擦痕は概ね明瞭であり、脇部では長軸に対して右下がりの斜位、縦位に施されて

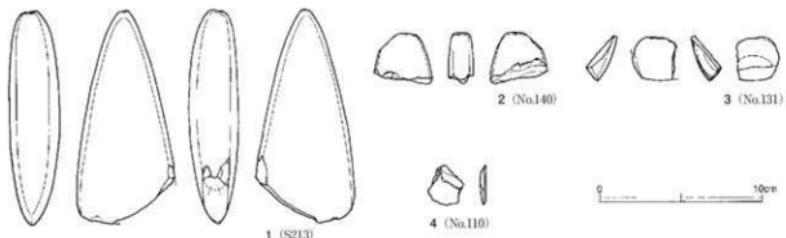
第7表 石棒一覧表

地区	番号	地区	位置	石	材	見きさ	幅	厚さ	重量	製作販路	備考
332	II-S20	B-24	■	粘板岩	72	26	49	研磨			
S-2	S-79	8	■	粘板岩	92	14	260	研磨	N683組合		
S-3	N-683	3	■	粘板岩	25	14	52	研磨	S780高台		
4	N-670	I-B-24	■	粘板岩	40	12	31	17	研磨		
5	N-699	I-B-19	■	粘板岩	26	14	31	17	研磨	摩滅	
6	N-699	I-B-24	■	粘板岩	31	14	31	17	研磨		
7	N-698	I-B-24	■	粘板岩	15	6	2	0.51	研磨	水洗	
8	N-109	I-B-24	■	粘板岩	18	17	51	19	研磨		
9	N-638	19	■	粘板岩	31	11	51	25	研磨		
10	N-636	12	■	粘板岩	44	17	7	65	研磨		
11	N-699	13	■	粘板岩	56	26	5	87	研磨		
12	N-639	8	■	粘板岩	47	25	4	62	研磨	研磨	
13	N-640	7	■	粘板岩	30	13	5	151	研磨		
14	N-606	23	■	粘板岩	28	10	4	151	研磨		
15	N-533	8	■	粘板岩	15	28	4	161	研磨		
16	N-608	9	■	粘板岩	15	29	4	161	研磨		
17	N-183	8	■	粘板岩	16	16	4	111	研磨		
18	N-608	8	■	粘板岩	25	11	31	24	研磨	水洗	
19	N-633	10	■	粘板岩	25	11	31	24	研磨		
20	N-001	表裏	■	粘板岩	33	16	6	341	研磨	焼成	
333	I-N-68	7	■	粘板岩	91	10	36	31	研磨		
I-N-101	13	■	粘板岩	60	12	10	180	研磨			
I-N-071	I-B-24	■	粘板岩	54	16	7	60	研磨			
I-N-008	9	■	粘板岩	50	20	7	66	研磨			
I-N-542	9	■	粘板岩	56	26	6	116	研磨			
I-N-670	5	■	粘板岩	24	11	7	92	研磨			
I-N-672	I-B-24	■	粘板岩	46	27	4	41	研磨			
I-N-632	7	■	粘板岩	31	17	4	21	研磨			
I-S-135	4	■	粘板岩	50	5	28	38	研磨			
I-N-682	I-B-24	■	粘板岩	34	16	6	26	研磨			
I-N-683	I-SK1	■	粘板岩	9	16	6	26	研磨			
I-S-888	I-B-24	■	粘板岩	26	12	6	194	研磨			
I-N-071	I-B-24	■	粘板岩	29	10	4	141	研磨			
I-N-067	7	■	粘板岩	26	8	4	67	研磨			
I-S-886	I-B-24	■	粘板岩	24	9	3	65	研磨			
I-N-644	13	■	粘板岩	21	7	2	53	研磨			
I-N-172	4	■	粘板岩	17	1	1	41	研磨			
I-N-181	8	■	粘板岩	19	8	2	63	研磨			
I-N-066	3	■	粘板岩	18	6	3	63	研磨			
I-N-234	3	SK1	■	粘板岩	7	2	1	23	研磨	水洗	
I-S-362	3	■	粘板岩	24	9	2	67	研磨	摩滅		
I-N-001	表裏	■	粘板岩	105	41	10	453	研磨			
I-S-526	3	■	粘板岩	56	18	4	52	研磨			
I-N-100	I-B-24	■	粘板岩	43	14	7	38	研磨			
I-S-922	3	SK1	■	粘板岩	37	21	6	60	研磨		
I-S-199	8	■	粘板岩	37	14	8	42	研磨			
I-N-006	I-B-24	■	粘板岩	37	3	6	30	研磨	圓切痕		
I-N-159	5	■	粘板岩	29	26	6	53	研磨			
I-N-674	3	■	粘板岩	17	5	4	47	研磨			
I-I-S-833	B-24	■	粘板岩	25	11	4	111	研磨			
I-N-215	B-19	■	粘板岩	33	11	4	111	研磨			
I-S-680	3	■	粘板岩	29	7	4	68	研磨	焼成		
I-N-131	1	■	粘板岩	28	1	1	31	研磨			
I-S-817	B-24	■	粘板岩	28	8	2	91	研磨			
I-N-136	8	■	粘板岩	28	10	3	110	研磨			
I-N-155	8	■	粘板岩	20	9	3	66	研磨			
I-N-031	I-B-19	■	粘板岩	22	10	3	66	研磨			
I-N-005	3	■	粘板岩	13	8	3	61	研磨	摩滅		
I-N-006	3	■	粘板岩	24	31	3	38	研磨			
I-N-007	3	■	粘板岩	12	9	2	62	研磨	摩滅		
I-N-085	3	■	粘板岩	18	14	2	0.9	研磨			
I-N-085	3	■	粘板岩	19	12	4	1.08	研磨			
I-N-037	3	■	粘板岩	15	7	1	0.2	研磨			
I-N-037	3	■	粘板岩	14	6	2	0.2	研磨			
I-N-028	3	■	粘板岩	12	6	2	0.1	研磨	水洗		
I-N-028	3	■	粘板岩	11	6	2	0.1	研磨	水洗		
I-N-028	3	■	粘板岩	11	4	0.1	0.01	研磨	水洗		
I-S-797	3	■	粘板岩	45	21	6	64	研磨	摩滅 分析		
I-S-904	3	■	粘板岩	21	7	2	0.4	研磨	摩滅		
I-N-024	3	SK1	■	粘板岩	51	2	0.2	0.01	研磨	水洗	
I-N-024	3	SK1	■	粘板岩	16	5	2	0.2	研磨	水洗	
I-N-024	3	SK1	■	粘板岩	25	1	0.2	0.01	研磨	水洗	
I-N-024	3	SK1	■	粘板岩	16	7	2	0.2	研磨	水洗	
I-N-024	3	SK1	■	粘板岩	22	1	0.2	0.01	研磨	水洗	
I-N-013	3	SK1	■	粘板岩	12	7	1	0.1	研磨	摩滅	
I-N-009	3	SK1	■	粘板岩	11	2	0.1	0.01	研磨	水洗	
I-N-019	14	■	粘板岩	17	11	2	0.4	研磨			
I-N-051	14	■	粘板岩	17	9	5	0.1	0.01	研磨	摩滅	
I-N-051	14	■	粘板岩	8	6	3	0.1	0.01	研磨	摩滅	
I-N-114	19	■	粘板岩	7	3	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-177	8	■	粘板岩	8	2	2	0.1	0.01	研磨	水洗	
I-N-177	8	■	粘板岩	22	15	2	1.1	研磨			
I-N-228	8	■	粘板岩	25	12	2	0.5	研磨			
I-N-309	8	■	粘板岩	16	8	3	0.7	研磨	水洗 摩滅		
I-N-309	8	■	粘板岩	13	4	2	0.4	研磨	水洗		
I-N-309	8	■	粘板岩	13	4	2	0.4	研磨	水洗		
I-B-57	8	■	粘板岩	9	3	2	0.1	研磨			
I-N-156	8	■	粘板岩	9	5	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-156	8	■	粘板岩	9	4	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-156	8	■	粘板岩	8	3	2	0.1	研磨	水洗		
I-N-172	8	■	粘板岩	12	7	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-172	8	■	粘板岩	8	3	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-172	8	■	粘板岩	8	3	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-172	8	■	粘板岩	7	3	1	0.1	研磨	水洗		
I-N-172	8	■	粘板岩	8	2	2	0.1	研磨	水洗		
I-N-184	8	■	粘板岩	10	7	6	1.0	研磨	水洗		
I-N-184	8	■	粘板岩	10	7	6	1.0	研磨	水洗		
I-N-184	8	■	粘板岩	10	7	6	1.0	研磨	水洗		
I-N-160	8	■	粘板岩	15	5	2	0.2	研磨	水洗		
I-N-223	8	PGL	■	粘板岩	8	2	2	0.1	研磨	水洗	
I-N-154	8	■	粘板岩	10	12	2	0.2	研磨	燒成		
I-N-154	8	■	粘板岩	26	10	4	1.0	研磨			
I-N-008	1	■	粘板岩	32	20	5	3.9	研磨	摩滅 分析		
I-N-014	12	■	粘板岩	41	10	2	0.5	研磨			
I-N-030	12	■	粘板岩	16	7	2	0.2	研磨			
I-N-088	12	■	粘板岩	22	16	2	1.0	研磨			
I-N-013	13	■	粘板岩	12	7	1	0.1	研磨	摩滅		
I-N-009	13	■	粘板岩	11	2	1	0.1	研磨	摩滅		
I-N-019	14	■	粘板岩	17	11	2	0.4	研磨			
I-N-051	14	■	粘板岩	9	5	1	0.1	研磨	摩滅		
I-N-051	14	■	粘板岩	8	6	3	0.1	研磨	摩滅		
I-N-114	19	SK1	■	粘板岩	14	5	2	0.1	研磨		
I-N-118	19	SK1	■	粘板岩	50	18	5	5.2	研磨	摩滅 分析	
I-N-227	19	■	粘板岩	12	8	3	0.4	研磨	摩滅 分析		
I-N-227	19	■	粘板岩	13	9	2	0.5	研磨	摩滅 分析		
I-N-227	19	■	粘板岩	13	9	2	0.5	研磨	摩滅 分析		
I-N-227	19	■	粘板岩	14	6	2	0.2	研磨	摩滅 分析		
I-N-227	19	■	粘板岩	21	13	2	0.9	研磨	摩滅 分析		
I-N-167	19	■	粘板岩	16	7	2	0.2	研磨	摩滅 分析		
I-N-228	19	■	粘板岩	7	3	<0.1	0.01	研磨	水洗		
I-N-053	3	SK1	■	粘板岩	41	7	11	0.2	研磨		

*粘板岩の調片については通常の計測とは異なり、「長さ」が調片の幅に、「幅」が調片の長さに相当する。

*「長さ」「幅」「厚さ」の単位は「mm」、「重量」の単位は「g」である。第8～20表についても同様。

いる。基部であることが確実な破片(第32図8)には縦位が観察される。2・3は、石剣あるいは石刀の頭部を含む破片であり、頭部の形態は矢部式採集の石刀(第30図1)に類似する。この頭部には多方向、頭部には横位の擦痕が残されている。なお、第32図20には、擦切りのような痕跡が見られる。



第35図 石器実測図6 磨製石斧

含まれると考えられるが、その分別は難しい。第33図1・2の表面には、素材の疊表面であったと考えられる節理面が残されている。矢部氏採集の石剣(第31図3)から推して、これらは、頭部の破片と考えられる。同一個体の可能性もあるが、接合はしなかった。

剥離段階の破片は119点であり、18点(第34図1~18)を掲載している。剥離段階で欠損した本体と推定されるものは1点(第34図1)のみであり、他は調整に伴う剥片・碎片と考えられる。剥片は、最も大きいものでも長さ61mmであり、微細なものが多い。また、小さな剥片であっても、背面が複数の剥離痕で構成されたものが多く、自然面や單一の剥離痕で構成されるものは見られない。なお、第34図7には、掠切りのような痕跡が見られる。

2 磨製石斧

数量 磨製石斧は、部分的な破片を含めて4点が検出された(第35図、第8表)。

石材 石材は、細粒斑れい岩が2点、蛇紋岩が1点、角閃岩が1点である。

形態 形態が明らかなもの(第35図1)、形態が推定できるもの(第35図2・3)は、いずれも所謂「定角式」である。

3 石鏃

数量 石鏃は、部分的な破片を含めて85点が検出された(第9表)。そのうち50点を掲載している(第36・37図)。また、石鏃の未成品と考えられる二次加工が施された剥片は、34点が抽出された(第9表)。そのうち24点を掲載している(第38図)。

85点の石鏃のうち8点は、水洗選別で検出されたものである。水洗選別を実施したのは、第Ⅲ層の一部のみで

第8表 磨製石斧一覧表

種別	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	標名
第35図	S213	8	Ⅲ	細粒斑れい岩	130	61	60	314.6	地表
	No.140	8	Ⅲ	蛇紋岩	31	35	16	25.6	地表?
	No.219	Ⅱ-19	Ⅲ	角閃岩	27	27	18	10.2	
	No.110	3	Ⅲ	細粒斑れい岩	24	22	31	1.8	

あり、平面積は合計でも2.4m²に過ぎない。45m²の調査面積全体について水洗選別を実施したならば、第Ⅲ層だけで150点、第Ⅰ・Ⅱ層を含めると300点近い数の石鏃が検出できなかった計算になる。水洗選別の土壌の採取地点が、結果として石鏃が多く出土した部分に設定されていたことから、これは多めに算出されているのであろうが、それでも検出できなかった石鏃は相当数あると考えられる。

石材 素材は、観察できたもの全てが剥片である。石材は、メノウが56点、チャートが14点、珪質頁岩が6点、オパールが6点、トロトロ石が3点である。その比率は、メノウ66%、チャート16%、珪質頁岩7%、オパール7%、トロトロ石4%となる。

形態 石鏃は、基部の形態を指標として大きく3つに分類されている[鈴木(道)1981]。基部が残存せずに分類が不明なものは12点。73点の形態と、推定を含む数量は次の通り。

有茎鏃——37点 (第36図1~25)

無茎鏃——28点 (第37図1~19)

尖・円基鏃—8点 (第36図26~31)

有茎鏃は、さらにも凸基、凹基、平基に細別されており、各形態の推定を含む数量は次の通り。

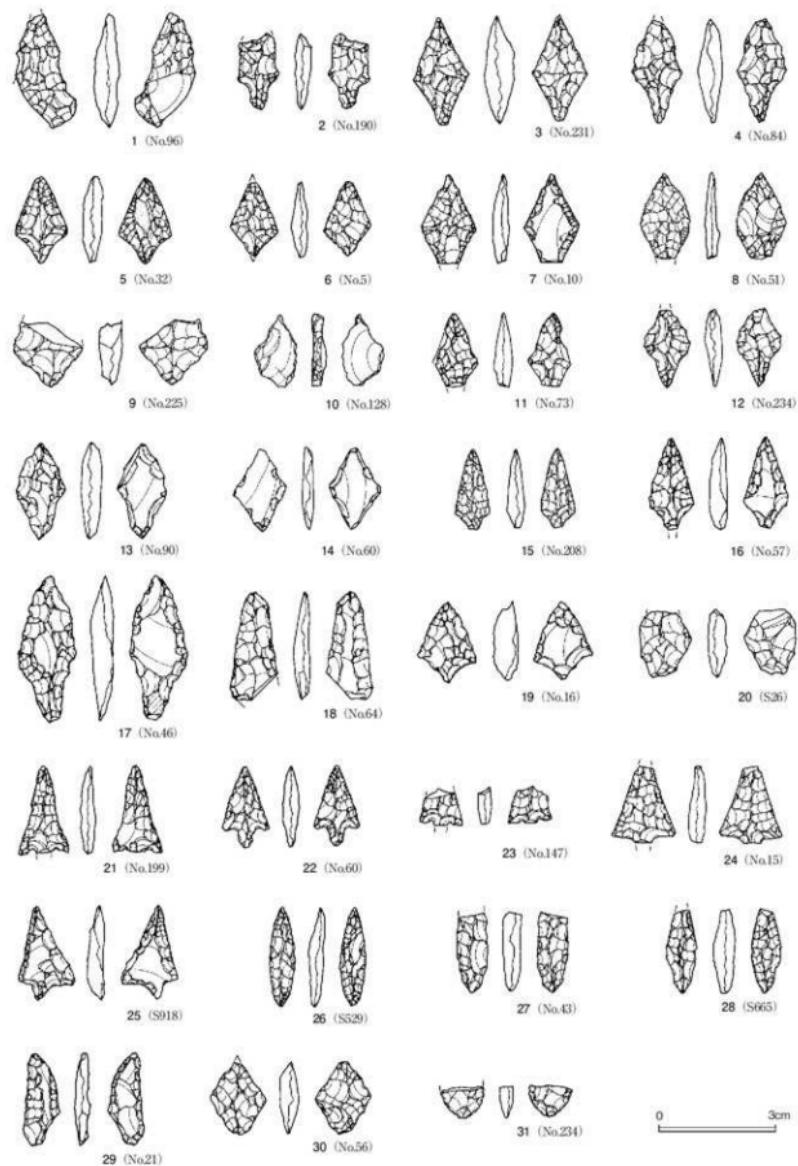
凸基有茎鏃—29点 (第36図1~20)

凹基有茎鏃—4点 (第36図21~23)

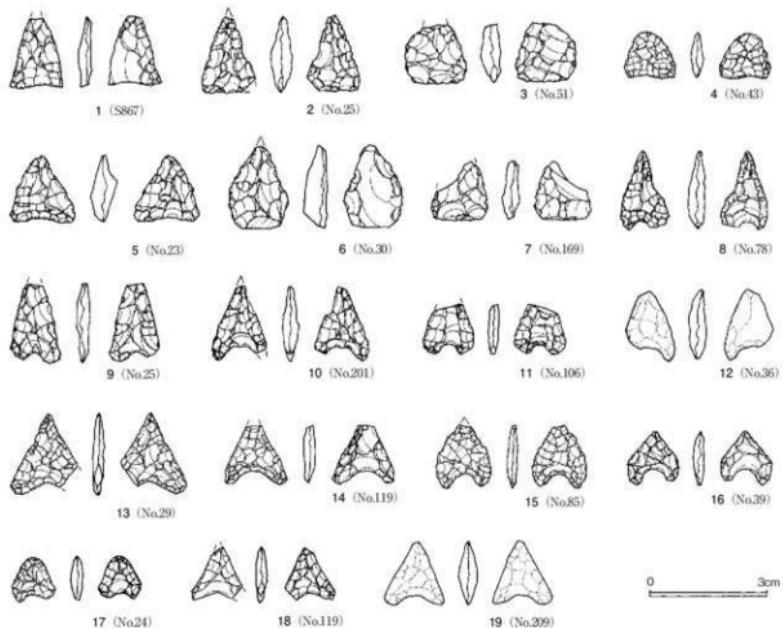
平基有茎鏃—2点 (第36図24~25)

無茎鏃は、さら凹基と平基に細別されており、各形態の数量は次の通り。

凹基無茎鏃—18点 (第37図8~19)



第36図 石器実測図7 石鏃(1) (有茎鏃・尖基鏃・円基鏃)



第37図 石器実測図8 石鎚(2) (無茎鎚)

平基無茎鎚—10点 (第37図1~7)

尖・円基鎚は、尖基と円基に細別されており、各形態の数量は次の通り。

尖基鎚——5点 (第36図26~29)

円基鎚——3点 (第36図30・31)

有茎鎚のなかでも凸基有茎鎚が29点と最も多く、これに凹基無茎鎚が18点で次ぐ。

形態と石材 石鎚の形態と石材は次のような関係にある。

有茎鎚——37点の石材は、メノウが23点、チャートが6点、珪質頁岩が6点、トロトロ石が1点、オパールが1点である。

無茎鎚——28点の石材は、メノウが19点、チャートが6点、トロトロ石が2点、オパールが1点である。

尖・円基鎚—8点の石材は、メノウが5点、オパールが2点、チャートが1点である。

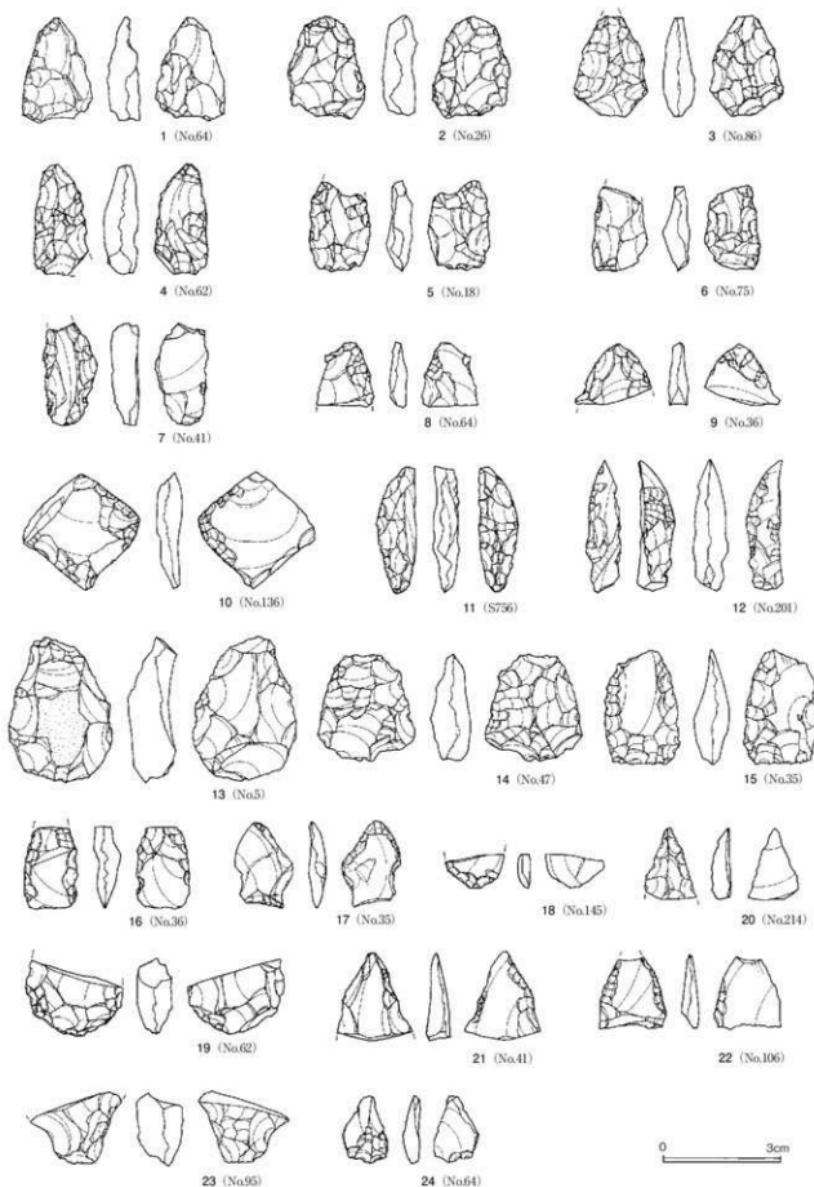
各形態ともメノウが最も多い。有茎鎚ではメノウに次ぎ、チャートと同数を占める珪質頁岩が、無茎鎚では見

られない。有茎鎚では剥離の稜線及びリングが観察できるトロトロ石が、無茎鎚ではリングはもとより稜線も判然としない状態にある。表面の風化の進行に歴然とした差が認められるのである。これは、石鎚が製作された時期の違いによるものとも考えられる。そうすると、無茎鎚には早~後期の石鎚が確実に含まれており、珪質頁岩の利用についても、時期差と捉えられるかもしれない。

製作の痕跡 石鎚の未完成として抽出された34点の石材は、メノウが19点、チャートが7点、珪質頁岩が6点、流紋岩が1点、黒曜石が1点である。流紋岩と黒曜石については、成品を検出することができなかつたが、これらの石材も石鎚の製作に利用されたことが考えられる。メノウ、チャート、珪質頁岩の比率は、有茎鎚の石材の比率にはほぼ一致する。

石鎚の未完成は、調整方法から大きく2つに分類できる。

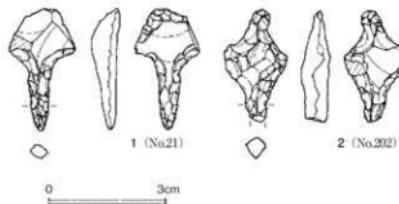
I類—全体が敲打剥離、あるいはこれに押圧剥離を加えて調整されているもの (第38図1~7・11~14・19)



第38図 石器実測図9 石錐(3) (未成品)

第39表 石器一覧表

地図	番号	地区	位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第36図	No.096	3	II メノウ	19	15	61	19		
	No.190	II.19	III メノウ	19	10	41	0.7		
	No.231	II.24	III メノウ	27	14	74	20		
	No.084	3	II メノウ	26	13	6	14		
	No.032	14	II メノウ	22	13	5	12		
	No.005	9	II メノウ	19	12	4	0.6		
	No.010	13	II メノウ	22	14	4	1.0		
	No.051	14	II メノウ	22	13	3	0.7		
	No.003	3	SK1 メノウ	16	17	6	1.3		
	No.128	II.19	II メノウ	16	10	4	0.7		
	No.073	II.24	チャート	18	14	3	0.7		
	No.234	3	SK1 チャート	20	11	4	0.8	未洗	
	No.090	10	I-II チャート	24	12	5	1.6		
	No.060	5	II チャート	20	13	2	0.8		
	No.205	3	珪質頁岩	20	8	4	0.5	未洗	
	No.057	II.24	珪質頁岩	22	11	4	0.9	未洗	
	No.046	7	珪質頁岩	37	15	5	2.2		
	No.064	II.24	珪質頁岩	28	11	4	1.1		
	No.016	19	トロトロ石	20	15	6	1.6		
	No.026	12	オバール	17	13	5	1.0		
	No.061	II.19	メノウ	22	13	3	0.7		
	No.009	3	メノウ	20	11	4	0.6		
	No.147	7	II チャート	9	11	2	0.4		
	No.015	12	II チャート	19	16	4	1.1		
	S.918	3	珪質頁岩	24	14	4	0.9		
	S.529	19	SK1 メノウ	25	6	4	0.5		
	No.043	9	メノウ	20	8	5	0.8		
	S.665	3	オバール	21	8	5	0.8		
	No.021	7	II チャート	22	9	4	0.8	加工	
	No.056	23	II メノウ	18	14	5	1.0	未洗	
	No.234	3	SK1 オバール	8	11	3	0.2	未洗	
第37図	S.862	II.24	II メノウ	18	14	3	0.6		
	No.045	14	II メノウ	18	14	3	0.6		
	No.051	14	II メノウ	15	16	5	1.2		
	No.043	9	II メノウ	12	13	3	0.4		
	No.023	4	II チャート	17	17	7	1.2		
	No.030	12	II チャート	21	15	6	1.8		



第39図 石器実測図10 石錐

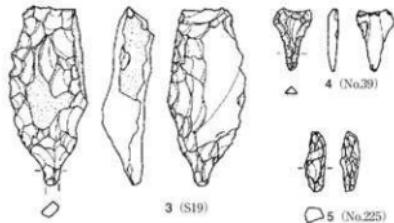
~ 21・23)

II類—剥片の一部に押圧剥離による調整が残されているもの（第38図8～9・15～18・24）

I類は、石錐を拡大したような形状を呈し、II類は、素材とした剥片の形状が大部分残されている。メノウ、チャート、珪質頁岩のそれぞれの石材にI・II類があることから、これらは特定の石材と対応するものではない。素材が厚手の剥片にはI類、薄手の剥片にはII類が対応すると考えられる。

この他、未成品は抽出できなかったが、成品と考えた石錐には、周縁を折り取るようにして形態を調整したもの（第36図10・13・14）がある。表面に素材の剥片の剥離面を大きく残し、剥片の厚さがほぼ石錐の厚さに相当する。これらは、粗製的印象を受ける。さらに、尖基錐に分類したチャートの1点（第36図29）は、別形態の石錐

地図	番号	地区	位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第38図	No.169	II.24	III オバール	15	14	4	0.7		
	No.078	II.24	III メノウ	19	12	4	0.8		
	No.025	19	II メノウ	20	13	3	0.7		
	No.201	II.24	III チャート	19	14	4	0.7		
	No.106	3	III チャート	12	13	3	0.5		
	No.036	12	II トロトロ石	18	12	4	0.7		
	No.029	9	II メノウ	21	17	3	0.7		
	No.119	II.19	I-II メノウ	15	16	3	0.6		
	No.025	3	III メノウ	16	14	3	0.5		
	No.024	4	II メノウ	13	11	3	0.3		
	No.119	II.19	I-II チャート	13	13	2	0.3		
	No.209	4	III トロトロ石	15	15	5	0.7	未洗	
第38図	No.041	II.24	I メノウ	26	18	8	3.8		
	No.026	4	II メノウ	27	19	8	5.0		
	No.08	3	III メノウ	26	18	8	3.2		
	No.062	8	II メノウ	28	14	9	3.4		
	No.018	8	II メノウ	22	16	6	2.2		
	No.075	8	III メノウ	21	14	7	1.9		
	No.044	21	III メノウ	26	17	7	2.8	焼痕	
	No.044	21	I メノウ	16	14	4	1.1		
	No.035	12	II メノウ	16	20	5	0.9		
	No.136	II.24	III メノウ	20	30	6	4.8		
	S.756	8	III メノウ	33	10	7	1.9		
	No.201	II.24	III メノウ	33	9	9	2.5		
	No.005	9	I チャート	37	27	12	11.7		
	No.047	23	I チャート	27	25	10	7.2		
	No.035	7	II チャート	30	19	9	5.0		
	No.036	12	II チャート	21	13	7	2.0		
	No.073	7	II チャート	22	15	5	1.3		
	No.145	7	II チャート	9	15	3	0.4		
	No.032	8	珪質頁岩	19	9	9	2.4	焼痕	
	No.035	9	II チャート	18	13	3	0.6	焼痕	
	No.041	23	I 硅質頁岩	22	19	6	1.8		
	No.106	3	II 硅質頁岩	18	17	4	1.1		
	No.095	II.24	III 硅質頁岩	18	23	12	4.1		
	No.064	II.24	I 黒曜石	17	11	4	0.6		



第10表 石錐一覧表

地図	番号	地区	位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第39図	No.021	7	II チャート	31	16	7	2.0		
	No.032	II.19	I-II メノウ	28	16	7	2.0		
	S.019	14	II トロトロ石	46	19	13	9.6		
	No.089	8	II チャート	16	10	2	0.4		
	No.265	3	SK1 メノウ	15	5	4	0.5		

を縱半分にするような再加工により製作されている。

4 石錐

数 量 石錐は、6点が検出された。そのうち5点を掲載している（第39図、第10表）。

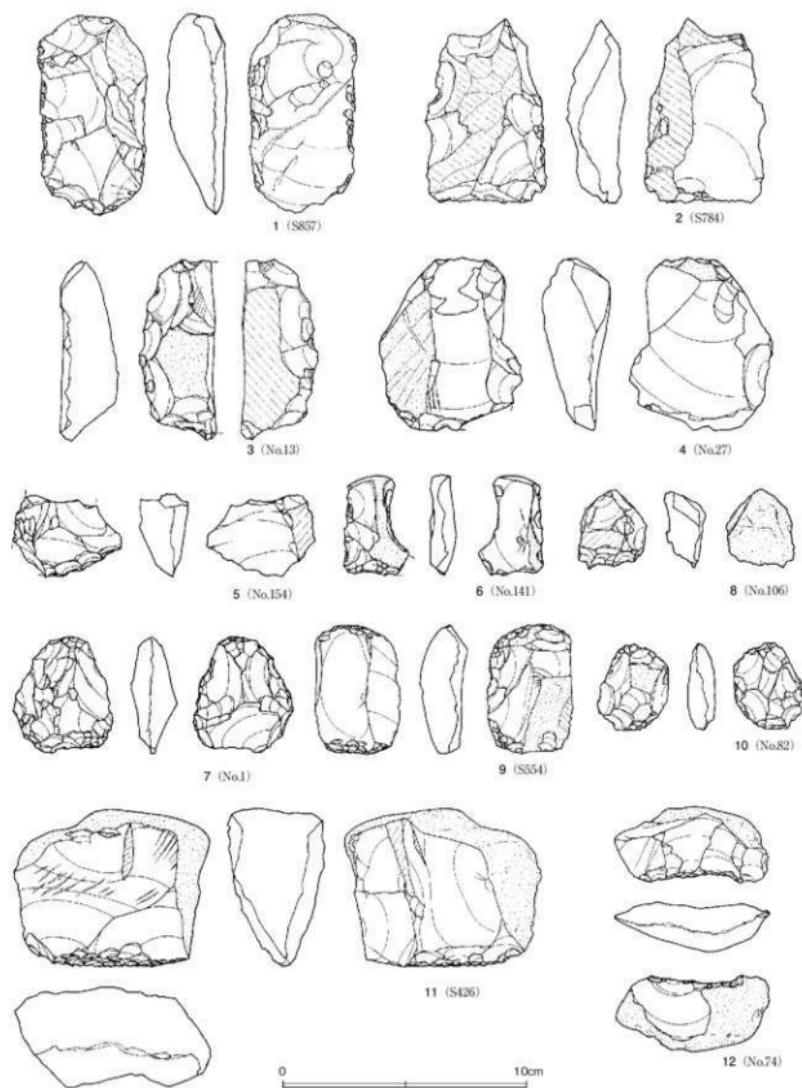
石 材 素材は全て剥片である。石材は、チャートが3点、メノウが2点、トロトロ石が1点である。

形 態 石錐は、つまみ状の頭部の有無を指標として大きく2つに分類できる。

有頭石錐 5点（第39図1～4）

無頭石錐 1点（第39図5）

掲載していない1点も有頭石錐の頭部破片であり、有



第40図 石器実測図11 搗器・模形石器・削器(1)

頭石難が多い。錐部の断面形状には、三角形のもの(第39図4)と菱形のもの(第39図1~3・5)があり、菱形を呈するものが多い。

5 挿器

数量 挿器は、8点が検出された(第40図、第11表)。いずれも長軸の端部に急角度の刃部を作出している。

石材 素材は全て剥片である。石材は、珪質頁岩が5点、メノウが2点、トロトロ石が1点である。

法量 挿器は、法量から大きく2つに分類できる。

大型—長さ70mm以上のもの 4点(第40図1~4)

小型—長さ50mm以下のもの 4点(第40図5~8)

大型には、鎧状石器(石鎧)に似た法量と形態を呈するものがある。東北地方で検出される典型的な鎧状石器と比較すると、全体の整形が粗雑なことから挿器として分類した。

法量と石材 大型、小型とも珪質頁岩が主要な石材であるが、大型にはトロトロ石、小型にはメノウを石材としたものがある。

6 梗形石器

数量 梗形石器として、3点を抽出した(第40図、第11表)。そのうち2点を掲載している。

石材 素材は全て剥片である。3点の長軸は36~53mmであり、長軸50mm前後の剥片を素材としている。石材は、珪質頁岩が2点、流紋岩が1点である。

第40図9は、横長剥片の対向する縁間に細かな剥離痕が集中する。第40図10ともう1点については、対向する縁間に細かな剥離痕が見られるが、第40図9のようには明確でない。

7 削器

数量 剥片の縁辺を加工して刃部を作出したもの、または剥片の縁辺に明瞭な使用痕が観察されたものに限定して削器を抽出した。点数は37点である(第40~44図、第11表)。この他にも、加工された可能性のある細かな剥離が僅かに連続する剥片、使用された可能性のある微細な欠損が残された剥片は少なくない。しかし、これらには、偶発的な衝突の痕跡、あるいは後世の傷跡の可能性も含むことから、検討の対象から除外している。

第11表 挿器・梗形石器・削器一覧表

番号	地名	断面	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第40回 8	S-857	Ⅱ-24	珪質頁岩	81	44	28	90.1	
2	S-784	8	珪質頁岩	75	49	24	75.5	
3	N-6013	13	珪質頁岩	74	32	24	61.8	
4	N-6027	7	トロトロ石	70	60	28	107.5	
5	N-6154	8	珪質頁岩	33	44	20	20.2	
6	N-6141	10	珪質頁岩	41	26	11	11.6	
7	N-6006	西斜	メノウ	47	40	20	20.3	
8	N-6006	直	メノウ	53	26	20	30.9	
9	S-554	8	珪質頁岩	53	35	20	30.9	
10	N-6082	Ⅱ-24	流紋岩	36	30	11	12.0	
11	S-626	3	トロトロ石	65	81	42	231.3	
12	N-6074	5	珪質頁岩	31	63	21	34.3	
第11回 9	N-219	Ⅱ-24	SiK3	61	108	22	94.6	
2	N-109	Ⅱ-24	珪質頁岩	58	91	16	59.0	
3	S-723	10	珪質頁岩	81	63	21	61.3	
4	N-6067	12	珪質頁岩	30	26	10	10.4	
5	N-6157	19	珪質頁岩	62	46	10	4.2	
6	N-6190	19	トロトロ石	58	59	22	53.6	
7	N-621	9	トロトロ石	40	55	13	21.9	
8	S-720	10	トロトロ石	70	91	27	123.3	
9	S-070	12	トロトロ石	67	54	10	28.8	
10	N-654	7	トロトロ石	60	57	19	65.7	
第12回 6	N-6005	9	メノウ	67	57	25	90.2	
2	N-6005	9	メノウ	41	52	13	23.1	
3	N-6017	12	メノウ	35	35	12	12.5	
4	N-616	8	メノウ	31	31	10	16.1	
5	N-036	12	メノウ	16	27	5	19.1	幾重
6	N-058	7	メノウ	66	43	14	25.3	
7	N-109	Ⅱ-24	メノウ	50	47	14	30.8	
8	S-123	12	頁岩	70	58	20	55.4	
9	N-145	7	珪質頁岩	72	50	22	71.8	
第38回 1	N-168	Ⅱ-24	メノウ	18	23	6	1.5	
2	N-6018	12	メノウ	19	20	7	2.0	
3	N-6019	22	チャート	64	13	6	5.8	
4	N-6041	23	珪質頁岩	22	24	6	2.3	
5	N-005	27	珪質頁岩	17	18	4	1.0	
第44回 1	S-141	13	頁岩	96	60	24	109.1	
2	S-361	3	砂岩	105	39	25	44.5	
3	S-422	3	トロトロ石	75	42	20	53.5	
4	S-811	8	チャート	78	53	21	85.2	
5	N-605	14	珪質頁岩	61	62	45	83.9	
6	S-667-908	34	チャート	108	78	24	146.2	

石材 石材は、珪質頁岩が11点、トロトロ石が11点、メノウが9点、頁岩が3点、砂岩が2点、チャートが1点、硬質頁岩が1点である。

法量 ほぼ完形で、素材とした剥片の長軸長を反映すると考えられるもの31点を対象に検討すると、大型から小型まで概ね連続的に分布する。ここでは、剥片の計測値との対応に備えて、25mmを単位とする長軸長の区分により、法量の分布を捉えておく。

I (大型) B-101~125mm 3点

II (中型) A- 76~100mm 6点

II (中型) B- 51~ 75mm 9点

III (小型) A- 26~ 50mm 7点

III (小型) B- ~ 25mm 6点

法量と石材 法量と石材の対応は次の通り。

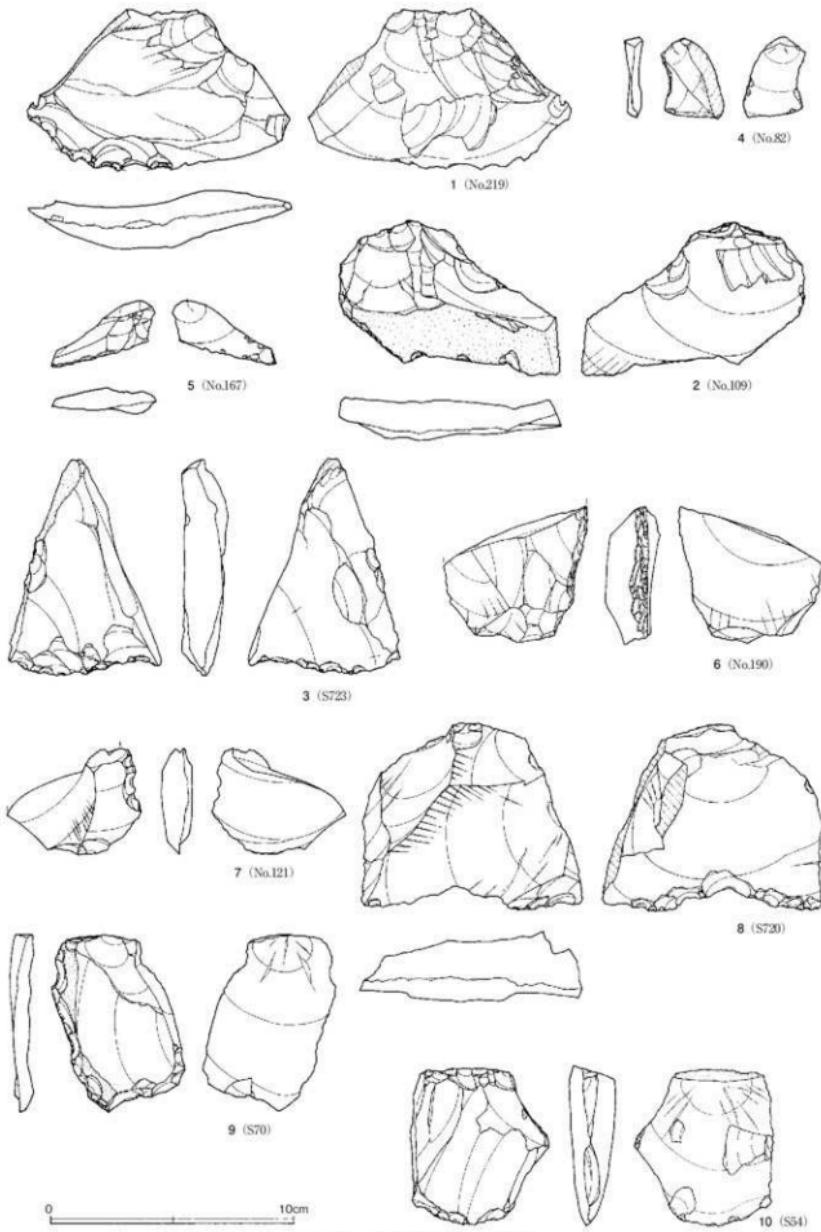
I (大型) B-珪質頁岩1点、砂岩2点

II (中型) A-珪質頁岩2点、トロトロ石3点、頁岩1点

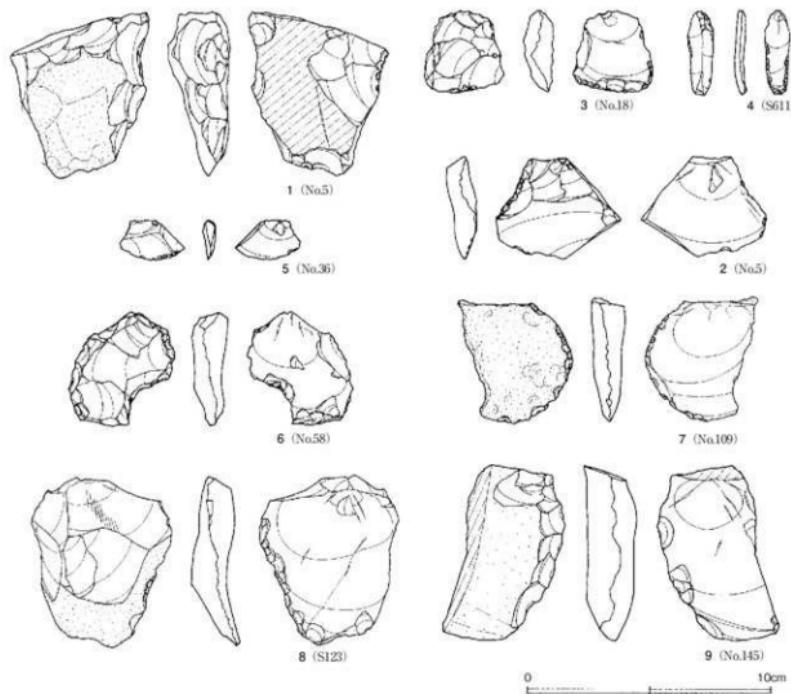
II (中型) B-珪質頁岩2点、メノウ2点、トロトロ石3点、頁岩2点

III (小型) A-珪質頁岩2点、メノウ5点

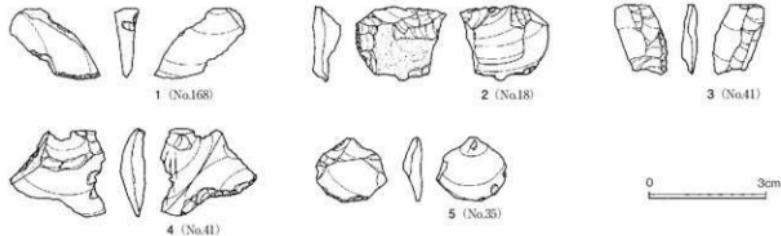
III (小型) B-珪質頁岩2点、メノウ2点、チャート1点、硬質頁岩1点



第41図 石器実測図12 削器(2)



第42図 石器実測図13 削器(3)



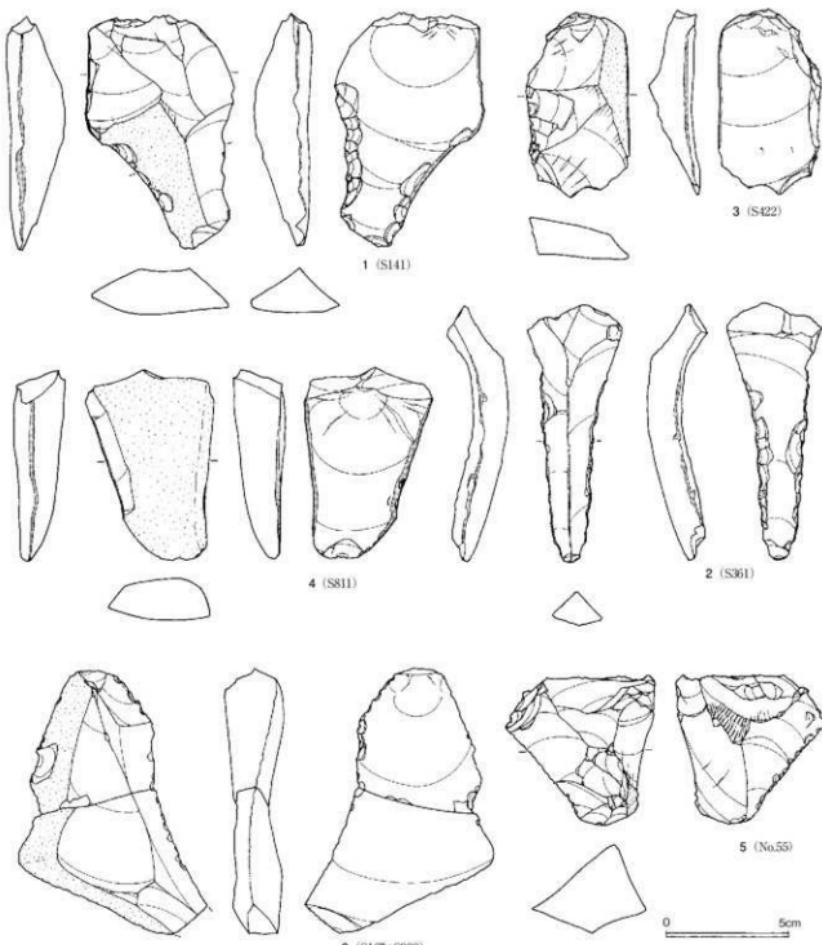
第43図 石器実測図14 削器(4)

珪質頁岩は、ⅠBからⅢBまですべての法量に対応している。一方、他の石材には、対応する法量に偏りが見られる。チャートと硬質頁岩は、それぞれ1点のみではあるが、ⅢBのみに対応する。メノウはⅡBからⅢBまでに対応する。トロトロ石と頁岩はⅡAからⅡBまでに對応する。つまり、珪質頁岩で小型から大型までの削器

が製作される一方で、比較的小さな削器はメノウを主体として、チャート、硬質頁岩でも製作され、比較的大きな削器はトロトロ石、頁岩でも製作されている。

使用の痕跡 削器とした中から、特徴的な使用の痕跡により分別して2つの類型を設定する。

使用痕A類—衝突に伴う細かな剥離が刃部に集中する



第44図 石器実測図15 削器(5)

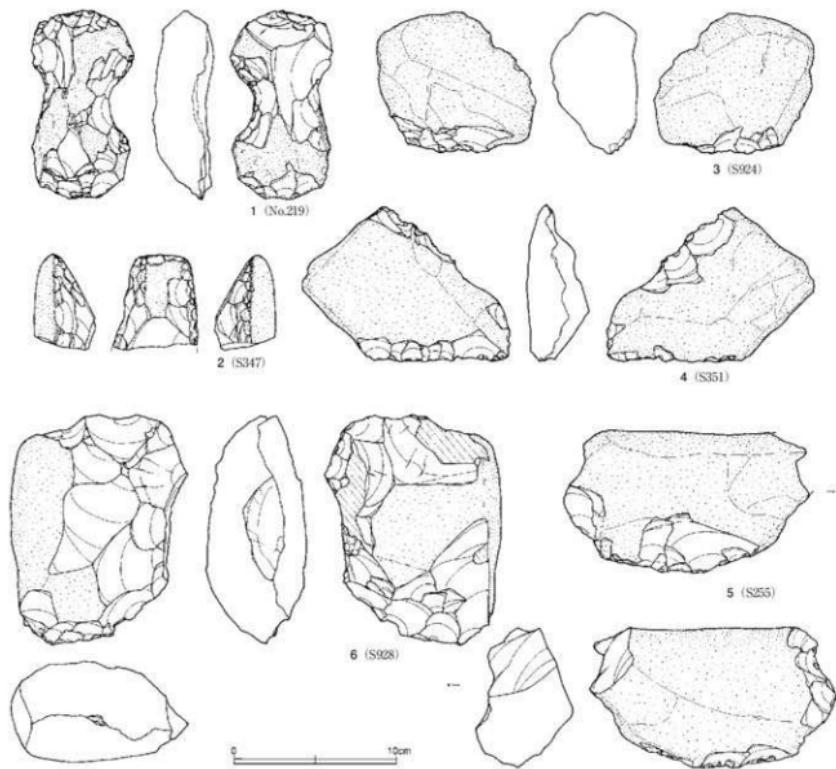
もの

トロトロ石を石材とする中型(第40図11)と、珪質頁岩を石材とする小型(第40図12)がある。刃部は、小型がやや凹刃状を呈するものの、ほぼ直線的である。

使用痕B類—刃部が著しく摩滅するもの

刃部は、直線的なものと、凹刃がある。刃部に残る細かな擦痕の方向は、鋸の刃部が採る運動方向に相当する(巻頭図版VII)。摩滅が最も進行したものが第44図1の右

側縁下部であり、丸みを帯びて平坦に近い面が形成されている。左側縁にも使用の痕跡があり、刃部が加工された部分のみでなく、加工されていない剥片の縁辺にまで摩滅が及ぶ。第44図2も、刃部に加工が施されているが、加工されていない剥片の縁辺も同じように摩滅している。第44図3・4は、刃部に加工が施されておらず、剥片の縁辺をそのまま使用している。第44図5・6の剥片の縁辺には、刃こぼれ状の微細な剥離とともに、僅かな



第45図 石器実測図16 打製石斧・礫器

摩滅が観察される。これらは、大型から中型の剥片を素材としており、石材は、砂岩が2点、トロトロ石が2点、頁岩が1点、珪質頁岩が1点である。特徴的な使用痕は形成されていないものの、頁岩を石材とする第42図8・9は、この類型として製作されたことも考えられる。

8 打製石斧

数量 打製石斧は、2点が検出された(第45図、第12表)。

石材と形態 素材はともに礫であり、表裏に自然面が残ることから、成品の厚さに合致するような礫が選択されたと考えられる。珪質頁岩を石材として所謂「分銅形」(第45図1)、砂岩を石材として所謂「撮形」あるいは「短冊形」(第45図2)が製作されている。とともに縁部を

第12表 打製石斧・礫器一覧表

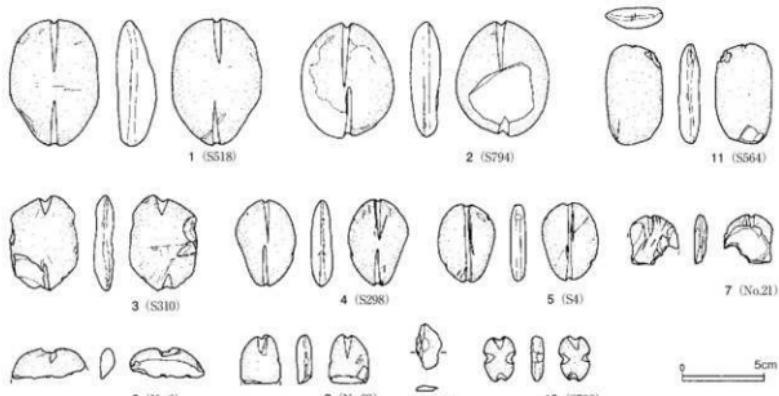
序号	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第45図1	No.219	II-24	SK3	珪質頁岩	115	63	37	204.3	
2	S347	7	Ⅲ	砂岩	58	53	38	115.8	
3	S924	3	Ⅲ	トロトロ石	86	97	53	456.7	
4	S351	7	Ⅲ	珪質頁岩	95	127	38	303.5	
5	S255	8	Ⅲ	珪質頁岩	87	151	70	562.6	
6	S928	II-24	SK3	砂岩	140	108	62	1083.6	

潰すような加工が施されている。

9 矽器

数量 矽器は、4点が検出された(第45図、第12表)。自然面を大きく残し、一部の縁辺を剥離して刃部を作出している。

石材 素材は全て礫である。石材は、珪質頁岩が2点、トロトロ石が1点、砂岩が1点である。



第46図 石器実測図17 石錘

10 石錘

数 量 石錘は、部分的な破片を含めて10点が検出された。これらの全てと、石錘の未成品と考える礫を掲載した(第46図、第13表)。

石 材 素材は全て扁平な円錐である。石材は、粘板岩が8点、ホルンフェルスが1点、頁岩が1点であり、粘板岩が圧倒的に多い。未成品と考える礫も粘板岩である。

重 量 完形に近い石錘が5点あり、重量を指標として大きく3つに分類できる。

重量級—92.9～124.5 g 2点(第46図1・2)

中量級—22.8～38.2 g 3点(第46図3～5)

軽量級—5.5 g 1点(第46図10)

このうち中量級が最も多く、破片もほとんどが中量級と推定されるものである。

加 工 溝状の加工が連続して全周するものが「有溝石錘」、途切れるものが「切目石錘」として分類されている。「有溝石錘」は1点(第46図5)、他は全て「切目石錘」である。但し、「切目石錘」には、溝状の加工の末端が接近した中間的な状態のもの(第46図2・4)が見られる。また、「切目石錘」は、「切目を長軸に有するA種」と、さらに短軸にも切目を施したB種)【渡辺1973】に分類されており、この分類は「有溝石錘」にも適用されている。

重量と加工 法量と加工による分類は、次のような関係にある。

第13表 石錘一覧表

番号	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第6681	1 S518	II-21	■	粘板岩	77	64	24	124.5	
	2 S794	3 SK1	■	粘板岩	69	56	18	92.9	
	3 S310	3	■	粘板岩	57	41	11	36.1	
	4 S298	5	■	粘板岩	63	55	13	36.7	
	5 S4	■	粘板岩	67	54	12	35.8		
	6 No.6	3	1	ホルンフェルス	18	45	8	8.6	
	7 No.21	7	1	粘板岩	30	30	9	10.2	幾枚
	8 No.98	II-19	1	頁岩	30	25	9	10.2	
	9 S550	8	■	粘板岩	27	16	3	1.4	
	10 S792	8	■	粘板岩	26	19	8	5.5	
	11 S564	8	■	粘板岩	61	34	12	38.2	

重量級一切目石錘A種

中量級一切目石錘A種・有溝石錘A種

軽量級一切目石錘B種

製作の痕跡 溝状の加工の周囲に、細かな傷が観察されるもの(第46図4～7)があり、これらは、溝状の加工に伴い残されたと考える。これらの傷からは、鋭利な工具が推定される。同様な傷が、礫の長軸方向の縁辺に残された第46図11を石錘の未成品と考えた(卷頭図版VI)。

11 敗 石

数 量 敗打による表面の剥離、剥落が認められる礫を敗石として抽出した。39点のうち6点については、敗打痕が僅かで偶発的な衝突痕と区別が難しいことから、敗石として使用された可能性はあるものの、結果的に礫として扱うこととした。敗打痕の集中から確定と考えられる33点を掲載した(第48～50・54図、第14・16表)。

石 材 加工が施されたものを含めて素材は円錐である。石材は、砂岩が17点、石英斑岩が7点、多孔質安

山岩が2点、アブライトが2点、ホルンフェルスが2点、流紋岩が1点、蛇紋岩が1点、軟質砂岩が1点である。

敲石Ⅰ類の分離 繩を分割あるいは剥離して、縁辺を鋭角に加工したものがあり、鋭角な縁辺を敲打に使用している。これを敲石Ⅰ類として分離し、繩をそのまま使用したものを敲石Ⅱ類とする。敲石Ⅰ類は5点(第48図1~5)であり、石材は砂岩が4点、石英斑岩が1点である。そのうち1点(第48図2)は、磨石の再利用であり、2点(第48図3・4)には、繩面を利用した使用痕も複合している。

重量 敲石Ⅱ類で、大きな欠損が見られないものには、素材とした繩の重量と形態がほぼ残されている。27点の敲石Ⅱ類のうち、この条件に合うのは22点である。重量の分布からは、200gを境界の目安として、重量級と軽量級の2つに大きく分類できる。このうち軽量級については、形態と使用痕位置との対応を考慮して、70g付近を境界として細別し、中量級という分類を設定しておく。

重量級—223.6~581.2g 9点(第48図6・7・9~11、第49図9、第50図3・4)

中量級—82.0~130.2g 7点(第49図4~8・12・13)

軽量級—35.3~58.5g 6点(第49図10・14・16~19)

重量と形態 敲石Ⅱ類に利用される繩は、平面形形状から、円形、楕円形、長楕円形の3つに分類できる。この時の楕円形と長楕円形の境界は、短軸に対する長軸の比率が1.5未満を楕円形、1.5以上を長楕円形とし、長楕円形には棒状のものも含める。重量と形態の対応は次の通り。

重量級—楕円形

中量級—円形、楕円形、長楕円形

軽量級—長楕円形

円形は極少数く、重量級は楕円形に、軽量級は長楕円形にほぼ限定されている。中量級が楕円形と長楕円形の重複する領域となる。素材の繩の形態を中心とする視点からは、中量級という設定を楕円形繩素材の軽量級、長楕円形繩素材の重量級と読み替えることもできる。

使用痕の位置 楕円形および長楕円形繩素材の敲石Ⅱ類に残された敲打痕の位置は、基本的な5つの使用痕に分類される(第47図)。

使用痕a—中央付近の平面を使用した痕跡



第47図 敲石Ⅱ類の使用痕位置の分類

使用痕b—長軸端部付近の平面を使用した痕跡

使用痕c—長軸端部の側面を使用した痕跡

使用痕d—長軸端部付近の側面を使用した痕跡

使用痕e—短軸端部の側面を使用した痕跡

使用痕a(第50図3)、使用痕b(第48図11)、使用痕c(第49図4等)、使用痕d(第49図7等)には、それぞれの使用痕が単独で残された状態のものがあるが、使用痕eは、他の使用痕と複合している。

重量・形態と使用痕 重量及び形態と使用痕の位置の対応関係は次の通り。

重量級—楕円形—使用痕a・b・c・d・e

中量級—楕円形—使用痕b・c・d

中量級—長楕円形—使用痕c・d

軽量級—長楕円形—使用痕c・d

使用痕a・eは楕円形繩素材の重量級に、使用痕bは楕円形繩素材にそれぞれ限定されている。また、長楕円形繩素材は、使用痕c・dに限定されている。

敲石Ⅱ類の細別 重量、形態、使用痕の位置という属性の組み合わせにより、敲石Ⅱ類を4つに細別する。

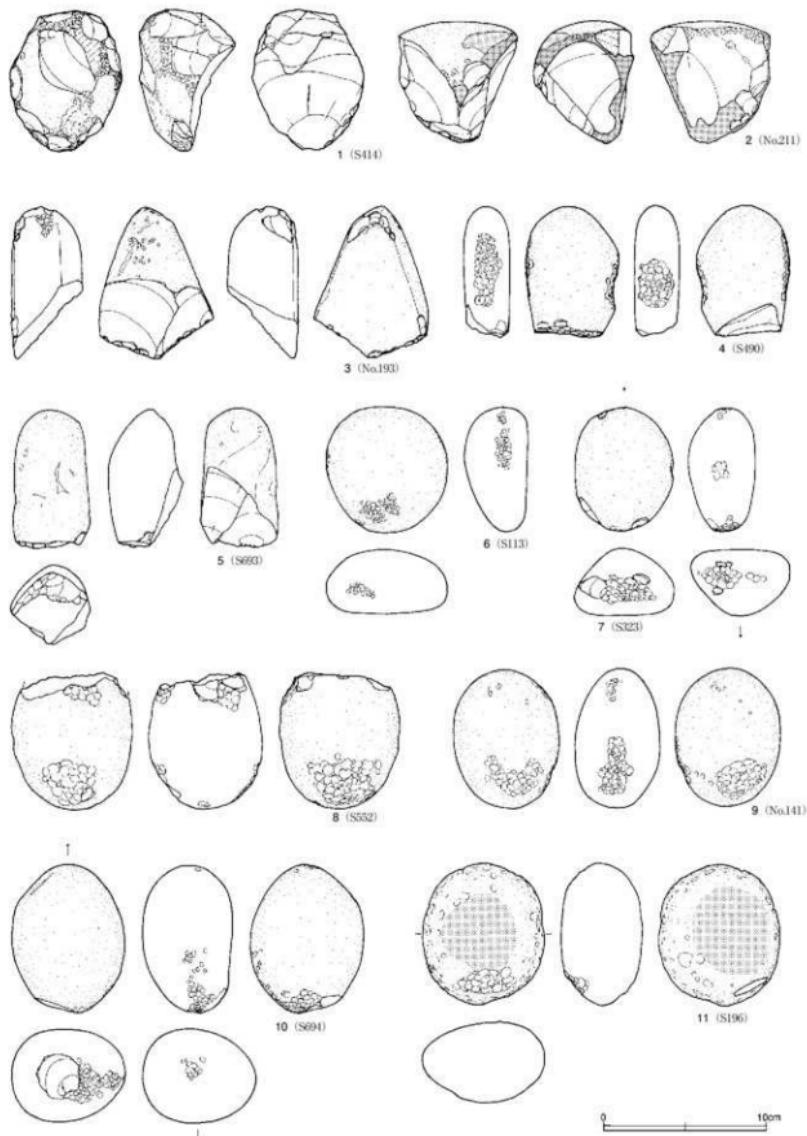
敲石ⅡA類—重量級、楕円形、使用痕aという属性の組み合わせ 2点(第50図3・4)

敲石ⅡB類—重・中量級、楕円形、使用痕bという属性の組み合わせ 4点(第48図6・9・11、第49図6)

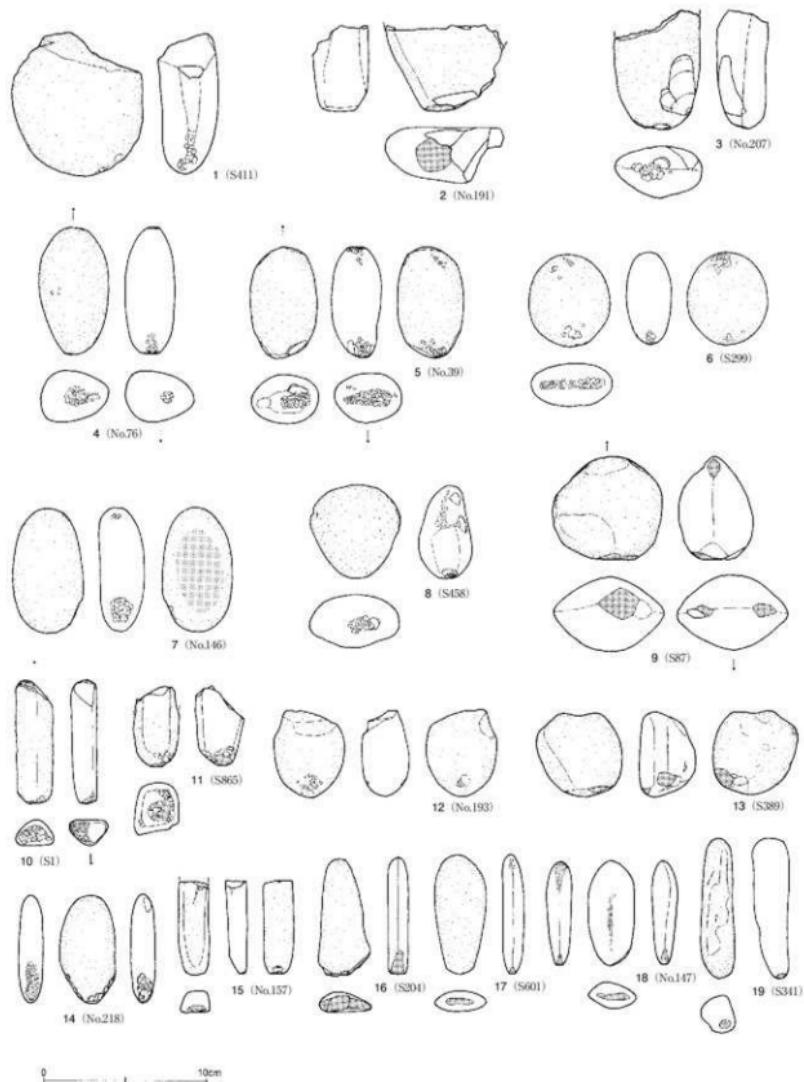
敲石ⅡC類—重・中量級、楕円形、使用痕c・dという属性の組み合わせ 7点(第48図6・7・9・10、第49図1・6・9)

敲石ⅡD類—中・軽量級、長楕円形、使用痕c・dという属性の組み合わせ 9点(第49図4・5・7・10・14・16~19)

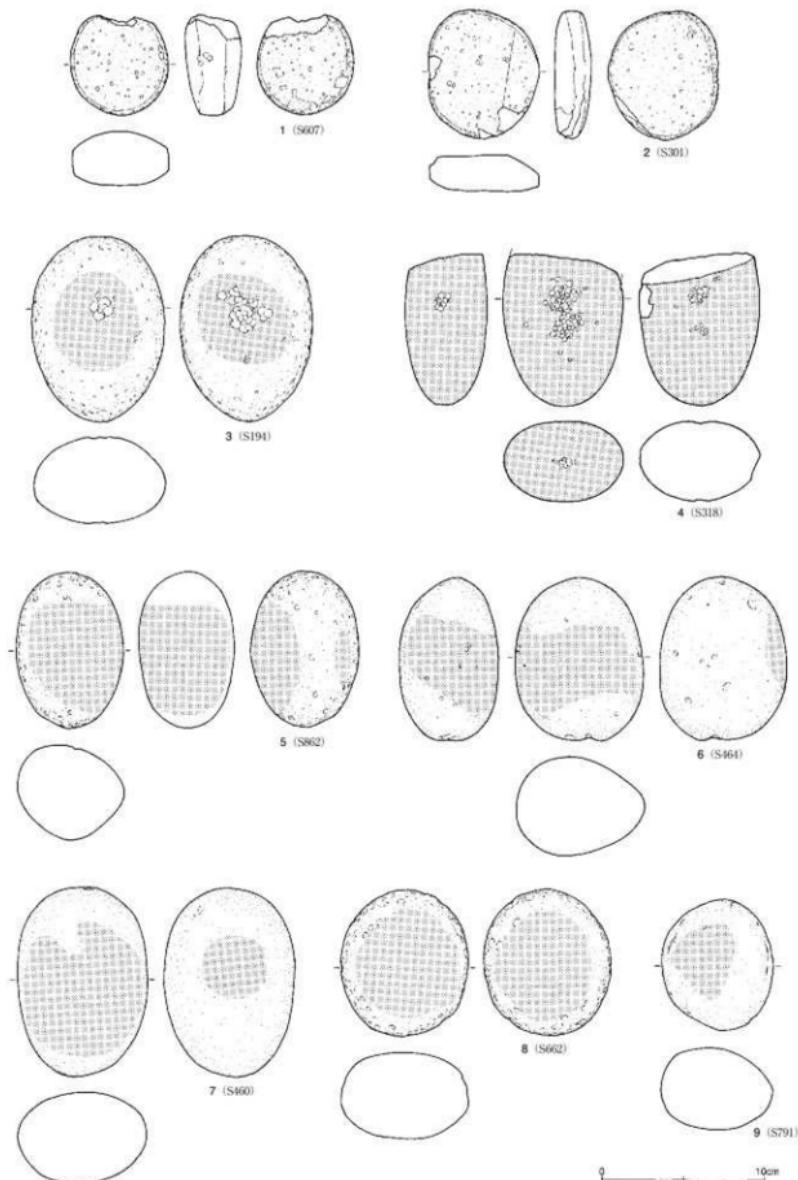
敲石ⅡC・D類は、使用痕cと使用痕dとでさらに細別もできる。敲石ⅡA類は2点とも磨石と複合する。



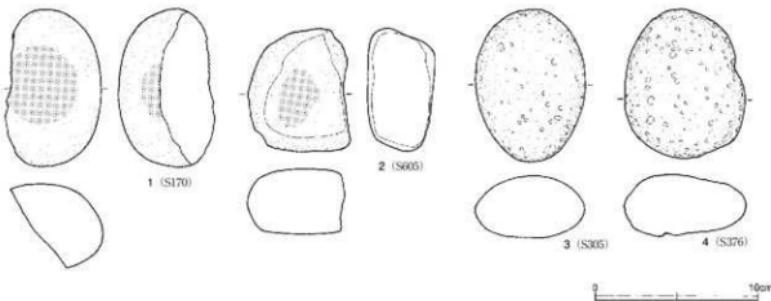
第48図 石器実測図18 敲石・磨石(1)



第49図 石器実測図19 鑿石・磨石(2)



第50図 石器実測図20 鎚石・磨石(3)



第51図 石器実測図21 敲石・磨石(4)

12 磨石

数量 磨石は、17点が検出された(第48~51図、第14表)。そのうち5点は敲石と複合する。敲石Ⅰ類(第48図2)、敲石ⅡB類(第48図11)、敲石ⅡD類(第48図7)については磨石からの転用であり、敲石ⅡA類(第49図3・4)については磨石との併用と捉えられるものかもしれない。

石材 素材は全て礫である。石材は、多孔質安山岩が9点、砂岩が5点、石英斑岩が3点である。

形態 磨石としたものは、形態、石材質質、使用痕などから大きく2つに分類される。

I類—使用に伴い平坦な側面が形成されることから円柱を輪切りにしたような形態となる。石材は多孔質安山岩に限定され、しかも多数の細かな孔のある石質のものが選択されている。2点(第50図1・2)

II類—平面及び断面の形状は梢円形を基本とするが、素材の礫の形状により少しの変異が見られる。石材は多孔質安山岩の他に、砂岩と石英斑岩がある。側面に使用的痕跡を残すものがあっても、平坦面は形成しない。使用的の進行により平滑面は光沢を有する(実測図中淡網部分)。15点(第48図2・11、第49図4、第50図3~9、第51図1~4)

法量と重量 磨石I・II類の法量と重量は次の通り。

I類は、大きい方の長軸長でも76mmであり、重量は100g台にある。

II類は、小型と大型とに分類できる。小型の平面形状は長軸長76mmの梢円形であり、重量は125.4gと軽い。小型は1点(第49図7)のみである。大型の平面形状は長軸長75~116mmの梢円形であり、重量は257.6~762.5g

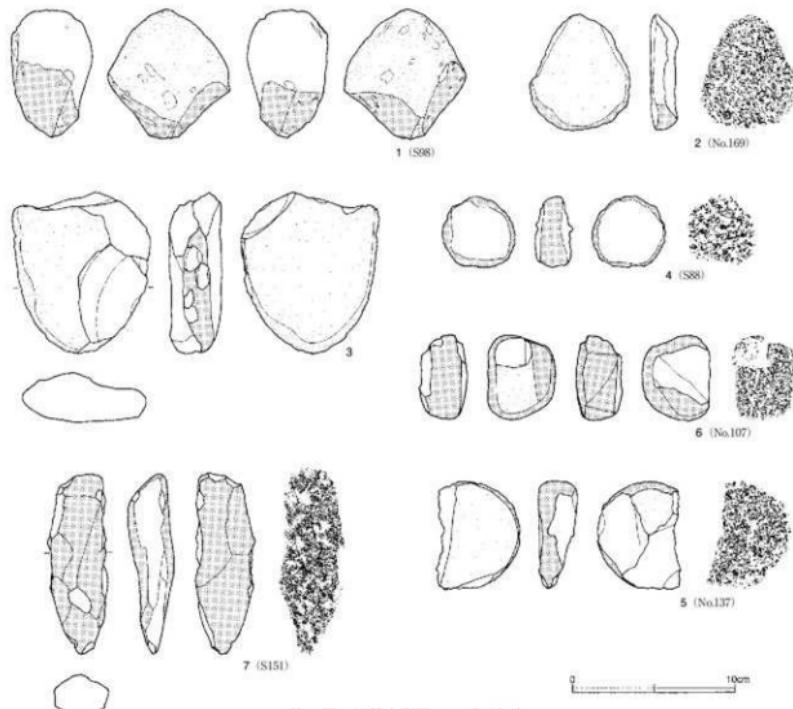
第14表 敲石・磨石一覧表

標号	番号	地区	層位	石	材	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
第48回	S114	3	■	砂	利	86	68	59	525.0		
	S211	4	■	砂	利	85	72	61	362.7		
	S193	B-19	■	砂	利	93	70	43	272.7		
	S490	B-24	■	石英斑	岩	80	57	28	206.4		
	S693	9	■	石英斑	岩	85	48	46	232.0		
	S113	9	■	砂	利	78	74	38	310.5		
	S114	3	■	砂	利	76	74	38	310.5	幾種	
	S552	8	■	石英斑	岩	81	74	20	592.0		
	S111	10	■	砂	利	85	64	52	376.3	幾種	
	S694	9	■	砂	利	91	70	53	481.9		
	S196	8	■	多孔質安山	岩	87	74	50	419.2		
第19回	S111	3	■	石英斑	岩	86	80	37	333.3	幾種	
	S191	B-19	■	砂	利	53	73	34	126.6		
	S192	8	■	石英斑	岩	53	73	31	155.0		
	S193	B-19	■	砂	利	78	42	30	130.0	幾種	
	S199	5	■	砂	利	68	41	30	118.8		
	S299	5	■	砂	利	56	49	27	103.0		
	S146	7	■	粗	砂	利	76	43	28	125.4	
	S158	B-24	■	石英斑	岩	56	54	33	122.0		
	S187	9	■	ホルンフェルス		64	68	46	232.7		
	S1001	13	■	砂	利	85	23	16	43.7		
	S193	B-24	■	石英斑	岩	49	28	20	54.0		
	S193	B-19	■	アブライト		83	43	29	62.0		
	S208	5	■	アブライト		52	34	25	112.0		
	S218	4	■	砂	利	66	34	14	45.9		
	S157	8	■	砂	利	57	18	13	23.2		
	S204	8	■	砂	利	72	32	12	35.3		
	S1601	19	SXI	流紋岩		73	31	13	43.2		
	S147	7	■	粗	砂	利	64	29	16	37.4	
	S193	B-24	■	ホルンフェルス		21	21	21	15.1		
第50回	S607	1	■	多孔質安山	岩	61	34	34	357.1		
	S301	5	■	多孔質安山	岩	79	67	41	126.2		
	S194	8	■	多孔質安山	岩	113	81	58	581.3		
	S318	7	■	砂	利	93	73	49	495.8	幾種	
	S862	B-24	■	多孔質安山	岩	96	65	58	462.1	幾種	
	S464	B-24	■	石英斑	岩	100	78	61	652.1		
	S7400	8	■	石英斑	岩	116	80	56	762.0		
	S606	2	■	多孔質安山	岩	78	64	50	506.0	幾種	
	S291	5	■	多孔質安山	岩	81	64	50	519.9		
第51回	S170	4	■	砂	利	97	59	51	352.5	幾種	
	S605	8	■	砂	利	75	63	42	317.0		
	S305	5	■	多孔質安山	岩	93	67	46	257.6		
	S276	3	■	多孔質安山	岩	91	74	37	358.8		

と重い。大型は13点あり、敲石への転用に伴い加工された1点(第48図2)も大型と推定される。

13 砕石

数量 砕磨による表面の摩滅、擦痕が認められる礫を砥石として抽出した。当初は、礫の石材、法量及び形態が砥石に合致するものも抽出したが、表面の観察により、摩滅が僅かで自然面との区別が難しいものについては、砥石として使用された可能性はあるものの、結果的に礫として扱うこととした。これが92点あり、完形の2点(第58図1・2)を例示してある。砥石と捉えたもの



第52図 石器実測図22 砥石(1)

は、71点であり、そのうち33点を掲載した(第52・54～

58図、第15～17表)。

石 材 加工が施されたものを含めて素材は砾である。石材は、軟質砂岩が67点、泥岩が2点、頁岩が1点、石英斑岩が1点である。

軟質砂岩については、粒子の大きさから4つに分類して記載した(第53図)。

軟質砂岩1 2mm以上の粒子を多量含有する

軟質砂岩2 1mm程度の粒子を多量含有する

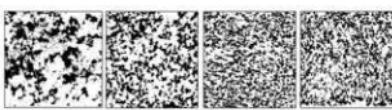
軟質砂岩3 1/2mm程度の粒子を少量含有する

軟質砂岩4 1/4mm以下の粒子である

このように指標は設定されるが、実際の分類では、軟質砂岩1に砾岩、軟質砂岩4に泥岩が一部含まれる。また、軟質砂岩1と軟質砂岩2、軟質砂岩3と軟質砂岩4も、同一の砾の中に部分として含まれるもののが少なくない。この場合、石材の分類は、砥石として使用された

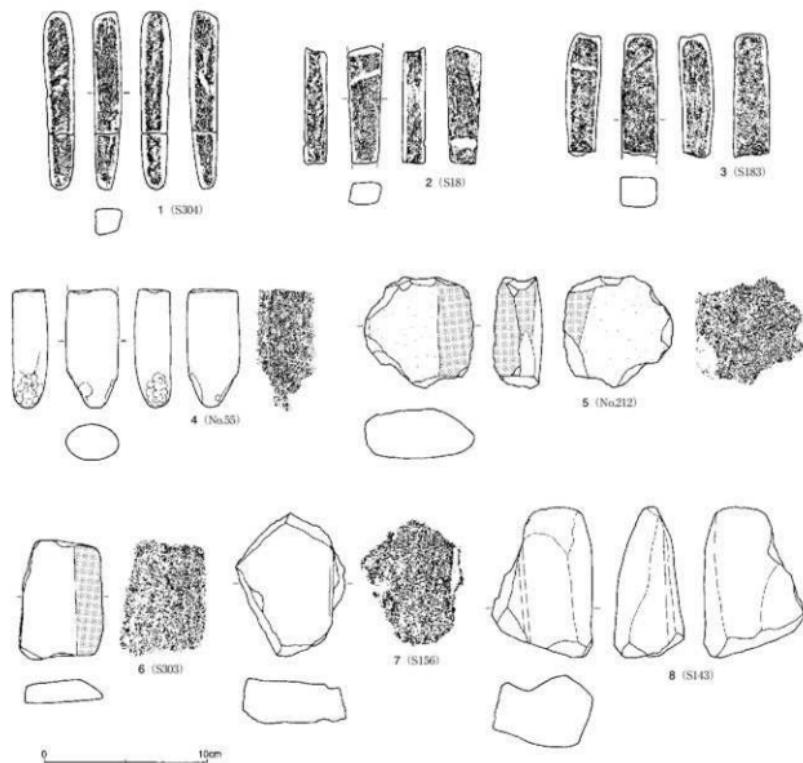
第15表 砥石一覧表(1)

地図	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第52図	S098	9	Ⅲ	石英斑岩	78	74	50	331.5	
	No169	B-24	Ⅲ	軟質砂岩1	70	61	17	66.0	
	3	不明	不明	軟質砂岩1	85	32	22	233.9	
	S098	9	Ⅲ	軟質砂岩1	43	45	22	45.5	
	No167	3	Ⅲ	軟質砂岩2	52	42	29	51.1	
	No137	3	Ⅲ	軟質砂岩2	66	52	24	73.6	
	S151	4	Ⅲ	軟質砂岩2	110	37	29	99.9	



第53図 軟質砂岩の分類(撮影図原寸)

部分を観察した。分類された軟質砂岩の数量は、軟質砂岩1が12点、軟質砂岩2が12点、軟質砂岩3が40点、軟質砂岩4が3点である。粒子が粗い軟質砂岩1・2と細かい軟質砂岩3・4に二分すると、軟質砂岩1・2が24点、軟質砂岩3・4が43点であり、全体としては粒子が



第54図 石器実測図23 砥石(2)

細かい石材の方が多い。

分類 砥石は、形態、法量、重量、使用面の位置から、大きく2つに分類できる。

I類一対象物を固定し、砥石を動かして研磨したと考えられる形態、法量、重量、使用面の位置を示すもの。

II類一砥石を固定し、対象物を動かして研磨したと考えられる形態、法量、重量、使用面の位置を示すもの。

I類は「可動式」あるいは「手持ち砥石」。II類は「固定式」あるいは「置き砥石」とも表現される。

砥石I類 I類のうち、軟質砂岩を石材とする砥石は、形態と使用面の位置から、次のような3つに分類できる。

I A類一砾あるいは砾片を素材として、円形から梢円形の平面形状を呈し、側縁を使用するもの。

第16表 砥石一覧表(2)

種別	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第54図	S.304	八幡山	軟質砂岩3	108	17	19	37.1		
2	S.018	14	8	軟質砂岩3	72	21	14	30.6	
3	S.183	1	8	軟質砂岩4	76	22	21	52.4	
4	No.55	14	8	軟質砂岩3	72	33	22	54.0	粗石
5	No.212	124	8	軟質砂岩2	68	67	30	149.2	
6	S.303	5	8	軟質砂岩3	74	51	57.1	吸液	
7	S.156	1	8	軟質砂岩1	80	62	27	157.1	
8	S.143	13	8	軟質砂岩2	92	61	42	267.8	地質

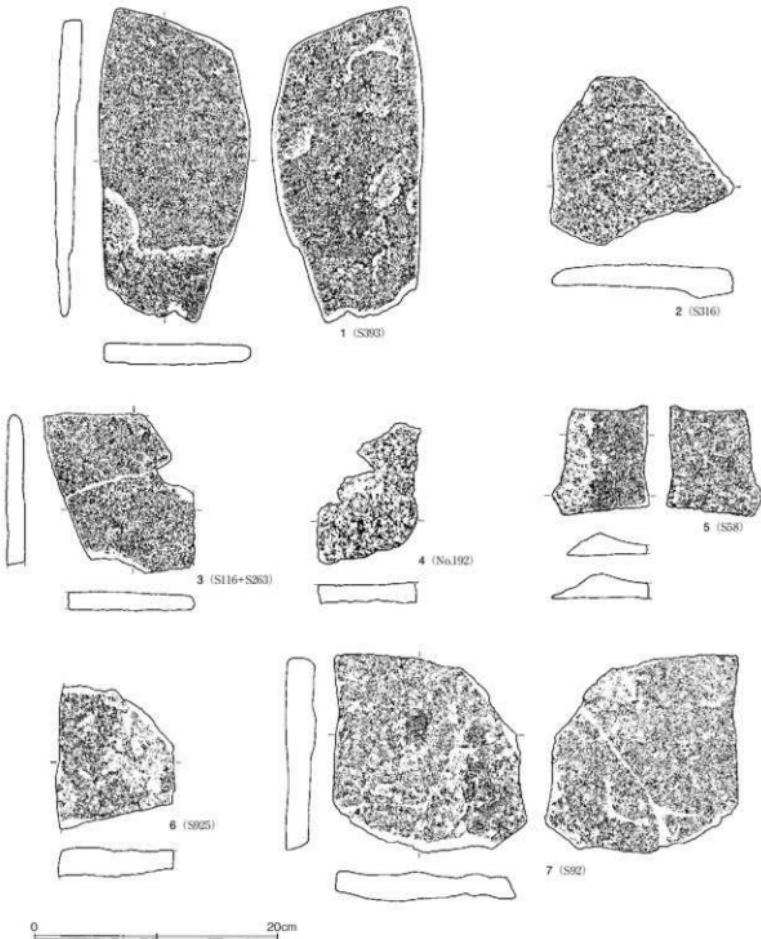
I B類一砾片を素材として、略円形から方形の平面形状を呈し、平面から側縁にかかる部分を使用するもの。

I C類一砾あるいは砾片を素材として、棒状を呈し、断面形状方形の対向する2面を使用するか、断面形状円形の全面を使用するもの。

さらに、IA・IC類は、素材を調整するように側縁から剥離された加工の有無により細別できる。

これら砥石I類の細別と石材の対応は次の通り。

IA類加工有一軟質砂岩1



第55図 石器実測図24 砥石(3)(軟質砂岩1・2)

I A類加工無—軟質砂岩1・2

I B類——軟質砂岩2・3

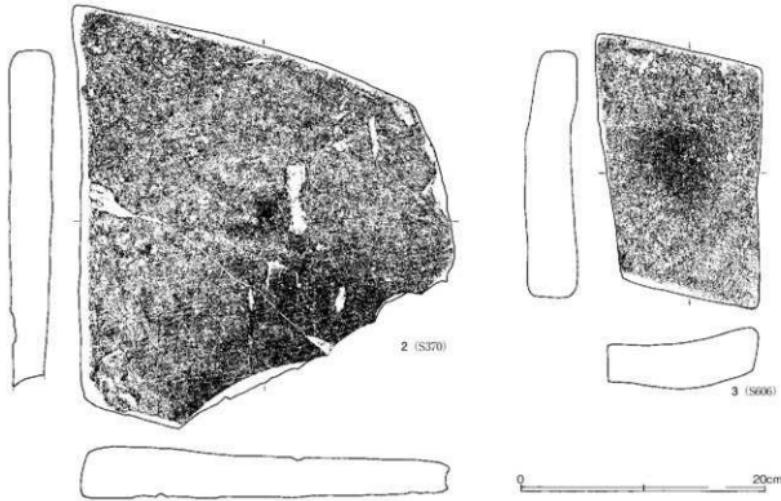
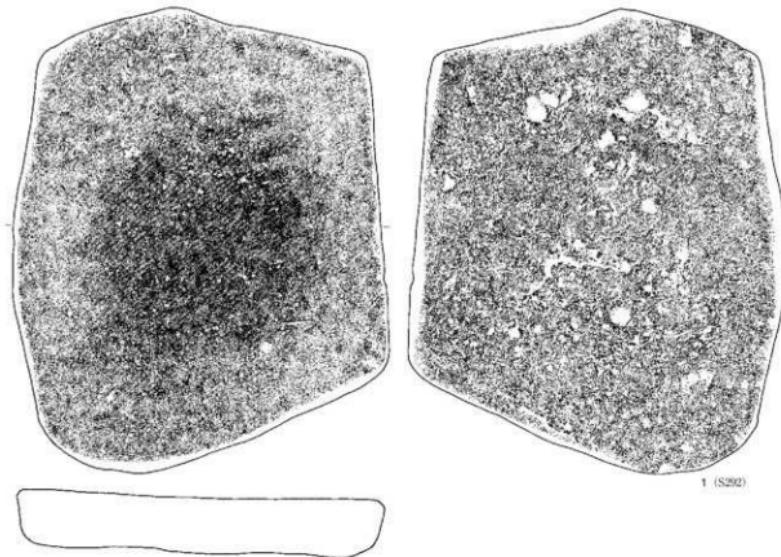
I C類加工有一軟質砂岩2

I C類加工無—軟質砂岩3・4

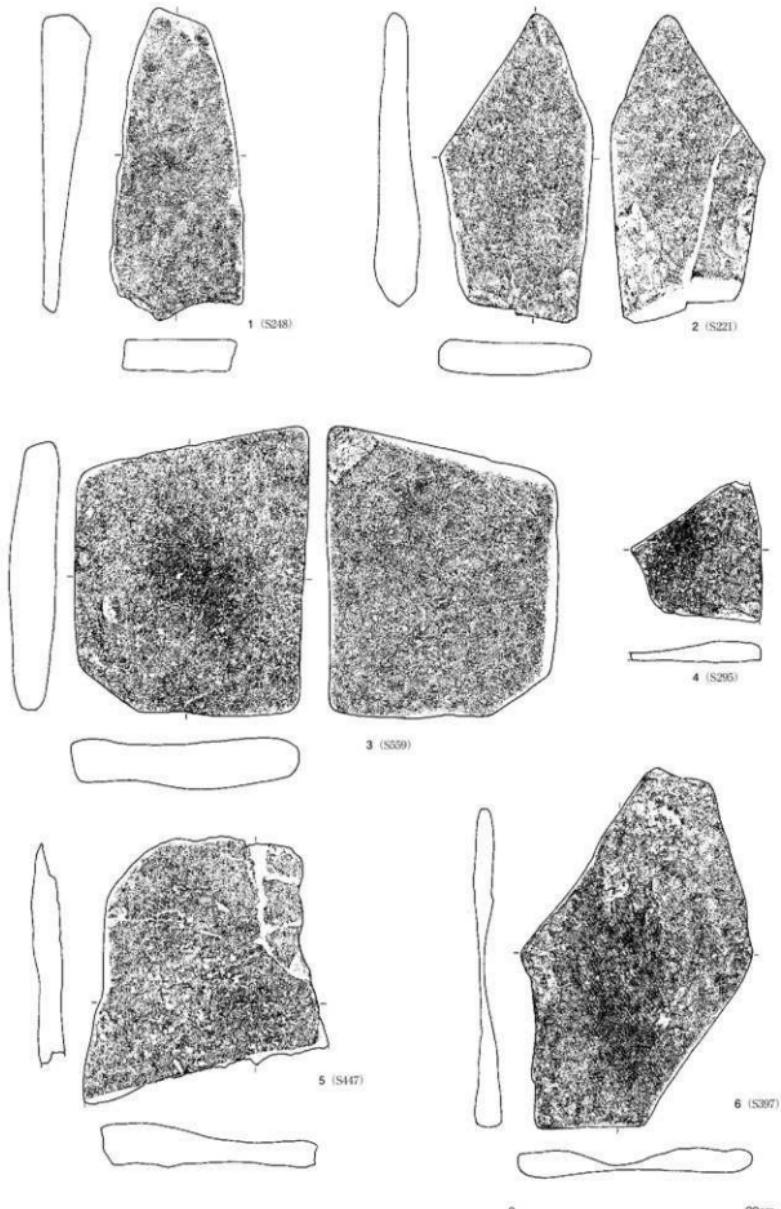
I B類のうち1点、I C類加工無の3点は軟質砂岩3・4であるが、I A類の5点、I B類のうち1点、I C類加工有の1点は軟質砂岩1・2であり、砥石I類全体としては、粒子の粗い軟質砂岩を石材としたものが多い。

なお、石英輝岩を石材とする第52図1も、砥石I類に含めて報告するが、特異な石器である。円礫の縁辺に著しく磨耗した痕跡があり、表裏左右で4面の使用痕が稜を形成して残されている。敲石、磨石でもなく、砥石と考えざるを得なかった。石質は、軟質砂岩1よりも粗く硬質の粒子を含有する。

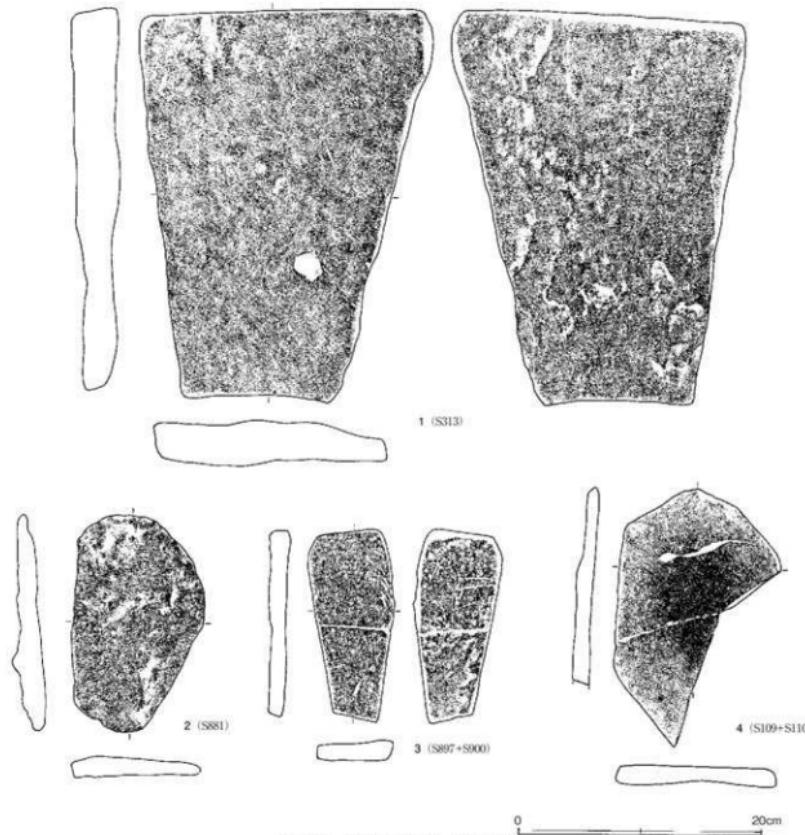
砥石II類 II類の砥石は、破片がほとんどであり、完形もしくは全体の形態と法量が推定できるものが極め



第56図 石器実測図25 砥石(4) (軟質砂岩 3)



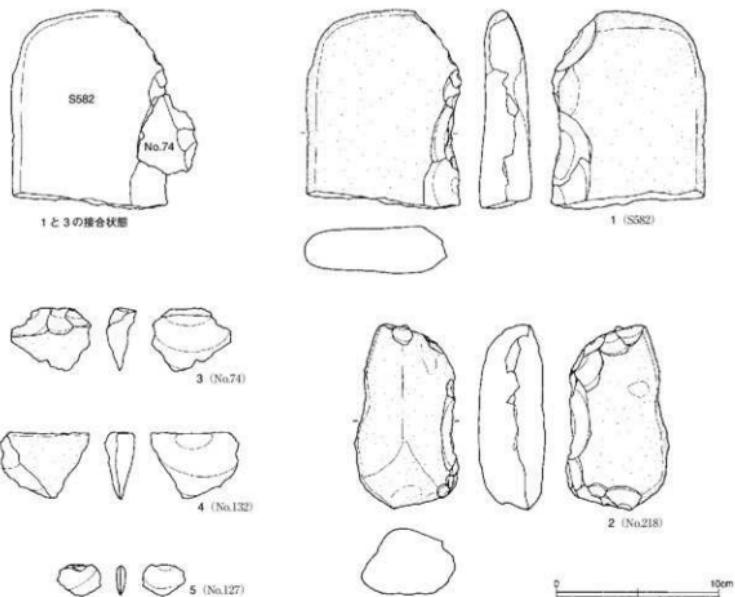
第57図 石器実測図26 砥石(5) (軟質砂岩 3)



第58図 石器実測図27 砥石(6)

第17表 砥石一覧表(3)

探区	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考	探区	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
35539	1	II-303	?	板状砂岩	188	124	20	77.0		S109	1	II-303	?	板状砂岩	179	150	25	1502.8	火打石	
	2	S316	?	板状砂岩	149	140	24	414.6		S591	2	II-303	?	板状砂岩	101	79	25	162.1		
35536	3	III-263	9	板状砂岩	153	102	15	270.4		S647	4	II-303	?	板状砂岩	64	101	16	77.3		
11No192	4	III-19	?	板状砂岩	115	83	18	150.7	焼痕	S808	5	II-303	?	板状砂岩	62	72	15	68.8		
5	S058	7	II-303	板状砂岩	91	80	21	137.2		S356	7	II-303	?	板状砂岩	318	27	23	1502.8		
6	S925	4	II-303	板状砂岩	118	98	27	360.9		S355	7	II-303	?	板状砂岩	74	41	16	57.4		
7	S092	9	II-303	板状砂岩	168	158	24	722.3		S566	8	II-303	?	板状砂岩	80	52	10	32.0		
35535	8	S292	9	板状砂岩	280	307	56	9,400.0	門石 燒痕	S258	9	II-303	?	板状砂岩	39	37	6	7.8		
9	S293	3	II-303	板状砂岩	244	244	54	8,600.0	門石 燒痕	S651	10	II-303	?	板状砂岩	65	10	4	48.4		
3	S606	4-9	II-303	板状砂岩	225	137	50	1,297.5		S699	9	N	?	板状砂岩	80	75	22	114.1		
2	S248	8	II-303	板状砂岩	255	110	40	1,018.2		S726	10	II-303	?	板状砂岩	69	61	17	70.8	火打石	
21	S221	8	II-303	板状砂岩	252	120	36	1,109.2		S730	10	II-303	?	板状砂岩	242	114	64	1,916.1	火打石	
31	S559	8	P12	板状砂岩	238	191	44	2,652.8	焼痕	P289	10	II-303	?	板状砂岩	35	30	6	6.8		
41	S295	5	II-303	板状砂岩	117	107	17	184.9		S030	12	II-303	?	板状砂岩	60	59	10	41.6	火打石	
51	S447	II-21	?	板状砂岩	222	200	39	1,522.1		P195	10	II-303	SX1	板状砂岩	68	52	20	64.1		
61	S397	2	II-303	板状砂岩	255	190	24	1,105.1		S667	12	II-303	?	板状砂岩	32	29	16	18.9	燒痕	
35536	7	S233	3	II-303	板状砂岩	260	160	32	3,800.0	磨耗	S195	12	II-303	?	板状砂岩	74	69	16	29.7	火打石
21	S881	4	II-303	板状砂岩	178	109	57	514.1	磨耗	S193	II-19	II-303	?	板状砂岩	113	91	23	2,275.5	火打石 化石	
35867	400	4-9	II-303	板状砂岩	159	72	52	206.1		S215	II-19	II-303	?	板状砂岩	100	55	19	91.5		
11	S109	10	II-303	板状砂岩	211	135	18	411.6	焼痕	S927	II-19	II-303	?	板状砂岩	110	50	33	224.1		
S371	3	II-303	板状砂岩	270	102	56	1,161.7		S192	II-19	II-303	?	板状砂岩	73	50	14	60.7			
S374	3	II-303	板状砂岩	178	199	53	1,349.1		S193	II-19	II-303	?	板状砂岩	84	54	23	1,012.8	火打石		
S425	3	II-303	板状砂岩	123	46	13	60.1	四石	S136	II-24	II-303	?	板状砂岩	45	43	6	11.1	火打石		
S914	3	II-303	板状砂岩	48	24	19	25.0	燒痕	S101	II-24	II-303	?	板状砂岩	88	76	17	20.5			
S267	3	SK1	板状砂岩	60	55	11	27.8	燒痕	S924	II-24	II-303	?	板状砂岩	53	62	44	337.4	火打石		
S768	3	SK1	板状砂岩	192	246	32	1,665.0		S535	II-24	II-303	?	板状砂岩	61	63	8	47.3			
S909	3	II-303	板状砂岩	98	75	10	57.3		S861	II-24	II-303	?	板状砂岩	134	97	25	452.5			
S162	4	II-303	板状砂岩	42	84	19	108.0		S515	II-24	II-303	?	板状砂岩	97	61	23	154.9			
										S852	II-24	II-303	?	板状砂岩	107	97	16	137.1		



第59図 石器実測図28 加工された軟質砂岩(1)(軟質砂岩2)

て少ない。石材は、軟質砂岩1が8点、軟質砂岩2が8点、軟質砂岩3が38点、軟質砂岩4が1点、泥岩が2点、頁岩が1点である。泥岩、頁岩も細かな粒子の石材であり、細かな粒子の石材が圧倒的に多い。細かな粒子の石材は、使用の進行により光沢を有する研磨の痕跡を形成する。粗い粒子の石材に光沢は見られないが、大きな粒子の突出部分が削られて平坦になっているのが観察される(巻頭図版VI)。

軟質砂岩3の砥石に見る形態と法量からは、大きく2つに分類される。

II A類—平面の長軸長と短軸長の差が小さく、平面形状が略方形を呈するものであり、長軸長238～380mm・短軸長191～313mmで比較的大型のものが多い。

II B類—平面の長軸長と短軸長の差が大きく、平面形状が不整ながら略長方形を呈するものであり、長軸長225～295mm・短軸長110～190mmで比較的小型のものが多い。

II B類は、軟質砂岩1(第55図1)、泥岩(第58図3)、頁岩(第58図4)にも確認できるが、II A類が他の石材に

もあるのかは明らかにし得ない。

砥石II類のほとんどは、平坦面に研磨の痕跡を残しており、片面のみが使用されたものと、表裏の両面が使用されたものがある。

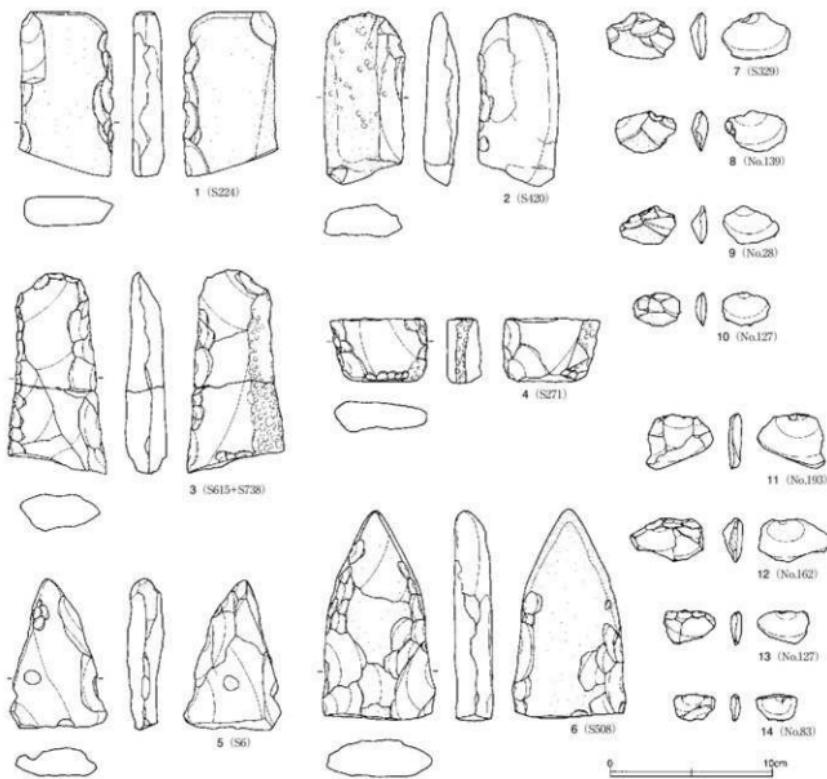
使用的痕跡 砥石II類としたなかから、特徴的な使用の痕跡により分別して2つの類型を設定する。

使用痕A類—溝状の窪みが残されたもの

2点の部分的な破片ではあるが、第54図7は、平滑な研磨面に段差があり、第54図8は、断面がV字状に窪んでいる。石材は、軟質砂岩1・2であり、粗い粒子の石材に見られる。

使用痕B類—片面の中央部に緩やかな窪みが残されたもの

第57図6は完形であり、第55図5、第57図4は、その破片と考えられる。形態は、石皿のようであるが、本覚遺跡における典型的な磨石とは、窪みの形状と大きさが合致しないことから、これらも砥石と捉えた。石材には、軟質砂岩1・3があり、粗い粒子と細かい粒子どちらの石材にも見られる。



第60図 石器実測図29 加工された軟質砂岩(2)(軟質砂岩3)

14 加工された軟質砂岩

数 量 砥石の石材として多用される軟質砂岩には、側縁が剥離により両刃状を呈するものが8点ある(第59・60図、第18表)。また、加工に伴う剥片も26点が検出され、一部は接合する。

石 材 素材は全て砾であり、石材は、軟質砂岩2が2点、軟質砂岩3が6点である。

形 态 砧器あるいは打製石斧のように見えるが、石質が脆いことから、これらの石器に要求される機能は考え難い。軟質砂岩2については、「砥石ⅠA類加工有」の未使用の状態とも考えたが、軟質砂岩3を石材とする「砥石ⅠA類加工有」が検出されておらず、全てを「砥石ⅠA類加工有」の素材と捉えることはできない。

第18表 加工された軟質砂岩一覧表

種別	番号	地区	層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第59回	1 S282	4	Ⅲ	軟質砂岩2	124	95	34	955.9	
	2 N218	4	S82	軟質砂岩2	113	64	11	286.1	
第60回	3 S224	8	Ⅲ	軟質砂岩3	100	58	19	131.6	
	4 S420	3	Ⅲ	軟質砂岩3	105	50	24	95.3	
	5 S615+S738	9	Ⅲ	軟質砂岩3	122	60	25	144.2	
	4 S271	9	Ⅲ	軟質砂岩3	39	59	19	51.4	
	5 S006	7	Ⅲ	軟質砂岩3	91	60	23	932	円石
	6 S508	8/24	Ⅲ	軟質砂岩3	127	70	23	2135	

15 凹 石

数 量 断面漏斗状を呈する窓みが形成された凹石は、17点が検出された(第17～19表)。そのうち3点が砥石Ⅱ類、1点が加工された軟質砂岩と複合しており、それぞれの器種の報告に2点(第56図1、第60図5)を掲載してある。

石 材 素材は全て砾であり、石材は、軟質砂岩1が3点、軟質砂岩2が1点、軟質砂岩3が13点である。

崖みの数は、ほとんどが1箇所のみである。大型の標的一面に11箇所を数えるのが最多で、これも崖みどうしは離れている。所謂「多孔石」と表現されるような密度のものはない。

16 その他

その他の石器として、3点を掲載する(第61図、第20表)。

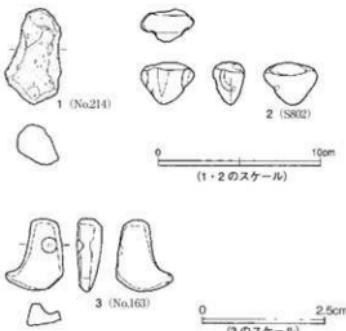
第61図1の石材は軽石である。両側縁に加工もしくは使用的痕跡が観察される。

第61図2の石材は砂岩である。全体に加工もしくは使用の痕跡が観察される。これを加工の痕跡と捉える視点からは、「動物形石製品」として、突出部分について「耳を表現」と見立てた記述がある。一方、これを使用的痕跡と捉える視点からは、骨角器等の砥石として、突出部を残存させた溝状の崖みを研磨痕とした記述がある。いずれであろうか。

第61図3の石材は碧玉である。表面が研磨されており、穿孔の途中と推定される穴がある。垂節の未成品と考えられる。

第19表 四石一覧表

番号	地区	属性	石 材	高さ	幅	厚さ	重量	備考
S304	3 SKI	軽質砂岩	186	142	58	1,335.5	化石	
S323	3-6	IV	軽質砂岩	127	199	63	2,040.6	
S150	4	II	軽質砂岩	91	54	26	382.2	機械
No226	4	II	軽質砂岩	62	46	14	42.3	
No211	4	III	軽質砂岩	70	64	33	149.3	
S147	4	III	軽質砂岩	84	83	23	150.8	機械
S342	7	III	軽質砂岩	193	51	33	339.8	
S357	8	B	軽質砂岩	146	69	29	292.0	
S293	9	III	軽質砂岩	255	221	80	3,011.6	
S718	10	III	軽質砂岩	166	119	44	848.9	機械
S243	8-24	III	軽質砂岩	269	206	67	1,280.0	機械 化石
S148	8-24	III	軽質砂岩	278	189	24	1,398.6	機械
No136	8-24	III	軽質砂岩	63	47	23	69.0	



第61図 石器実測図30 その他の石器

第20表 その他の石器一覧表

番号	番号	地区	属性	石 材	高さ	幅	厚さ	重量	備考
第6181	1	No214	3	軽石	59	35	25	15.0	
2	S802	10	III	砂岩	26	33	20	13.3	
3	No163	13	I	碧玉	15	12	5	0.81	

参考文献

- 鈴木道之助 1981 「図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文」 柏書房
株式会社
渡辺 誠 1973 「縄文時代の漁業」考古学選書7 雄山閣出版
株式会社

V 本覚遺跡における石棒製作について

1 はじめに

矢部素子氏により採集されていた石棒未成品を手掛かりに、本覚遺跡の発掘調査を実施した。矢部氏が記録していた大きさと位置に合致する既掘坑があり、その周囲から、主として縄文時代晩期の土器とともに石棒製作に伴う痕跡を検出した。まずは、矢部氏の採集した石棒未成品が、ここに包含されていたものに相違ないことを確認しておきたい。これが、部分的な発掘調査ではあっても、その成果から考察を進める出発点となる。

本稿では、本覚遺跡における石棒製作の時期を推定するとともに、石棒未成品に観察される石棒製作の痕跡から、石棒製作の工程の各段階に伴う工具へと考察を進める。

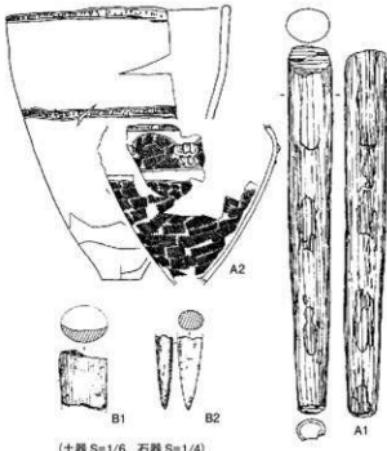
2 石棒製作の時期

石棒の成品と未成品 本覚遺跡から出土した石棒には、形態による細別の石棒、石剣、石刀の3つがある。形態による細別の石棒は、成品の胴部破片が1点であった。これに対して、石剣及び石刀は、全て未成品と捉えられるものである。これらの石材は全て粘板岩であるが、肉眼で観察される色調等が、石棒と、石剣及び石刀とでは異なる。石棒製作に伴うと推定される粘板岩の剥片・碎片は全て、石剣及び石刀の石材の特徴に一致する。つまり、本覚遺跡において製作されたのは、石剣及び石刀であったと考えられる。

石棒の時期 まずは、本覚遺跡から1点のみ出土した、形態による細別の石棒について、その時期を検討しておく。粘板岩を石材とすること、胴部直径の長軸が28mmほどであることの2つの属性をもとに、近在の遺跡から、時期を限定できる資料を抽出した。

九古古宿遺跡[中村1994、毎澤1997]の4号住居からは、石棒2点と石剣1点が検出されており、そのうち石棒1点の石材が粘板岩である。胴部破片であり、直径の長軸は30mmほど。時期は、後期後葉の安行1式から晩期前葉の大洞B式・安行3a式までの中にある。

中田新田遺跡[鈴木(素)1986]の第2号住居址の覆土中には、焼土が分布する範囲に遺物が集中し、その中心部から石棒(第62図A1)が検出されている。石棒は、頭部



第62図 後期後葉の石棒 (A : 中田新田遺跡
[鈴木(素)1986], B : 広畑貝塚[金子1979])

を欠損した胴～基部の破片である。粘板岩を石材とし、胴部直径の長軸は、最大値が36mm、最小値が22mmほど。時期は、後期後葉の安行1式もしくは安行2式である。

広畑貝塚[金子1979]のAトレンチ第7層からは、2点の石棒(第62図B1・2)が検出されている。石棒は、基部と胴部の破片である。「粘板岩質の石材」で、胴部直径の長軸は、38mmと20mmほど。時期は、後期後葉の安行1式もしくは安行2式である。

これらの資料の時期は、本覚遺跡における遺跡形成の時期と符合する。本覚遺跡の石棒についても、後期後葉、下っても晩期前葉の時期のものとして捉えておきたい。つまり、本覚遺跡における石棒製作とは時期を異にするものであり、本覚遺跡には成品として持ち込まれたものと考えることになる。

石剣・石刀の時期 石剣及び石刀の時期、即ち本覚遺跡における石棒製作の時期について、遺跡における遺物の出土状況と、石棒の頭部形態の比較から検討する。

遺物包含層の第Ⅲ層中からは、縄文時代早期から晩期にまでの各時期の土器が出土しており、時期ごとに土器の出土層準を捉えることはできなかった。水洗選別によ

らずに検出された石棒製作の剥片・碎片は、3・8・II-19・II-24区が他地区と比較して多い。しかし、時期ごとの土器の分布には、偏在も捉えられていない。石棒製作の時期を推定するための手掛かりは、第1号土坑、第1・2号ピットという遺構空間に限定された資料を求めることになる。第1号土坑からは砥石・粘板岩の碎片、第1号ピットからは石棒頭部破片・粘板岩の碎片・使用痕B類の削器、第2号ピットからは砥石という。石棒製作の直接あるいは間接の痕跡と捉えられる遺物が出土している。これら3基の遺構の覆土は、色調とともに焼骨片を含むことでも共通する。土器は、破片のみであり、複数の時期のものが混在する。とともに細片であっても晩期の土器は含まれており、そのうち第1号土坑の大洞C1式の浅鉢形土器をもって時期を推定しておきたい。つまり、本覚遺跡における石棒製作の時期は、晩期中葉の大洞C1式の時期と考える。

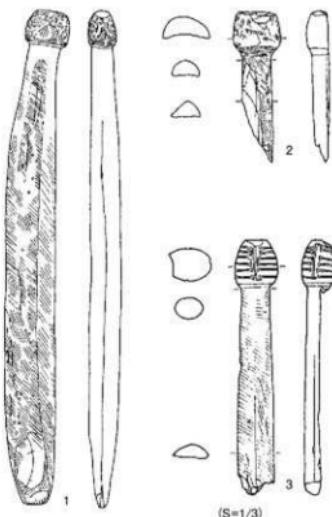
成品に近い段階の石棒の頭部は、矢部素子氏採集の石刀(第63図1)、第1号ピットから出土した石剣あるいは石刀の頭部破片(第63図2)の2点である。第63図1の頭部には、上端部付近に明瞭な敲打痕が残ることから、ここに研磨が加わると端部がやや細くなり、第63図2の頭部形態により似たものとなることが考えられる。第63図2は、頭部のはば全体が研磨されている。頭部形態の属性をもとに、近在の遺跡から、文様が彫刻された資料を抽出すると、小野天神前遺跡[鈴木(主)2002]の石剣に最も類似する。これは、石材の特徴、残存部から推定される法量もほぼ一致する。頭部に彫刻された文様は「I字文」で構成されており、「小野型石棒」[鈴木(主)2002]という名称を付与したものに相当し、ほぼ晩期中葉に位置付けられるものである。

小野型石棒 「小野型石棒」の表徵とすべき属性は、次のように整理してある([鈴木(主)2002]に一部加筆)。

1 「器種として石剣と石刀の別があり、石剣の方がが多い。頭部から基部まで残存する精製品は、長さ331～396mm、幅29～36mm、厚さ17～24mmの範囲にある。」

2 「頭部と基部に文様が施されたものがあり、石刀は、刃背部にも文様が施されている。頭部有文と基部有文の組合せが確認できる。」

3 「有文と無文の別があり、無文の方が多い。頭部無文、基部無文の破片がそれぞれに多いことから、頭部無



第63図 石棒の頭部形態(1・2: 本覚遺跡、3: 小野天神前遺跡[鈴木(主)2002])

文と基部無文の組合せがあることは確実と考えられる。」

4 「形態として單頭と両頭の別があり、單頭の方が多い。單頭の頭部及び両頭の先頭部の幅が胴部の最大幅とほぼ等しいのに対して、両頭の基頭部の幅は、その3分の2ほどである。」

5 「両頭にも、有文があると考えられる。文様構成は、單頭に共通する。」

6 「文様は、「I字文」で構成される。頭部及び基部の文様を「I字文」の範囲と規定することで、2及び5で規定した基部文様が型式の表徴として成立する。」

7 「時間的な細別が考えられる。頭部形態には、無段と有段があり、無段から有段への変遷が推定されている。頭部文様及び基部文様にも、系統的な変遷が推定される。細別が可能な資料については、古・新段階に「小野I・II型」という細別の型式名称が付与されることになる。」

8 「精製と粗製の別がある。型式の表徴は、精製品により規定される。粗製品には、頭部形態の異なるもの、断面あるいは平面の形状が不整形成分があり、研磨調整以前の剥離痕及び敲打痕が残されている。」

9 「粘板岩を石材の典型とする。軟質で、平滑に研磨されることから、文様彫刻には適した石材である。その

他には、千枚岩、ホルンフェルス、頁岩、泥岩と同定され得る石材も含まれることが考えられる。」

「小野型石棒」について、近在の遺跡から、時期を限定できる資料を抽出してみる。

下の内遺跡[井上・馬目1979]からは、頭部形態が無段で、縦位の「I字文」で構成された石劍(第64図A 1)が検出されている。明瞭さに欠ける写真からの判断ではあるが、第64図Cのような彫刻文様が推定されるものである。これに、注口土器(第64図A 2)、壺形土器(第64図A 3)が伴うらしい。壺形土器は、寺脇貝塚[馬目他1966]の「R群土器」に相当するものであり、大洞C 2式でも古い段階のものである。

柳沢遺跡[佐藤・井上1972]の住居址の床面からは、有溝石鍬に再利用された石棒の頭部破片が検出されている。頭部形態は有段であり、この頭部形態には、第64図Dのような彫刻文様が施されたものがある。同じ住居址の床面から出土した浅鉢形土器(第64図B 2)は、大洞C 2式でも新しい段階のものである。

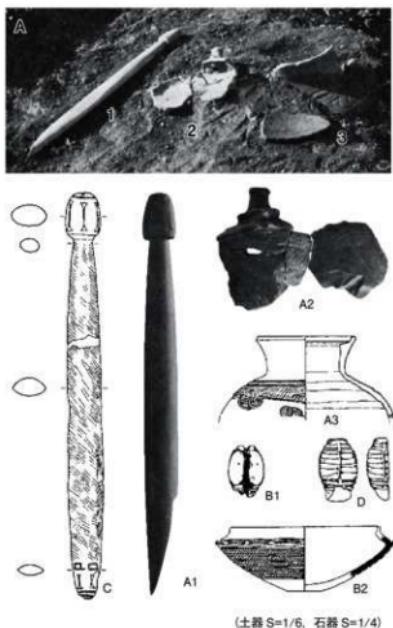
本覚遺跡において製作された石棒は、「小野型石棒」の細別では「小野Ⅰ型」に相当するものである。下の内遺跡と柳沢遺跡の事例からは、「小野Ⅰ・Ⅱ型」の細別の境界が大洞C 2式の時期にあるらしい。本覚遺跡の石棒を「小野Ⅰ型」と捉えることにより、大洞C 1式の時期には「小野Ⅰ型」が成立していると考えられることになる。

3 石棒製作の痕跡

石棒未成品 石棒の未成品は、加工の痕跡から、研磨段階、敲打段階、剥離段階という3つの製作段階に分類される。

研磨段階の未成品には、表面に敲打痕あるいは剥離痕を残すものがあり、敲打及び剥離の工程の後に位置付けられることは明らかである。研磨が進行して平滑なものが多いが、研磨に伴う擦痕は概ね明瞭である。頭部の擦痕は多方向、胴部の擦痕は、長軸に対して右下がりの斜方向及び縱方向、基部の擦痕は縱方向が特徴的である。これらは、研磨具との対応を示す痕跡である。

敲打段階の未成品には、表面に剥離痕が残り、剥離の工程の後に位置付けられることは明らかである。剥離が形成した後の高まりを潰すようにして、敲打の工程が開始されたと推定される。敲打痕がほぼ全面を覆うような

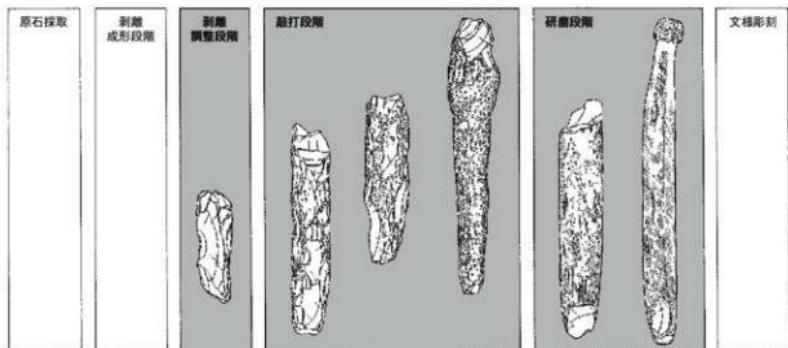


第64図 晩期中葉の石棒(A: 下の内遺跡[斎藤他1979], B: 柳沢遺跡[佐藤・井上1972], C: 金洗沢遺跡[鈴木(著)2002], D: 堀之内上の台遺跡[寺門1979])

状態まで進行したものもある。敲打痕は、外輪の直径が5mmほどのクレーター状に窪む。これは敲打具との対応を示す痕跡である。

剥離段階の未成品は、1点のみである。表裏の両側縁からの剥離により、ほぼ形状が整えられた状態のものである。

剥片・碎片 剥離段階の調整加工に伴う剥片は、全て横長剥片である。翼状を呈するものも見られる。最大でも長軸61mmであり、長軸が50mmを超えるのは2点に過ぎない。ほとんどは25mm以下の剥片・碎片である。また小さな剥片であっても、背面が複数の剥離痕で構成されたものが多く、自然面や單一の剥離面で構成されたものは見られない。これは、素材とする原石から剥離の工程が開始されているのではなく、剥離の工程により生成されたとしても、形状の調整に伴うものと考えられる。發



第65図 本覚遺跡における石棒製作の工程([鈴木(素) 2002]を一部改変)

掘調査以前には、「未完成の存在が石棒製作遺跡についての最も確実な情報となり得る」[鈴木(素) 2002]が、発掘調査においては、微細な剥片・碎片の検出が、石棒製作遺跡であることを確定する。

なお、調査区内から出土した礫には粘板岩が見られるが、石錐の原石に相当する法量のものであり、石棒の原石に相当する法量のものは認められない(第21～23表)。

本覚遺跡における石棒製作は、剥離の工程があったとしても、それは最終的な調整段階の作業である。そこで、剥離段階を、原石を荒削りし大まかな形状を作り出す成形段階と、幅や厚さなどの形状を整える調整段階に細別し、本覚遺跡における剥離段階を剥離調整段階として位置付けておきたい。本覚遺跡は、主として敲打段階及び研磨段階という工程の作業が行なわれた遺跡と捉えられるのである。

4 石棒製作の工具

研磨具 研磨段階の工具として位置付けられる石器には、砥石がある。本覚遺跡から出土した磨製石器には、石棒の他に磨製石斧がある。磨製石斧は全て、使用に伴い欠損したものと推定される。未完成及び、その素材となる礫(第21～23表)は出土していない。つまり、磨製石斧製作の痕跡は認められず、全ては成品として本覚遺跡に持ち込まれたものと捉えられる。使用に伴う刃部の研ぎ直しに、砥石が使用されたことは考えられるが、多量に検出された砥石及び、その素材となる礫(第21～23表)は、石棒製作の研磨具としての必要が残したものと

推定されるのである。

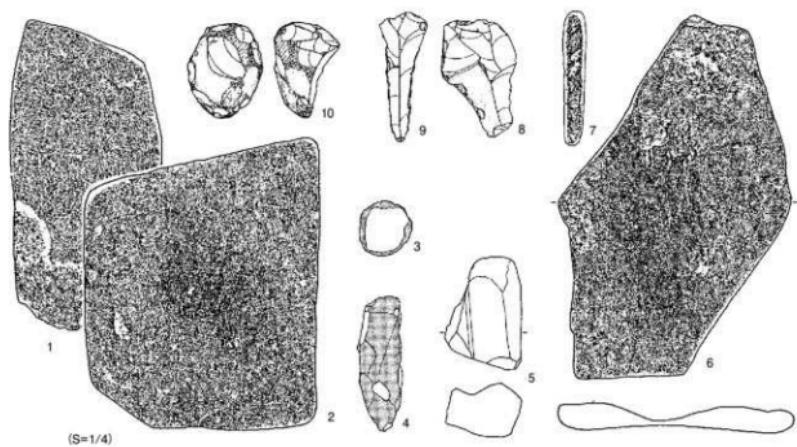
石材に見る粒子の大きさからは、礫岩、軟質砂岩1・2が表面を削るような粗い研磨に、軟質砂岩3・4、泥岩、頁岩が表面を滑らかにするような細かな研磨に使用されたことが考えられる。所謂「粗砥石」と「仕上砥石」に相当し、概ね作業工程の順序に合致するように石材が分けて利用されたことが想定される。

形態、法量、重量、使用面の位置からは、砥石I・II類と分類したように、「可動式」あるいは「手持ち砥石」と、「固定式」あるいは「置き砥石」と考えられるものがある。「可動式」は特定の狭い箇所を集中的に研磨すること、「固定式」は比較的広い面を均等に研磨することに効果的である。

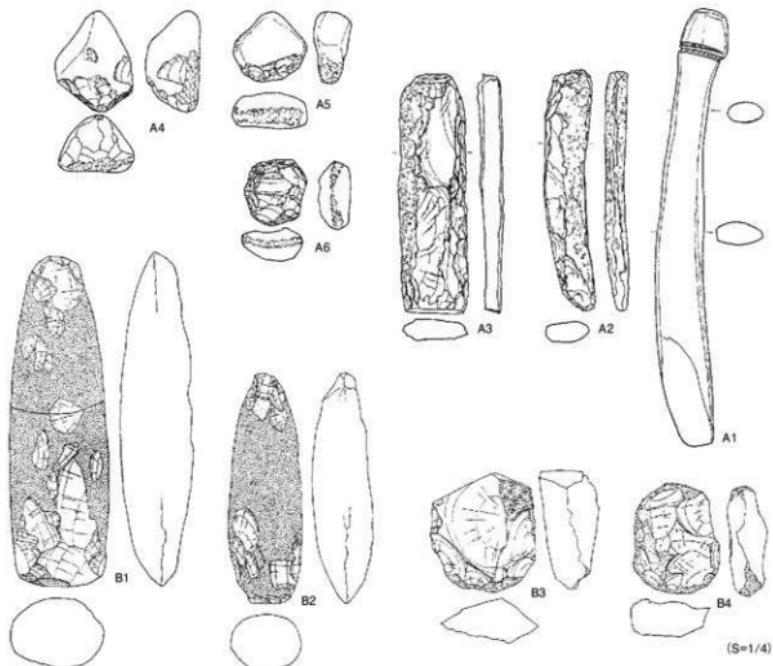
石棒未完成の胴部に見られる擦痕は、長軸に対して右下がりの斜位が特徴的であり、同一方向の擦痕が平行して並ぶ。これには、砥石II類即ち「固定式」の砥石(第66図1・2)を使用した研磨が推定される。

胴部から基部に見られる擦痕には、縦方向でしかも長いものがあることから、これには、砥石I類即ち「可動式」の砥石(第66図3・4)を使用した研磨が推定される。特に、軟質砂岩3を石材とする砥石I B類を使用した研磨が相当する。砥石I A類は、軟質砂岩1・2を石材とすることから、これには、研磨段階の初期に部分的な高まりを削り取るような作業に使用されたことを想定すべきかもしれない。

石剣及び石刀の形態の特徴である側縁の刃部を調整する研磨には、溝状の窪みが残された使用痕A類の砥石(第



第66図 本覚道路における石棒製作の工具



第67図 敲打段階に伴う敲打具の類例 (A:羽白C遺跡[山内他1988], B:尾崎遺跡[鈴木(次)他1977])

第21表 本管遺跡出土土礫の占数による石材組成

第 20 章 土地流转与瑞金市土地制度改革

卷之三

第21～26表の凡例

*第21-23表の「確」には、確と確片を含む。
報告文中に記載したように、「確」には、
最石、碧石、砒石として使用された可能性のあるものも含む。

原石については、「種」とし、碎片を含む。原石には、打製石器、石核、石片、石核片等が含まれる。

本年6月23日まで計画の対象としたのは、「第一号」の種と種片である。

の著書のうち、「第三回」にセイジが主役を作するものである。

アライトを「アライ」、ホーリンフュルスを「ホーリン」、アーヴィングを「アーヴィング」と翻訳している。

THE JOURNAL OF CLIMATE VOL. 17, NO. 10, OCTOBER 2004

第24表 本覚遺跡出土剥片類の点数による石材組成

	メノウ	珪質頁岩	トロトロ	チャート	頁岩	板状岩	オパール	砂岩	黒曜石	硬質頁岩	碧玉	石英	合計
剥片石器	99	30	16	25	2	6	3	2	0	1	1	0	174
磨核石器	0	4	11	6	0	0	2	0	0	0	0	0	7
剥片石核	2,409	1,192	478	173	135	16	108	50	81	5	46	31	4,653
第Ⅰ・Ⅱ層	1,702	819	294	130	74	9	71	33	5	2	32	27	3,198
第Ⅲ層	642	347	157	39	57	6	35	13	2	1	13	3	1,315
第Ⅳ層	9	7	5	1	1	1	1	0	0	0	0	1	26
通塵覆土	56	19	22	5	3	0	1	4	1	2	1	0	114
合計(点)	2,499	1,226	495	200	138	18	114	52	91	6	46	31	4,834
比率(%)	51.7	25.4	10.2	4.1	2.9	0.4	2.4	1.1	0.2	0.1	1.0	0.6	100.0

第25表 本覚遺跡出土剥片類の重量による石材組成

	メノウ	珪質頁岩	トロトロ	チャート	頁岩	板状岩	オパール	砂岩	黒曜石	硬質頁岩	碧玉	石英	合計
剥片石器	387.4	68.0	30.7	30.3	23.8	10.0	8.0	0.6	1.0	0.6	1.0	0.6	295.1
磨核石器	0	1,453.0	556.7	0	0	0	0	1,199.0	0	0	0	0	2,951.4
剥片石核	11,520.4	12,513.9	6,007.8	8,077.7	2,011.9	3,788.8	3,319.1	5,445.6	12.1	101.1	164.8	79.1	31,504.3
第Ⅰ・Ⅱ層	5,950.4	5,159.6	2,336.2	2,985.9	607.6	506.1	2,216.1	2,083.3	2.2	1.6	74.8	56.0	15,023.3
第Ⅲ層	4,380.0	5,660.2	3,449.3	4,697.7	917.0	281.2	963.3	2,485.5	7.1	89.7	86.6	41.1	15,690.0
第Ⅳ層	1,407.1	818.1	659.5	0.8	2,737	380.0	3.3	0	0	0	190	139.5	1,395.5
通塵覆土	1,049.3	839.5	156.1	38.3	7.3	0	0.7	87.8	2.5	10.1	34.1	0	2,195.3
合計(g)	11,907.8	14,493.3	7,266.9	8,581.1	2,014.9	3,949.4	3,360.0	17,440.0	12.7	102.4	164.8	79.1	39,401.9
比率(%)	30.2	36.8	18.4	2.2	52	1.0	0.9	4.4	0.0	0.3	0.4	0.2	100.0

第26表 本覚遺跡出土剥片の法量の分布

	珪質頁岩	砂岩	トロトロ	頁岩	メノウ	チャート	オパール	碧玉	板状岩	黒曜石	ね	英	硬質頁岩	合計
I (大型)	A (~26mm)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B (125~101mm)	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
II (中型)	A (100~76mm)	21	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	13
B (75~51mm)	31	11	11	7	13	0	0	0	0	0	0	0	0	63
III (小型)	A (50~26mm)	86	30	31	14	27	7	9	2	11	1	1	2	227
B (25~mm)	71	22	35	12	169	14	2	2	1	1	1	1	0	316
計	196	71	81	35	250	21	12	4	4	2	2	2	0	621
箇数														

66図5)、丸みを帯びた石棒頭部の形態を調整する研磨には、緩やかな窪みが残された使用痕B類の砥石(第66図6)が使用されたことが考えられる。さらに、石棒頭部の括れ部の研磨には、砥石C類即ち棒状「可動式」の砥石(第66図7)が使用されたことも想定に加えておきたいた。

擦切具 研磨段階及び剥離段階の破片には、それぞれ1点ずつではあるが、部分的に擦切りの痕跡を残したものがある。このような切り込みの角度と、擦痕の状態を、石棒頭部の括れに見出す。つまり、研磨段階における石棒頭部の作出にも、擦切具が使用されたことを推定することになる。これには、使用痕B類の削器が相当すると考える。刃部に残る細かな擦痕の方向は、擦切具としての運動方向に合致する。また、板状を対象とした擦切具が直刃か凸刃であるのに対して、これらの削器は凹刃か直刃であり、擦切る対象が丸みを帯びたものであることを示している。但し、剥離段階の破片にも擦切りの痕跡があることから、研磨段階に限定されるものではない。また、本覚遺跡の石錐には、未成品及び、その素材となる礫(第21~23表)が出土しており、石錐製作における溝状の加工に使用されたとも考えられる。結板岩等の比較的軟らかな石材を素材とする石器製作の工具と

して捉えられるものであり、これが石棒製作にも使用されたことを考える。

敲打具 敲打段階の工具として位置付けられる石器には、敲石がある。敲石として抽出された石器には、使用面にクレーター状の窪みを残すが多い。これは、主として剥離作業に伴う痕跡であり、対象とした石器あるいは石核に形成された尖端部との衝突痕と捉えられるものである。一方、石棒未成品には、外輪の直径が5mmほどのクレーター状の窪みが敲打痕として残されている。これには、逆の関係が成立することになる。つまり、敲石に形成された尖端部との衝突痕という捉え方であり、敲石I類が石棒製作の敲打工具として推定されるのである。

福島県羽白C遺跡[山内他1988]は、晚期における石棒製作の痕跡が確認された遺跡である。形態の細別による石刀(第67図A1)、未成品(第67図A2~3)、剥片とともに、礫の縁辺を剥離した敲石(第67図A4~6)が出土している。また、神奈川県尾崎遺跡[鈴木(次)他1977]は、中期における磨製石斧製作の痕跡が確認された遺跡である。磨製石斧の未成品(第67図B1~2)に敲打痕があり、製作工程には敲打段階が組み込まれている。ここからも、「Ⅲ類」「剥片や礫に調整剥離を施したもの」と分類された敲石(第67図B3~4)が出土している。剥離により尖端

部が作出された敲石は、敲打段階が工程に組み込まれた石器製作における敲打具として捉えられるものである。

剥離具 剥離調整段階の工具として位置付けられる石器も、敲石である。敲石Ⅱ類のなかでも、特に敲石ⅡC・D類は、剥片剥離の工具を推定する。敲石ⅡC・D類は、ともに長軸端部付近の側縁に使用痕を残し、素材となる礫の重量及び形態が異なる。敲石ⅡC・D類の使用痕c・dの細別については、使用痕dを「晚期のものとして特徴的」[西田1977]とする指摘もある。多量に出土した敲石ⅡC・D類は、メノウ、珪質頁岩、トロトロ石の石材を主として、多量に検出された剥片(第24~26表)の剥離、さらに剥片石器の製作、砾核石器の製作に使用されたものと推定される。重量及び形態による敲石ⅡC・D類の分類は、大型から小型に進行する剥片剥離の工程に対応するものとも想定されるのである。石棒製作の研磨具、擦切具、敲打具それぞれの石器製作にも関与しており、このなかには、石棒製作の剥離具も含まれていると考えておきたい。

5 おわりに

本稿において検討してきたことは、次の4つの項目にまとめられる。

1 本覚遺跡における石棒製作の時期は、縄文時代晩期中葉の大洞C1式の時期と推定される。

2 本覚遺跡において製作された石棒は、形態の細別による石劍と石刀であり、粘板岩を石材とすること、頭部形態からも「小野I型」と推定される。

3 本覚遺跡における石棒製作の工程は、未成品及び剥片・碎片の観察から、剥離調整段階、敲打段階、研磨段階が確認される。原石からの剥離成形段階、頭部及び基部への文様彫刻は認められない。

4 本覚遺跡においては、石棒製作の各段階に使用された剥離具、敲打具、研磨具、さらに擦切具と推定される石器が確認される。

実際に石棒が製作された作業の空間を捉えることは難しい。石棒未成品及び剥片・碎片、さらに石棒製作の工具の分布は、調査区内のほぼ全域に及び、全体的な遺物分布の粗密に一致している。ただ、今後に調査区北側の状況が明らかになれば、第1号土坑が位置する3区、ピット1・2が位置する8区を中心とした、石棒製作に関

わる遺物の集中が捉えられることになるかもしれない。廃棄あるいは遺棄の後に自然に移動することが考え難い遺物として、重量500g以上の砥石の分布(第8図)を見てみると、これらの地区を中心とする状況が浮かび上がる。しかしながら、これにも、作業空間に廃棄されたものか、作業空間から移動して廃棄されたものかを見極める難しさを知るのである。

参考文献

- 井上義安・馬日順一 1979 「下の内遺跡」[茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代] 茨城県
金子裕之 1979 「茨城県広畠貝塚の後・晚期縄文式土器」「考古学雑誌」第65巻第1号 日本考古学会
斎藤 忠也 1979 「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県
鈴木次郎他 1977 「尾崎遺跡 酒匂川総合開発事業にともなう調査」神奈川県埋蔵文化財調査報告13 神奈川県教育委員会
鈴木素行 1986 「中田新田遺跡」「古河市史 資料 原始・古代編」古河市
鈴木素行 2002 「ケンタウロスの落し物 一関東地方東部における縄文時代晚期の石棒についてー」「婆良岐考古」第24号 婆良岐考古同人会
鈴木素行 2002 「本覚遺跡への道 一関東地方東部における縄文時代石棒製作遺跡についてー」「茨城県考古学協会誌」第14号 茨城県考古学協会
中村紀男他 1994 「国説 茂木の歴史」 茂木町
西田道世 1977 「出土石器」「西広貝塚 一上郡国分寺台遺跡 調査報告Ⅲー」 早稲田大学出版部
毎澤信博 1997 「九石古宿遺跡」「茂木町史」第2巻 茂木町
寺門義範 1979 「千葉県夷隅郡大多喜町堀之内上の台遺跡 一房船半島における縄文時代晚期遺跡の研究ー」 夷隅郡教育委員会
山内幹夫他 1988 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告X II 羽白C遺跡(第1次)」福島県文化財調査報告書第194集 福島県教育委員会・財团法人福島県文化センター

VI 本覚遺跡出土石器の石材について

1 はじめに

本遺跡出土石器の石材岩種鑑定は、鈴木が肉眼鑑定により分類したものを、柴田が肉眼および双眼実体顕微鏡(20倍)を用いて確認するという手順で行った。柴田が単独で行った場合と同程度の鑑定精度が保たれている。

石材の現在における採集可能地調査は、他の遺跡などからの情報が無い中、地質関係の文献および地質図を頼りに、可能性のある河原および露頭の調査を、発掘と同時に実施した。さらに、遺物整理の進んだ段階で、石器石材の遺跡からの出土状況を踏まえ、追加の石材分布調査を行った。

特に石棒の石材である粘板岩については、採集した試料の岩石プレパラートを作成し偏光顕微鏡観察を行った。また、石棒に使用される粘板岩の地理的広がりを捉えるため、茨城県日立市上の代遺跡、大宮町(現在 常陸大宮市)泉坂下遺跡、土浦市上高津貝塚、福島県飯館村羽白C遺跡、千葉県鎌ヶ谷市中沢貝塚、栃木県藤岡町藤岡神社遺跡の石棒の出土試料の肉眼観察を実施し、さらに観察した各遺跡において数点ずつ、石棒の破片の一部から岩石プレパラートを作成し、偏光顕微鏡観察を行った。粘板岩や旧石器時代の剥片素材のような、極めてきめが細かく特徴を見いだしにくい石材の場合、肉眼や双眼実体顕微鏡のみによる対比では、石材間の共通性や違いを精度高く見いだすことはほとんど不可能である。まして、採取地推定に必要な厳密で精度の高い情報を得ることはできない。そのため、岩石学の世界で岩石の特徴を調べるために最も有効と言われている、岩石プレパラートを作成し偏光顕微鏡で観察する方法を採用したのである。

2 石棒の石材

石棒に使用される粘板岩について、岩石プレパラートを作成し、その偏光顕微鏡(100倍)観察結果を基本に、採集試料間・採集試料と遺物資料・遺物資料間の対比を行った。対比を行うさい、岩石プレパラートの偏光顕微鏡による直接の観察だけではなく、撮影した偏光顕微鏡写真を並べ、組合せの要領での対比も行った。特に、組織・構成鉱物・含有する化石などの点について着目し

比較した。

(1) 採集した粘板岩

石棒に使用されるような、黒く・きめが細かく・大きく平らな面で容易に削ることのできる粘板岩は、地質学で言う中生層・古生層に属するものである。関東地方において分布する可能性がある地域は、鮎川層群の分布する茨城県北部の日立地域(ア)・八溝層群A層の分布する八溝山地(イ)・雪入層の分布する筑波山南東方地域(ウ)・足尾層群の分布する足尾山地(エ)・秩父層群および小仏層群の分布する関東山地(オ)などである。

茨城県内においては、阿武隈山地最南端東部に分布する鮎川層・八溝層群を構成する八溝層群A層、筑波変成岩中の雪入層中に粘板岩は分布する。しかし、雪入層の点紋粘板岩は石棒製作遺跡および石棒の多く出土する遺跡から離れることと、肉眼観察においても点紋の粒度・岩相が石棒に使われる石材とは明らかに異なることから、今回の分析では検討対象から外した。秩父層群の粘板岩についても、雪入層とほぼ同様の理由で検討対象から外した。

① 鮎川層の粘板岩(写真1-①, 1-②)

阿武隈山地最南端に分布する日立古生層の最も東に位置する、粘板岩を主体とする地層が鮎川層である。鮎川層中の石灰岩レンズからペルム紀前期の紡錘虫化石が発見されており[杉山1972]、堆積年代が古生代ペルム紀前期と決定されている。

鮎川層の粘板岩は、極めて細粒で、割れ面も平滑で光沢すらも。極めて薄く剥離し、岩相は石棒と似ている印象を受ける。更に、鮎川の河床に100m以上にわたり岩盤として露出し、平滑で大きな粘板岩の板を容易に剥離・採集することができる。石棒石材として有望との印象をもった。

鮎川層は日立市の上源訪橋下の露頭・金沢園地北側の沢・櫻川で採集した試料を検討対象とし、岩石プレパラートを7点作成した。

岩石プレパラートを偏光顕微鏡で観察した結果、完全に再結晶していることが確認され、結晶片岩に属する粘板岩であることが明らかとなった。再結晶の度合いは採

集地点により幅のあることも明らかとなった。

②八溝層群A層の粘板岩(写真2-①, 2-②, 2-③)

八溝層群のA層は、国見山・井殿山・尺丈山・八溝山西方と南北に細長く分布する。

八溝層群A層の粘板岩は、平らな面で容易に割ることはできるが、石棒に比較して粒度が粗く、割れ面に小さな凹凸や粒状感が認められ、剥離の厚さもやや厚いため、肉眼的には石棒とは異なる石材の可能性が高いと推定された。

御前山村・緒川村の河原・露頭で採集した粘板岩、および硯の材料である久慈黒石・大子国寿石を検討試料とし、岩石プレバラートを6点作成した。

岩石プレバラートを偏光顕微鏡で観察した結果、再結晶は認められず微少な碎屑粒子と円形をした微化石の認められるものが多くあった。

③足尾層群の粘板岩(写真2-④)

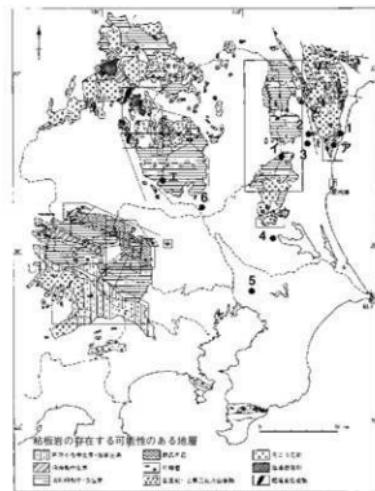
足尾層群において粘板岩の分布は広くはないが、足利市西部を流れる松田川において、硯石や石碑に適した粘板岩が分布し採集する事ができる。松浜石と呼ばれる石材名を持つ。極めて細粒で軟らかく、平滑な面で割ることができる。きめの細かさは鮎川層の粘板岩以上である。

足尾層群の粘板岩は、足尾山地南西端に近い足利市郊外松田川上流で採集したものを検討試料とし、岩石プレバラートを3点作成した。

岩石プレバラートを偏光顕微鏡で観察した結果、再結晶は認められず微少な石英・斜長石を主とする碎屑粒子の集合体であった。

④遺物資料および採集試料のプレバラート観察結果と石材採取可能地推定

粘板岩・頁岩のようなきめの細かな石材の場合、遺物間もしくは遺物と採集試料において、同じであるか否かの判定は肉眼では困難である。岩石プレバラートを作成し、偏光顕微鏡下において組織・構成鉱物・含まれる化石などを観察比較する必要がある。今回は鮎川層の粘板岩6点、八溝層群A層の粘板岩6点、足尾層群の粘板岩3点合計15点のプレバラートを作成し、それらと遺物資料25点(茨城県日立市上の代遺跡4点、金砂郷町(現在常陸太田市)本覚遺跡3点、大宮町(現在常陸大宮市)泉坂下遺跡3点、土浦市上高津貝塚4点、福島県飯館村羽白C遺跡4点、千葉県鎌ヶ谷市中沢貝塚5点、栃木県



1: 上の代遺跡、2: 本覚遺跡、3: 泉坂下遺跡、
4: 上高津貝塚、5: 中沢貝塚、6: 藤岡神社遺跡
アオ: 産地試料採取地

第68図 遺物試料・産地試料の採取位置
([大森 1986] より転載・加筆)

藤岡町藤岡神社遺跡2点)から作成した岩石プレバラートを偏光顕微鏡下で比較した。なお、上の代遺跡の2点は粘板岩の片理面に直角な向きに切断したプレバラートであり、その2点以外は片理面に平行な面のプレバラートである。鮎川層のような変成岩に属する粘板岩においては、切断する方向により観察される組織に大きな違いが存在する。片理面に沿った場合は平行な筋が顯著であるのに対し、直角な場合は微摺曲組織が顯著となる。作成したプレバラートの偏光顕微鏡観察結果は第27表に示す。各遺物資料・採集地試料の代表的な偏光顕微鏡写真(100倍・平行ニコルで撮影)は、写真1, 2に示す。

以下に、遺物資料と採集試料の対比結果を記す。

①羽白C遺跡(福島県飯館村)4点: 全て鮎川層以外の変成岩ではない粘板岩; 写真2-⑤

②上の代遺跡(茨城県日立市)4点: 3点鮎川層の変成岩である粘板岩; 写真1-③, ④, 1点鮎川層以外の変成岩ではない粘板岩

③本覚遺跡(茨城県金砂郷町)3点: 全て鮎川層の変成岩である粘板岩; 写真1-⑤, ⑥

④泉坂下遺跡(茨城県大宮町)3点: 全て鮎川層の変成岩である粘板岩; 写真1-⑦

⑤上高津貝塚(茨城県土浦市)4点：全て鮎川層の変成岩である粘板岩：写真1-⑧

⑥中沢貝塚(千葉県鎌ヶ谷市)5点：全て鮎川層以外の粘板岩(松漢石に近いが少し異なる)：写真2-⑥、⑦

⑦藤岡神社遺跡(栃木県藤岡町)2点：全て鮎川層以外の粘板岩(松漢石に近いが少し異なる)：写真2-⑧

茨城県内の4遺跡においては、上の代遺跡の1点を除き18点中17点が鮎川層の粘板岩であり、石材採取地は鮎川河床を代表とする日立市南東部地域と推定される。一方、県外の遺跡においては鮎川層の粘板岩は確認できず、日立市南東部地域以外ではあるが、どの地域であるか推定できなかった。

3 石棒以外の出土石材の採取地について

以下に述べる石材の採取地推定については、石棒に使用された粘板岩の場合とは異なり、岩石プレバラートを作成し偏光顕微鏡で観察・比較した結果ではなく、肉眼で見たときの顔つきの類似性と、石材分布の有無による推定である。遺跡における出土量(重量および点数)と石材分布地との距離も考慮した結果である。

①軟質砂岩・軟質泥岩

遺跡周辺には、地質時代で言う新第三紀中新世に堆積した浅川層最下層に位置する中沢砂岩部層が分布する。中沢砂岩部層は、固結度のやや不十分な軟質シルト岩(泥岩)・細粒～粗粒の軟質砂岩・礫岩から構成されている。礫岩中には硬く固結した砂岩・頁岩・チャート・花崗岩類・安山岩・ディサイト・凝灰岩などの礫が存在している。

遺跡直下の中沢川の小さな河原には、礫として中沢層起源の灰褐色の軟質シルト岩および色々な粒度の軟質砂岩が多く分布し、採集が可能である。遺物の軟質砂岩・泥岩は、遺跡直下の川で採取されたものと推定される。

②砂岩・頁岩・石英斑岩・流紋岩・アブライト・チャート

出土した遺物は、久慈川や那珂川で採集できるものに比べ、円磨度の高いものが多い。一方、遺跡直下の河原で採集できる、中沢砂岩部層に属する礫岩起源と推定される砂岩・頁岩・石英斑岩・流紋岩・アブライト・チャートの礫は、一度に採集できる点数は多くはないが、極めて円磨度の高いものである。石材としての岩相も遺物と類似している。出土した遺物の砂岩・頁岩・石英斑岩・

流紋岩・アブライト・チャートは、遺跡直下の川で採取されたものと推定される。

③多孔質安山岩

遺跡直下の川および中沢砂岩部層の礫岩中には存在しない。遺跡周辺で最も近い採集可能な場所は那珂川の河原であり、那珂川からの搬入品と推定される。

④トロトロ石

トロトロ石は、男体山火山角礫岩中の角礫が起源である。岩石学的には、ビジョン輝石岩系の無斑晶質ガラス質ディサイトである。極めて風化しやすく、遺物として出土する場合は表面がブラシで傷つくほど軟らかくなっている場合が多い。そのため、発掘者の間でトロトロ石との呼称で呼ばれることが多い。石材の見かけの特徴をよく表し、かつ石材の採取できる場所をかなり限定する名称であるため、本報告中では石材名として用いる。浅川・久慈川など、遺跡に比較的近い多くの地点に分布し、採集が可能である。遺跡周辺のいずれかで採取したものと推定される。

⑤メノウ

遺跡から5km圏内にある諸沢などで採集可能であり、大半のメノウは諸沢など遺跡周辺で採取されたものと推定される。

4 まとめ

石棒以外の石器に用いられる石材の大半は、遺跡直下の河原や浅川・諸沢など、遺跡近くで採取したものと推定された。多孔質安山岩など少數の石材に、那珂川や久慈川でのみ採取可能なものの認められた。

石棒の石材である粘板岩であるが、本覚遺跡・泉坂下遺跡・上高津貝塚でプレバラートを作成し検討した結果、全て鮎川層の変成岩に属する粘板岩と判定された。上の代遺跡では、4点中3点が鮎川層の変成岩に属する粘板岩と判定された。一方、鎌ヶ谷市の中沢貝塚と藤岡町の藤岡神社遺跡でプレバラートを作成した石棒の石材は、肉眼的にも偏光顕微鏡下においても同じ石材であり、鮎川層とは異なる変成岩ではない粘板岩であると判定された。残念ながら今回の研究では、同一と判定される石材の採集可能地を発見するには至らなかった。

石棒に使用される粘板岩は、茨城県内のかなりの地域で鮎川層の粘板岩が用いられ、下総台地西側など古渡良

第27表 遺物資料・産地試料の偏光顕微鏡観察結果表

			遺跡名	遺物番号	再結晶の有無	砂礫粒子	方解石の多少	白雲母の多少	黒雲母の有無	機化化石の多少	石英・白雲母構円状集合体	配列的方向性	備考	石材の起源推定結果
1	福島県 飯船村	羽白C		1	×	○	少	多	×	×	×	○		不明
2				2	×	多	少	少	×	×	×	×		不明
3				3	×	○	多	多	○	×	×	×		不明
4				4	×	多	極少	多	×	×	×	○		不明
5	茨城県 日立市	上の代		1	○	×	少	多	×	×	○	圓著		鮎川層
6				2	×	×	少	多	○	×	×	×	はとんじ砂利粒子	不明
7				3	○	×	多	多	○	×	×	○	微滑曲	鮎川層
8				4	○	×	多	多	○	×	○	○	微滑曲	鮎川層
9	千葉県 金糸町	本覚		N0008	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
10				Nu118	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
11				S.379	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
12	大宮町	泉板下		1	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
13				2	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
14				3	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
15				1	○	×	多	多	×	×	○	圓著	周緑色の薄片いっぽい	鮎川層
16	土浦市	上高津貝塚		2	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
17				3	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
18				4	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	鮎川層
19				1	×	多	多	少	×	×	×	○		不明
20	千葉県 麻ヶ谷市	中沢貝塚		2	○	○	多	多	×	×	×	×	砂利粒子細粒	不明
21				3	×	○	少・小	少	×	×	×	×	砂利粒子細粒・少ない	不明
22				4	×	多	多	多	×	×	×	○	浜緑色の構造状鉱物多い	不明
23				5	○	○	中	×	○	×	○	○	褐色の薄片状鉱物多	不明
24				1	×	○	多	少	×	×	×	×	砂利粒子細粒・少ない	不明
25	栃木県 藤岡町	藤岡神社		2	○	○	多	少	○	×	○	×	砂利粒子細粒・少ない	不明
1				1	○	×	多	多	○	○	○	圓著	浜緑の黒雲母	
2	茨城県 日立市	鮎川層		2	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	
3				3	○	×	多	多	○	×	○	圓著	浜緑の黒雲母	
4				4	○	×	多	多	○	○	○	圓著	浜緑の黒雲母	
5				5	○	○	多	中	×	×	○	圓著	再結晶弱い	
6				6	○	×	多	○	○	○	○	圓著	浜緑の黒雲母	
7				1	×	○	少	中	○	×	×	×		
8	千葉県 猪川村	八溝層群		2	○	○	少・少	多	○	多	×	×		
9				3	○	○	少	多	○	多	×	×		
10				4	×	○	少	中	○	○	×	×		
11	茨城県 山方町	(久慈黒石) (国寿石)		1	×	○	少	多	○	多	×	×		
12				2	○	○	少	中	○	○	○	○		
13				3	○	○	少	中	○	○	○	○		
14	栃木県 足利市	足尾層群 (松波石)		1	○	○	少	中	○	○	○	○		
15				2	○	○	少	中	○	○	○	○		
3				3	○	○	少	中	○	○	○	○		

*上の代道路の遺物番号と本書第70図は、次のように対応する。1:第70図10, 2:第70図11, 3:第70図12, 4:第70図13。

*泉坂下道路の遺物番号と[鈴木(主)2002]第7図は、次のように対応する。1:第7図1, 2:第7図2, 3:第7図3。

*○は有り、*は無し。

湘南や奥東京湾に面する地域では、鮎川層とは異なる産地の石材が用いられる可能性の高いことを明らかにすることができた。現在知られている、他の器種に用いられる石材の地域性とも整合性のある結果が得られたのである[柴田2004]。

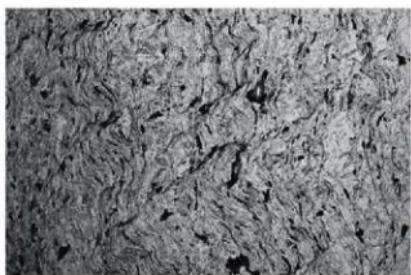
今後当面の課題としては、古鬼怒湾に面した遺跡、特に千葉県舞鶴遺跡出土の石剣が鮎川層の粘板岩であるか否か検討すること、中沢貝塚および藤岡神社遺跡出土の粘板岩製石棒の石材採取可能地を追求することなどが考えられる。今後の課題としたい。

参考文献

- 大森昌衛他 1986 「日本の地質3 関東地方」 共立出版
- 大根憲四郎 1975 「棚倉破碎帯の地質構造」『東北大学理学部 地質学専門教室邦文報告第七十六号』 p.1-70 東北大学
- 柴田 勲 2004 「II - 2 - (7) 石器の石材と産地」『千葉県の歴史』資料編 考古4 p.412-423 千葉県
- 杉山新平 1972 「日立地域より紡錘虫化石の発見」『地球科学』26, p.173-175 地学団体研究会
- 峰須紀夫 1977 「茨城県 地学のガイド」 p.110-113 コロナ社
- 下野地学会編 1984 「日曜の地学9 栃木の地質をめぐって」 p.150-154 桐地書館
- 茨城県地質団
- 栃木県地質団



①採集試料：鶴川層 1



②採集試料：鶴川層（再結晶の進んだ断面）



③遺物資料：上の代 4



④遺物資料：上の代 1



⑤遺物資料：本覚 No.118



⑥遺物資料：本覚 S379

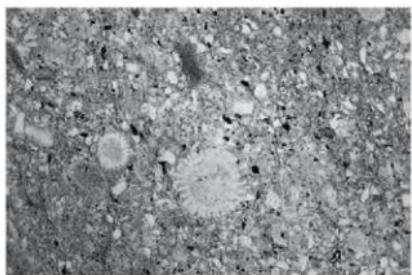


⑦遺物資料：泉坂下 3

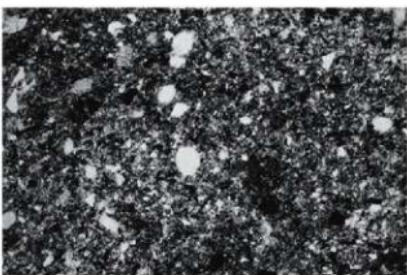


⑧遺物資料：上高津貝塚 2

写真 1



①採集試料：八溝層群 2



②採集試料：久慈黒石



③採集試料：大子国寿石



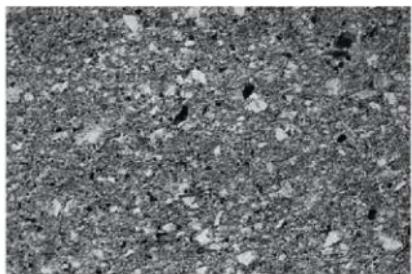
④採集試料：松溪石 1



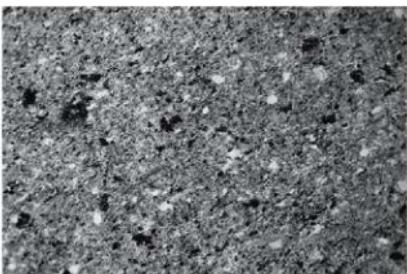
⑤遺物資料：羽白 C 遺跡 2



⑥遺物資料：中沢貝塚 4



⑦遺物資料：中沢貝塚 2



⑧遺物資料：藤岡神社遺跡 2

写真2

VII 茨城県北部における石棒製作について

1 はじめに

本覚遺跡における石棒製作は、剥離調整段階を始点としており、それ以前の原石採取から剥離成形段階が欠落する。また、研磨段階を終点としており、文様彫刻が欠落する。石棒製作の作業に限定しても、本覚遺跡のみで完結するものではなく、他の遺跡との連鎖により成立していることが推定される。

また、本覚遺跡には、製作された石棒を使用して後に廃棄した痕跡が認められない。つまり、成品は、本覚遺跡から他の遺跡へ持ち出されていると考えなければならない。自家消費のための製作ではなく、石棒の需要と供給は、他の遺跡との連鎖により成立していると推定されるのである。

本稿では、本覚遺跡周辺の縄文時代晚期遺跡の分布から、本覚遺跡との連鎖が想定される遺跡を抽出してみる。

2 縄文時代晚期の遺跡群

遺跡の集成　本覚遺跡周辺に形成された縄文時代晚期の遺跡を集成する。本覚遺跡周辺という範囲は、便宜的に直径50kmとして設定したが、茨城県北部の状況を把握するための基礎的な資料としても活用できるよう、この範囲外にあっても、那珂川流域以北の遺跡は網羅するように努めた。遺跡を抽出する資料として利用したのは、1964・1970・1975年に刊行された「茨城県遺跡地名表」、1979年に刊行された「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」の「先土器・縄文時代遺跡地名表」及び収録された資料、該当する市町村の自治体史、その他いくつかの遺跡についての発掘調査報告書、論文、資料紹介等の文献である。

「遺跡地名表」は、文字情報のみであることから、記載が正確であるのか検証はできない。「茨城県遺跡地名表」に記載された本覚遺跡の「弥生」について誤認の可能性を指摘したように、今後の調査で「晚期」の遺跡でないことが明らかになるものも含みながらの集成である。

また、本覚遺跡のように、従来の「遺跡地名表」では「晚期」として記載されていない遺跡に、「晚期」の複合が明らかにされることがある。小場遺跡も、「遺跡地名表」に

遺跡として登録はされていても「晚期」の記載が無く、「高萩市史」にも「高萩地方からは、縄文晚期の土器は発見されていない」〔志田1969〕と記述されていた。1984年に発掘調査、1986年に報告書が刊行されて、晚期の遺跡であることが周知されるようになるのである。さらに、早くから市街地が開発された日立市、水戸市などでは、晚期に限らず遺跡の形成が不明な地区がある。一方で、全くの未発見の遺跡が埋没していることも当然のことながらあり得る。現在のところ、「晚期」の遺跡として報告された遺跡の集成ということになる。

遺跡の規模　この地域においては、晚期の集落跡の大部分が明らかにされるような大規模な発掘調査は実施されていない。小規模な発掘調査であっても実施された遺跡は少なく、発掘調査が実施されても詳細が報告された遺跡がさらに稀である。ほとんどの遺跡については、集落跡であるのかも判断ができない状況にある。

一方で、数個体分の土器が検出されるにすぎないという遺跡があるのは確実である。武田西塙遺跡〔鈴木(末)2001〕では、台地上のはとんどの範囲に発掘調査が実施されたが、検出された晚期の土器は2個体であった。武田石高遺跡〔鈴木(末)1998〕についてもほぼ同じ状況である。発掘調査報告書を見る限りでは、泉前遺跡〔住谷1982〕、高天原遺跡〔井上1985〕、向井原遺跡〔瓦吹・市毛1986〕、大鋸町遺跡〔井上1988〕なども、このような遺跡と想定される。また、山崎遺跡〔井上(末)1990〕、塙平遺跡〔矢野1997〕などのように、石棒の破片のみが報告されている遺跡もある。

集成された遺跡については、情報が不足することから等質なものとして扱わざるを得ないが、遺構が形成されておらず、遺物も希薄な遺跡が含まれていることを考慮する必要がある。

遺跡群の分布　以上のような条件で集成された遺跡ではあるが、地図上に記入して、遺跡分布の粗密を捉える。本覚遺跡周辺において直径5kmの範囲内に4遺跡以上が形成されている遺跡の集合からは、次の4つの遺跡群が設定されることになる(第69図)。

A 小野遺跡群 野口平、西塙、三美泉沢、八田、小



- 地図中の大円は、本道道路を中心とした直径50kmの範囲。4つの小円は、A：小野遺跡群、B：成沢遺跡群、C：田尻遺跡群、D：久慈遺跡群をそれぞれ直径5kmの範囲で示した。
- 番号の「下」は福井県、「上」は福井市に所在する道路である。
- 一覧表中の所在地は、本道名称を「茨城県道地図」(茨城県教育委員会2001) のまま記載した。
- 一覧表の右端は、A：発掘調査報告書・論文・資料紹介書、B：市町村の古物保存、C：市町村教育委員会発行の分布調査報告書、D：茨城県教育委員会発行の遺跡地名表、E：『茨城県史』考古資料編 先土器・縄文時代』(高橋良1979) の遺跡地名表及び掲載資料と、5つに大別し、Aのみ執筆者及び発行年を記載した。Aを最優先し、以下B C D Eの優先順位で記載した。

第69図 茨城県北部における縄文時代晩期の遺跡分布

野天神前の5遺跡

B 成沢遺跡群 小坪、大坪、滝ノ上、藤井町、小坂、小田倉、塙、金洗沢、開江の9遺跡

C 田尻遺跡群 大近平、立下、上の代、明神越の4遺跡

D 久慈遺跡群 宮脇A、泉前、南高野、上の台の4遺跡

本覚遺跡に最も近いのは小野遺跡群であり、直線距離では11kmほど。地形を見る限りでは、西野内古館跡(第69図18)へ抜けて、下坪・小祝遺跡(第69図21・22)から小野遺跡群へという経路が想定される。

3 遺跡群の石棒

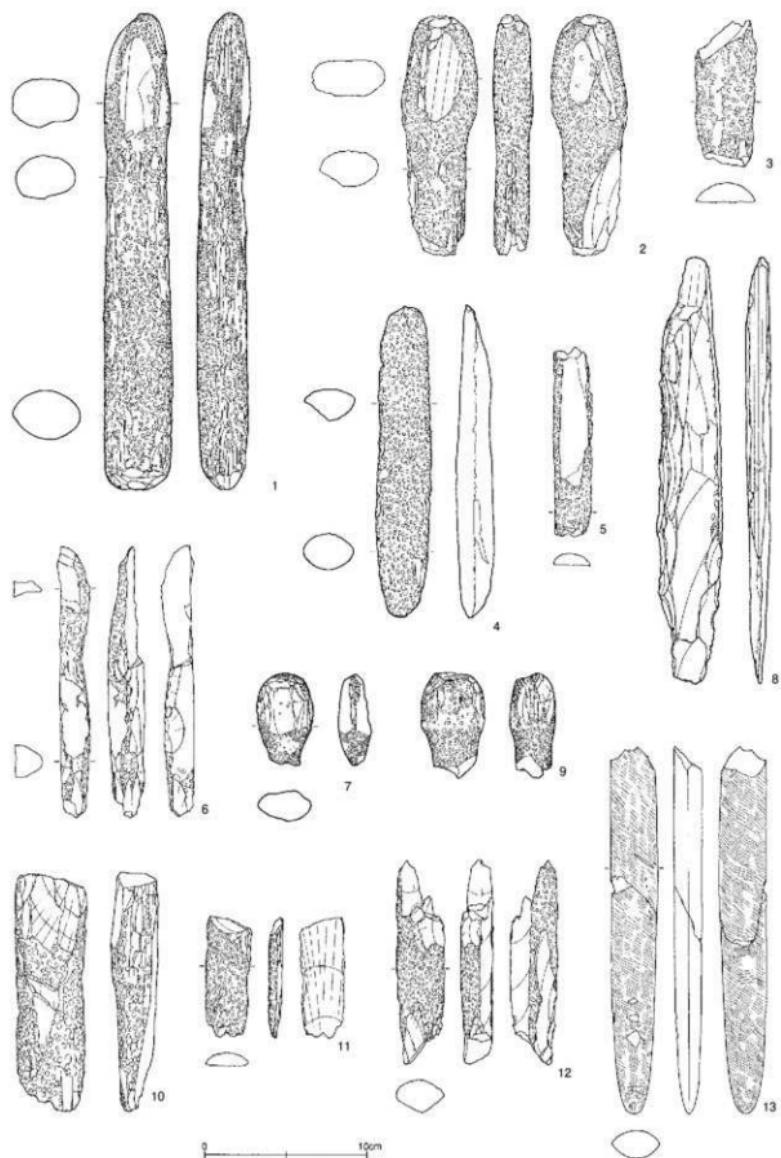
本覚遺跡周辺に設定された4つの遺跡群においては、石棒及び石棒未成品が報告されている。

小野遺跡群 小野天神前遺跡からは、粘板岩を石材とする石棒だけでも60点を越える数量の破片が採集され

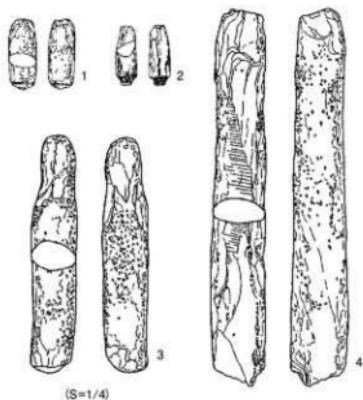
番号	遺跡名	所在地	出典
1	上野台	北茨城市	A丸吹1990
2	塙台	北茨城市	A丸吹1990
3	花地	北茨城市	A丸吹1990
4	綿原	北茨城市	A丸吹1990
5	小近平	西野内	A鈴田1986
6	立下	日立市	C
7	上の代	日立市	A丸吹1972
9	明神越	日立市	A高尾金1997
10	十上堂	日立市	C
11	池の川	日立市	C
12	宮脇A	日立市	A荒井1997
13	泉前	日立市	A佐谷1982
14	南高野	日立市	A鶴志1972
15	上の台	日立市	C
16	綿野	日立市	B
17	大近平	日立市	A鈴木2002
18	西野内古館	山方町	B
19	籠内	那珂町	B
20	泉坂下	大宮町	A鈴木2002
21	下坪	大宮町	E
22	小祝	大宮町	B
23	綿平A	大子町	B
24	後谷津	大子町	E
25	忍野平	美和村	B
26	高岡	美和村	B
27	御所	那川村	B
28	大近平	御所村	B
29	西境	御所村	B
30	三美星沢	大宮町	D
31	六田	大宮町	E
32	小野入樽前	大宮町	B
33	春岡	常陸町	A佐々木1987
34	山	常陸町	B
35	野上E	東海村	C
36	東海村内	東海村	C
37	平原B	東海村	C
38	北根の根	七合村	D
39	綿原	七合村	B
40	河川	水戸市	A川又金1980
41	平塚	水戸市	A川又金1980
42	ドウゼンクボ	水戸市	C
43	小坪	水戸市	A川又金1980
44	南上	水戸市	A川又金1980
45	藤井町	水戸市	A川又金1980
46	小坂	水戸市	C
47	小田倉	水戸市	A西村1979
48	塙	水戸市	A川又金1980
49	金洗沢	水戸市	C
50	滝ノ上	水戸市	E
51	アツヤ	水戸市	A大森1963
52	河井岸	水戸市	A伊東1974・丸吹・市川1986
53	高木原	水戸市	A井上・村田1985
54	大原町	水戸市	A井上1988
55	下の内	水戸市	A井上・馬日1979
56	下畑	水戸市	C
57	武田西場	ひたちなか市	A鈴木2001
58	武田石高	ひたちなか市	A鈴木1998
59	足崎	ひたちなか市	A井上1971
60	綿原・神社	ひたちなか市	A西田1984
61	綿原	ひたちなか市	A西田1984
62	半分山	ひたちなか市	A鈴木2004
63	鹿沢太田房	ひたちなか市	A井上・佐藤1972・藤本1977
64	一本松	大洗町	A井上・鈴木2001
65	椎現山	内原町	B
66	有賀台	内原町	B
67	有賀宿	内原町	B
68	滝台	内原町	B
69	小堤	茨城町	A井上1995
F1	下坪	矢奈町	B
F2	古瀬	鳥山町	B
F3	溪見内	鳥山町	B
F4	塙場	鳥頭町	B
F5	泉	鳥頭町	B
F6	堀井上	鳥頭町	A中村2002
F7	綿平	茂木町	B
F8	九石古墳	茂木町	B
F9	野瀬原	竜子町	A高橋2001

ている。ほとんどは成品であるが、そのなかに、敲打段階の石棒未完成品と捉えられるものが4点(第70図1~4)ある。

成沢遺跡群 小田倉遺跡からは、早稲田大学考古学研究室による発掘調査で「石棒破片2個、石劍破片7個」[西村1979]の記述があり、他に、粘板岩を石材とする石棒の破片だけでも10点を越える数量が採集されている。



第70図 小野天神前遺跡・小田倉遺跡・金洗沢遺跡・上の代遺跡の石棒未成品(1～5：小野天神前遺跡、6・7：小田倉遺跡、8：金洗沢遺跡、9～13：上の代遺跡)



第71図 宮脇A遺跡の石棒未成品
〔荒井1997〕より引用)

そのなかに、敲打段階の石棒未成品と捉えられるものが2点(第70図6・7)ある。また、金洗沢遺跡からも、発掘調査で粘板岩を石材とする石棒が出土している。8点の成品とともに、剥離段階の石棒未成品が1点(第70図8)ある。この遺跡については、「多数の打製石斧や半加工状態の石片」[大森1963]の集積について記述が残されており、石棒製作に関わるものか今後に調査が必要である。

田尻遺跡群 上の代遺跡からは、粘板岩を石材とする石棒だけでも30点の破片が検出されている。ほとんどが石棒未成品であり、剥離段階が3点、敲打段階が17点(第70図9~12)、研磨段階が10点(第70図13)ある。研磨段階を成品の破片と捉えたとしても、65%以上を未成品が占めている。

久慈遺跡群 宮脇A遺跡からは、「大半がホルンフェルス製」[荒井1997]として、石棒及び石棒未成品(第71図1~3)が報告されている。報告書に掲載された成品と未成品はほぼ同数である。

さて、4つの遺跡群には、それぞれに石棒未成品を出土する遺跡が含まれている。田尻遺跡群の上の代遺跡は、石棒未成品の数量の方が多く、石棒製作の遺跡であることが確実視される。その他の遺跡群においても、石棒未成品の存在からは、石棒製作を想定しておくべきであろう。他に、これらの遺跡群には含まれない泉坂下遺跡(第69図20)からも、石棒未成品は出土している[鈴木(未)

2002]。つまり、茨城県北部において石棒製作が行なわれた遺跡は、本覚遺跡が唯一のものではない。むしろ、各遺跡群に付属するように石棒製作の遺跡が分布しており、本覚遺跡は、小野遺跡群、特に小野天神前遺跡への供給を第一に想定すべき位置関係にある。

4 本覚遺跡の選地

本覚遺跡からは、石棒製作の痕跡のみが検出されるわけではない。早期から晩期までの遺跡が重複することで明らかのように、石棒製作が認められない時期にも遺跡が形成されており、石棒製作に限定されない立地の条件を備えている。多数の石器、食料残滓と推定される動植物の遺存体は、長期間の集積にもよるが、晩期大洞C1式の時期に限定しても、各器種、粗製・精製の土器が出土している。したがって、石棒製作に特化した遺跡ではなく、集落遺跡の生活痕跡の一部として石棒製作が複合すると捉えられるものである。

それでは、本覚遺跡に石棒製作が複合することになった立地の条件とは何か。石棒の石材は、粘板岩であり、鮎川流域で採集されたことが推定されている。つまり、石棒の原材料が遺跡近在にあることによるのではない。これに対して、研磨工程の工具である砥石の石材は、軟質砂岩1~4を主体としており、浅川層から供給されたことが推定されている。多種多量に消費され、法量重量に富む工具の原材料が遺跡近在にあることが、本覚遺跡を石棒製作の遺跡とした条件として大きいことを考える。他に、敲打段階、剥離段階の工具の原材料も、遺跡近在から入手できる。石棒の原材料が採集される鮎川流域と、成品を供給する小野遺跡群との中间位置に、これらの条件を備えた石棒製作遺跡として本覚遺跡が選地されたと考えるのである。

5 関東地方東部における石棒製作

石棒製作における原石の採集から剥離成形段階までの遺跡としては、中期の群馬県西野牧小山平(恩賀)遺跡[福山1997]がある。茨城県北部の晩期には、この段階の遺跡が鮎川流域に想定されることになる。鮎川流域には、現在のところ、十王堂、池の川の2遺跡が報告されているが、その詳細な内容は明らかでない。剥離成形段階の作業が河原でなされていたとすれば、本覚遺跡へと連鎖

する前段階を、遺跡として検出することは難しい。

本覚遺跡から連鎖する後段階には、小野遺跡群の小野天神前遺跡を推定した。小野天神前遺跡では、一部は遺跡内でも製作されていました。多量の石棒が消費されている。石棒型式の広がり[後藤1987、角田1998]からは、茨城県北部を離れて石棒が流通していたことが想定されることから、本覚遺跡で製作された石棒も、全てが小野天神前遺跡を連鎖の終点とするのではなく、さらに連鎖は続くと考える。新潟県南谷地遺跡の石棒については、茨城県北部の地域において製作された可能性を指摘したことがある[鈴木(2003)]。茨城県南部・千葉県域への流通は、より現実的であり、具体的な検討が必要である。本覚遺跡から大洞式に伴い検出される安行式は、これらの地域との交渉を物語る。事始めはあるが、本書の副題を「関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について」とした所以である。

註1 第70回に掲載した石棒の計測値等は次のとおりである。

回数	石材	長さ	幅	厚さ	重量	所有者	備考
第70回1	粘板岩	290	41	33	621.6	宇都野五郎	
2	粘板岩	146	45	23	221.3	日立勝武雄	
3	粘板岩	89	36	13	53.3	日勝武雄	
4	粘板岩	190	32	22	178.9	宇都野五郎	
5	粘板岩	110	27	22	113.5	日勝武雄	
6	粘板岩	154	20	22	73.5	豊川未由	
7	黑色片岩	96	35	20	45.2	橋田 力	
8	粘板岩	260	40	15	189.6	水戸市立博物館	
9	粘板岩	65	28	28	94.5	日立市郷土博物館	
10	粘板岩	145	44	29	375.3	日立市郷土博物館	分析
11	粘板岩	73	27	8	23.2	日立市郷土博物館	分析
12	粘板岩	124	29	20	81.4	日立市郷土博物館	分析
13	粘板岩	231	27	18	168.0	日立市郷土博物館	分析

*「長さ」「幅」「厚さ」の単位は「mm」、「重量」の単位は「g」である。

参考文献

- 荒井美樹 1997 「宮脇A遺跡発掘調査報告書」日立市文化財調査報告第47集 日立市教育委員会
井上義安 1971 「茨城県縄文文化研究資料収録Ⅰ～V」那珂川の先史遺跡刊行会
井上義安 1985 「高天原 水戸市河和田町地内団地造成工事に伴う古墳および住居址・土壤の発掘調査記録」水戸市高天原古墳発掘調査会
井上義安 1990 「那珂湊市部田山崎遺跡 山崎工業団地土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘記録」山崎遺跡群発掘調査会
茨城県教育委員会 1964 「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会
茨城県教育委員会 1970 「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会
茨城県教育委員会 1975 「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会
茨城県教育委員会 2001 「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会
大森信英 1963 「郷土の黎明」「水戸市史」上巻 水戸市役所
瓦吹 堅 1972 「茨城県日立市尻町の代遺跡(発掘調査の概要)」日立市教育委員会

瓦吹 堅・市毛美津子 1986 「向井原遺跡の縄文式土器について」『茨城県考古学協会誌』昭和60年度 茨城県考古学協会

後藤信祐 1987 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上・下)」『考古学研究』131・132号 考古学研究会

斎藤 孝也 1979 「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県

鈴木素行 1998 「縄文時代の遺構と遺物」『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集 財团法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社・ひたちなか市教育委員会

鈴木素行 2001 「縄文時代の遺構と遺物」『武田西堀遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社・ひたちなか市教育委員会

鈴木素行 2002 「ケンタウロスの落しとし物 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について」『妻良岐考古』第24号 妻良岐考古同人会

鈴木素行 2002 「本覚遺跡への途 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作遺跡について」『茨城県考古学協会誌』第14号 茨城県考古学協会
鈴木素行 2003 「越の旅人 再起篇 一新潟県広神村南谷地遺跡の石棒について」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
住谷久江他 1982 「泉前遺跡(第二次)」日立市文化財報告第12集 日立市教育委員会

角田真也 1998 「縄文石棒の研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯 國學院大學考古学資料館
西村正衛 1979 「小田倉遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県

福山俊彰 1997 「西野牧小山平遺跡(忍賀遺跡)」「関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県教育委員会
矢野 茂 1997 「塙平遺跡」茂木町史 第2巻 史料編 I 原始古代・中世 茂木町

報告書抄録

フリガナ	ホンガクイセキノケンキュウ
書名	本覚遺跡の研究
副書名	関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について
巻名	
シリーズ名	
編集者名	鈴木素行
著者名	鈴木素行・柴田徹
編集機関	
発行機関	
発行機関所在地	
発行年	西暦 2005 年 3 月 31 日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
本覚	常陸太田市宇下宮河内 1.008	8361	30	36° 37' 3"	140° 26' 29"	83 ~ 87 m	20011222 ~ 20020102	45 m ²	
所取遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項									
本覚	集落跡	縄文時代	土坑 ピット 他	3基 2基	縄文式土器(早~晩期) 土製品 石器	縄文時代晩期の石棒製作を確認した。			

あとがき

2004年は、いよいよ「本覚遺跡の研究」をまとめる年である。前半は「十王台式」「恐竜少年」の旅で折り返してからの後半は、掛りきりの日々が続くようになってしまった。但し、没頭というほどではない。この年の休日には、黒澤明監督作品をまとめて観ていた。本覚遺跡の発掘調査を、いつしか『七人の侍』に擬えたりしている。発掘調査の最終日に、全てを終えて撮影した記念写真には、偶々7人が写っていた。もちろん、他にも重要な役割を果たした人物はいる。山間という地形、目的のための集合、地元の方々に方法を伝授し、短い期間をともに過ごした。材質は石でも、刀という小道具まである。自分が勘兵衛の役割を果たし得たかは心もとない。勘兵衛に感情移入するような歎になったことだけは確からしい。発掘調査を終え暫らくして、矢部素子さんより『本学遺跡発掘日誌』が届いた。限定2部の発行だという。ご協力いただいた皆さんのプライバシー保護に大きく関わるので、ほんの一部の抜粋に止めておく。素子さんの文章で、本書を結びたい。

(笑う埴輪)

「我が家が、縄文時代の遺跡の上に立っていると知って驚いたときから、ずっと「いつか、きちんと発掘調査をしたい」と思ってきた。その思いが実現できて、感無量である。

今は埋め戻されて静まり返っている発掘現場に立つと、古戦場を見るような感慨にとらわれる。「ああ、戦いは終わったんだな」という思いである。

大勢の人との出会いと、貴重な経験をさせてくれた石棒に感謝する。」



本覚遺跡の研究

—関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について—

2005年3月31日発行

編集・発行 鈴木 素行

(〒319-2107) 茨城県那珂市下大賀 1-022

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

(〒310-0804) 茨城県水戸市白梅 1-2-11

